

【一目均衡表倶楽部 株式レター】

均衡表の急所 一目山人

株式会社 経済変動総研

掲載された記事を許可なく転載することを禁じます。

Copyright (C) Keizaihendousouken Co.,Ltd. 2006-2013 All Rights Reserved.

《戻り限界を見定めて 底値の予測はまだ早い》

相場は天井を打って急落したばかりである。しばらく景気の良いことは書けないが、底入れを確認したら、大いによろこんでもらえるよう書きたいと思う。

前週のダウ 1880 台は、わずかに二日戻したのみで、1860 台に叩かれてしまった。常識的には、1850 どころは昨年十月二日、そして二月十二日と、二度の頭になった因縁場であるから、だれしもこれを一つのフシと見るのは当然であって、筆者といえどもそれを否定するものではない。1860 台、50 台、一応抵抗が強い。特に十日間以上にわたって下げたアトであるから、底辺からひと戻り入れるのは当然である。

時間的にごく目先をいえば、今週末がちょっとしたフシであるが希望論的にいうと、そこまで戻ればいちばんわかりが良い。むろん戻りにはいくらでも売り物があるから、値幅ではダウで 50 どころが問題であろう。

当面の問題は、何よりもここまで下げるのに時間が短すぎた、、、ということである。その点を重視すれば、一般的に、われもひと大きなフシと見ている 1850 どころで下げ止まるとは、ちょっと考えにくい。1850 どころで止まるためには、この辺で強力なひと反発を必要とするが、値がさ中心で上げ、なお下げたダウだけにここで強力な反発は容易に期待できない。

私は去る六月五日の短波放送でも「ここでダウ 2044 を実現しないで反動に入っても、私の均衡表が逆転しないですむとは考えられない。」と述べたが、その均衡表は六月十二日にははやくも逆転してしまった。天井を打って足かけ三日目であるが、これほど早急に逆転したことは極めて珍しい。この経過を見ただけでも、決して容易の観をなすことはできない。

均衡表はようやく逆転、まだ十日経ったばかりであり、特に均衡表の下値抵抗帯をも下回ったのであるから、その抵抗帯の上限 1950 までの戻りはちょっと考えにくい。目先は戻りの限界を定めることが大事であるが、したがって、まだ底値の急所を云々する時期でないばかりでなく、底値の予測もできない。単なる気持ち上の思いつきや、希望論をいうことはできるかもしれないが、少なくとも実証的にいえる段階にはない。私の均衡表が好転するか、少なくとも好転の見通しがつくまでは、私としては「警戒」の一語につきる。

不景気なことを書いて申し訳ないが、仕方がない。カットは「均衡表の急所」であるが、今日急所のないのが急所であるというほかない。ということは、あまり外人買いや好景気の将来性を頼りすぎて、現在の相場を甘く見過ぎないでもらいたいといいたいのである。こんなにも人気のめいつているときに、こんなことを書くのはあまりにも酷であり、私も決して好むところではないが、書く以上は仕方がない。また景気の良いことを書く時もあるから、今のところ許していただきたい。

今の私としては、これはもちろん確実ではなく、思いつきの程度を出ないが、ここで急激大幅な戻りを入れて、ダウ 1850 台でとまるかどうか。そのつぎは 1830 台でとまるかどうか。とまらない場合でも、1750 どころを考えなければならないかどうか。時間的にもっとも大事なのは七月半ば過ぎであるが、その辺までの経過を見れば、もっとはつきり書けると思う。

ダウの均衡表が逆転しているほどであるから、ここの銘柄の均衡表は大部分売り一本であるが、しかし大体がハ行相場であるので、銘柄の中には十日前から好転しているものもある。いま好転したようなものもあるが、これは、これから週日の経過で本ものかどうかを決定することになるので、次回に書ければ書く。 六月二十三日記

2008/02/17 第 96 号

一目均衡表の急所(2) 一目山人

《今度は押しの限界 相場は特に重大な瞬間》

前週の本欄では戻りの限界を見きわめることに重点をおいて、週末までに 1950 までの戻しは、ちょっとむずかしいと考えたのであるが、実際には休日明けの三十日 1984 である。七割以上の反発であって、私の考えよりは 40 以上も余分に反発している。

この反発の強力であったのは、またまた値がさ株がたちまち急騰したからであって、たとえばソニー一つでダウを約 40 上げている。40 の相違はただそれだけのことである…といってしまうればそれまでであるが、しかし私としては、この 40 の相違は実に重大な問題をふくんでいると思う。戻りの時間関係としては、三十日の朝高が限界と考えてきたのであるがここまで反発するようでは、アト一両日伸びるかも知れない。しかしこれではいずれでも大した問題ではなく、問題はあの一本調子の急落相場が一気にここまで反発してきた以上、私もややハッキリとした構想ができ上がりつつあるのであるが、いまはまだそれを証明できる段階ではないし、いまほど大事な時は容易にない…と考えられるので、単なる予想は厳に慎むべきことだと思っている。

それよりもいまとくに必要なことは、今、来週において果たしてどんな相場を展開するか…ということである。

当面の時間関係でもっとも注目すべきは前週にも書いたように七月半ば過ぎであるが、その前に七月九日前後にやや重要なフシがある。今週から来週にかけては、とにかく反動安を入れる順序であるが、問題はその程度である。今度の反動安にして、やや時間をかけたにもかかわらず 1900 大台が割れない、ということになれば、そこで改めて相場の方向を考えても決して遅くない。

かりに 1900 大台を割っても過般の安値 1866 を割らなければ問題はないが、万に一つ、1866 を割ってくるようなことがあれば、それは半値弱の 1940 台止まりの戻しを入れてのそ

れとはまるで話が違ってくる。

今度の反発が大幅であり、かつ急調子であっただけに、戻りは売ろうとした向きも、もっと戻るだろうと売り惜しみをしているばかりでなく、かえって買っている向きが多い。由来八割戻しの二番天井、ということのアトは容易ならぬ相場となるのであるから、ここで底値が切上がるか、切下がるかは実に重大な問題である。

ここまで急反発した以上、底値は切上がる、と考えるのは、だれしも常識であるに相違ないが、しかしこれほど重大な瞬間にあって急いでそれをいう必要がどこにあるだろうか。私はやはり新しい騰勢力を回復した以外の銘柄は、この強反発において一応玉整理をした方が少なくとも安全である、いよいよ相場の決定的方向が証明された後、改めて出直しても決して遅れることはないと思っているわけで、この相場がかりに引続いて高い場合も、改めて買直す「場」は必ずあるはずである。

果たしてどうなるか、それは今、来週の経過を見定めてから、私の構想を述べるとして、ここで均衡表による銘柄について一言すれば、約一ヵ月半前から、あるいは一ヵ月近い前からカイになっている興人、中外、海上、清水、精工、不二越、日産ディーゼル、トキコ、緑屋等々は時に波乱はあってもなおじゅうぶん余熱を残しているが、新しいところでは、三井建、東洋建、グンゼ、触媒、日産自、東洋工、東急など。さらには日清油、油脂、同和鉱、東京重機などが、今週果たしてどの程度の押しを入れるか。

スパンにおいては来週に持ち越しても良いと思われるものもあるが、とにかくこれらの銘柄は、アト四、五日の日数をかけても、押しの浅いほど有望なものとして注目すべきである。＝六月三十日記＝

昭和 44 年 7 月 3 日 日本証券新聞掲載

2008/03/30 追加号

一目均衡表の急所(3) 一目山人

《なお暫く経過待ち 押し目限度を見定めて》

前週は「とにかく反動安を入れる順序である」として「その程度と限界を見定めるまでは、急いで相場の方向を云々することを控える。相場はあまりにも重大なところへきているので、証明もできない単なる予想を述べることは慎むべきである」という気持ちで書いたのであるが、その後時に多少の波乱は見せたものの、ほとんど押しらしい押しもなく、週末までだいたい堅調をつづけてきた。休日明けのきょうは引けにやや軟化しているものの、それとてもたいしたものではなく、いっそう気迷い状態を深めているが、しかしこのままで一段高へ進む、ということはちょっと考えられない。前週素直に押さなかつただけ、一層反動安への懸念が深まってきたと考えられる。

かりに火曜日にまた高張ることがあっても、前週に書いた七月九日、十日の変化日が迫っている。遅れても週の後半からはやや本格的な押しにはいるのではあるまいか。

当面の相場として、ダウにもっとも影響の大きいのはやはり値がさ株である。五月相場の急騰、六月上旬の急落も、要するに値がさ株の大きな波乱によるものであるが、一気に一六三ポイントも急落したダウが、たちまちにして一三二ポイント、八割強の急反発となった……ということは、まことにめずらしい変動であるが、これもまた値がさ株の反騰によるものである。

かくも値がさ株の大反騰が可能であったという事実は、いったいなにを物語るのであろうか。ただ単に「買気が強大であって、相場の前途がなお大いに高い。それを先見しているのだ」といってしまえばそれまでであり、私も今それをことさら否定しようとは思わないが、しかし、かりにそうだとすると、これほど急激に反騰できたのには、なにか別の理由がなければならぬと思う。

それについて私が考えたのは、値がさ株であるだけ、ことにあまりにも騰落がはなはだしいため、いわゆる大衆はほとんどタッチしていなかったのではないか。外国筋、投信、機関投資家、それに若干のくろうとたちによる騰落だったように思われるのである。だとすれば、今後の騰落もまた、暫くはそれらの人々の行動一つにかかることではあるが、それにしてもこれ以上の高値を造出することは決して用意ではないはずである。これからさらに高値を造出してみても、それには一般はついてゆかないばかりでなく、自己売買同士の間においてもギャップができてくるであろう。

問題は、今来週の相場いかにあるが、今週後半から反動来となれば、当面の反動が果たしてどの程度でとどまるか。目先は一九四五ポイントを割るかどうかが、ということが今の関心事であるが、前週にも書いたように、底値が切り上がるかどうか、とくに大事な問題点である。

むろん私も、ここまで反発した以上、底値の切り上がることを期待しているが、相場が本格的にキマる前に、あえて結論を急ぐことは、必ずや読者に迷惑をかけることになると思う。

当面のダウについてもっとも注目すべきはやはり値がさ株の向背であるが、相場一般とすれば、やはり松下の向背いかんである。値がさ株はとにかくとして、松下さえ好転すればそれで人気は変わってくるが、松下も下げるようなら水曜からの相場の変化が重大である。

前週均衡表による新しいところでは、と書いた銘柄中、もっとも順調なのは東急不であるが、日産自、東洋工などもまあまあというところである。その他については一般的に押しがはいる以上、しばらく様子を見る必要がある。

今はとにかく均衡表にしても、スパンにしても、大いに意欲を燃やすほどの時期ではない。すべては、この押目の限界を見定めてからである。＝七月七日記＝

昭和 44 年 7 月 10 日 日本証券新聞掲載

2008/04/20 第 104 号

一目均衡表の急所(4) 一目山人

《松下の動向に注目 なお押目の経過待ち》

今回は「前週素直に押さなかっただけ、いっそう反動安への懸念が深まってきたと考えられる。七月九日、十日の変化日も迫っている。週後半からやや本格的な押しにはいるのではあるまいか」という気持ちで書いたが、十日に旧ダウ九三〇ポイントと一気に五〇ポイント急落。翌十一日は朝安から戻したものの、休日明けの十四日は一九一ポイントである。均衡表やスパンでギリギリの十日から下げ相場だけに、私としては一応満足して良いわけであるが、しかしダウとしては戻り気分が強ければ強いほどまだ安心はできない。

このつぎの変化予定日は前にも書いたように十八日、すなわち今週の金曜であるが、それから来週の月曜までが大事である。それまでの経過を見定めることが必要であるが、当面の相場一般としてはダウの向背よりも、松下電器の向背いかんが問題である。

松下の変化は前回にもちょっと書いたように前週水曜、すなわち九日からが重大であったが、それというのも八日をもって均衡表にいうところの反動安第一期が終わって、九日から反動安第二期に入ったわけである。そこで下げ相場に入った以上、よほどのことがない限り大きな反騰は望めない。

七月二日六九三円の安値を付けた当時の相場による予測値を見ると、六五四円、六四七円と二つ出ているが、初めの六五四円は前週の金曜日の朝安でつけて、六八〇円まで急反発した。しかしこれが酒田五法にいうところの「化け線」であろうことは、きょうの松下は均衡表から見て、六四八円以下がなければならぬことになっていたのである。事実きょうは六四六円の安値があって、六五六円まで戻しているが、これは前記予測値の六四七円を取ったからに過ぎない。

こんな細かいことはどうでも良いとして、とにかく第一期反動を終って、ただちに第二期反動に入ったばかりで、まだ一期の三分の一の「一節」の時間さえ経過してないのであるから、少々に戻りに気を良くするわけにはゆかない。

なお松下の目先の予測値としては、六三〇円から六二四円、六二三円、とある。ここまですれば、その時の時間関係にもよるが、アトはともかくとして、ひとまず下げとまるであらう。もちろんそこでいくばくの反騰が期待できるか。それらについては来週にゆずるとして、一般的に見てどうも強気が多いように思われる。弱気であっても、高値玉を持続したままの向きが多いのではあるまいか。戻りが強かっただけ油断をしやすいものの、やはり戻りは一応玉整理をした方が安全である、と前々回にも書いたが、果たしてどれほど玉整理が進んだであらうか。

まあ松下の向背によって、ダウもいよいよ良いか悪いか、決まるところも近いと思うが、前回に書いた東急不は、その後もだいたい順調である。ただ松下や武田の大相場出発当時の均衡表とは比較にならないし、全体の相場が整理過程にあるだけ、今後もあまり性急なことは望めまいが、平和の均衡表は前週末から好転すればできる時間関係となってきたので、不動産株一般はとくに注目を要する。

もちろん全体としては散発高にしても、なおカイに大きく力を入れる時期ではない。六月の天井打ち以来、かえって均衡表の好転してきたいくつかの銘柄もだいたい第一期を終った。清水の初めの二八六円、精工の二九一円、トキコの一六五円など、最高値当日に第一期を終っている。

これが一般的に相場の良い時なら、ただちに第二期上昇相場に入れるわけであるが、いまのところその気配もじゅうぶんではない。北辰も十六日で第一期を終るが、その後はどうなるか。来週はいろいろの面で、もっとはっきりするだろう。＝七月十四日記＝

昭和 44 年 7 月 17 日 日本証券新聞掲載

2008/05/18 第 108 号

一目均衡表の急所(5) 一目山人

《相場はキマらない 北辰の今後に注目》

前回は「ダウとしては戻り気分が強ければ強いほど、まだ安心はできない。なお押目の経過待ちであるが、このつぎの変化予定日は前にも書いたように十八日。すなわち今週の金曜であるが、それから来週月曜までが大事である。当面はダウの向背よりも松下の向背いかんが問題であるが、目先の予測値六四六円を取って戻しているものの、よほどのことがない限り大きな反騰は望めない」という気持ちで書いたが、またまた値がさ株の反騰によって、ダウは十八日から上げに転じている。まさに変化予定日の変化であるだけ、私としては、ちょっと樂觀してみたい気持ちになっていたのである。ことに、さる十八日に変化した相場は順調なれば月末の二十九日までは高い、と見るべきであるから、もしそうなれば、それまでの上げ方いかんによっては、いよいよ相場もキマるかも知れない。

そんな気持ちもしていたのであるが、しかしダウの均衡表を見ると、どうもおもしろくない。そればかりでなく、目先好転の希望すらちょっと持てない。すくなくとも今週いっぱいにはダメ。前に書いた二十九日までに好転することは容易ではない。それに六月十日以来における第一部の急落急騰に対して、第二部を見ると、その力のいかにも乏しいことが目につく。第一部ダウは八割戻しであったが、第二部ダウは今にしても五割戻しができるにしている。せっかく変化予定日に変化した相場であるがまだ相場のキメ手にはならない。

結局これからなお高張れば、玉整理を進めて休むのが一番得策であろう。松下にしても、

今日は六七六円まで戻したものの、このていどの戻りや時間関係において、むろん底入れを云々することはできない。もっと時間をかけて経過を見定めて、いよいよ底入れとなれば、それからでもじゅうぶん間にあう。あえて不時向いをする必要はないと思うのである。

それよりも当面とくに目をひかれるのは、北辰である。北辰については第一期を終って、アトがどうなるか、大いに注目していたところであるが、第一期を終ったのが二二一円の押目底であり、その翌日は三千万株以上の大商いのうちに、二四六円の新高値に飛び出した。野村の商いが主となっているが、これについてみんなが思い出したのは、洋レの最高値当時のことのようなのである。しかし洋レは当時すでに老境に入っていた、私のスパンから見れば、最後の第三期が終った翌日のことであった。以来、洋レは三期を二度繰返しても、なお本格的には立直っていない。わずかに再活躍への準備相場を続けているに過ぎないが、北辰は第一に洋レとは人气的にもものが違っている。

もっとも北辰も相場としては必ずしも若いとはいえない。五月の押目安値は一四三円だったから、すでに二ヵ月以上にわたっているわけで、その限りでは、第一期ではない。第三期に相当するかもしれないが、しかし、ここでは大いに注目すべき株である。一般性の良くない時だけに、一つの条件をつける必要は感じるが、その条件としては、今日は二三七円まで押しているものの、これは一節の間において、二三四円を下回らないこと。さらには一節の間において新高値に出ること。できるならば五日以内の再騰が一番良い、ということである。もしこの条件にはまれば、目先二六三円。この一期の終りを待たずして、二九〇円は出現すると思う。その出現のしかたによっては、さらに大なる相場も、じゅうぶん期待されるはずであるが、今はただ、わずかにこの北辰の均衡表構成にもっとも関心を寄せているわけである。

均衡表構成について拡大三期と縮小三期とに分けているが、拡大三期とは第一期、第二期の上げ値幅に対して、それ以上の上げを第三期一本に期するものであり、縮小三期とは第一期の上げに対し、第二期はある条件下において反動を入れ、第三期活躍に入るが、しかし値幅は拡大されないものであって、今の北辰はすくなくとも縮小三期ではないことだけはたしかである。

味の素について書く余裕がなくなったが、今日が第一期の終りである。高値で終るよりもタチは良い…とだけはいえるであろう。＝七月二十一日記＝

昭和 44 年 7 月 24 日 日本証券新聞掲載

2008/05/18 第 108 号

一目均衡表の急所(6) 一目山人

《反発期待は強いが 均衡表ますます悪化》

前回は「十八日の変化日に変化しただけ、もし順調なれば二十九日までは高い、と見るべきであるから、ちょっと楽観してみたい気持ちになっていたが、しかしダウの均衡表を見るとどうしてもおもしろくない。この変化もまだ相場のキメ手にはならない」という気持ちで書いた。その時はワザと書かずに置いたが、ダウの均衡表は変化した十八日の翌日、土曜の十九日に逆転したのである。

均衡表が逆転していると、悪材料がとくにききやすいばかりでなく、ちょっとしたことでとかく叩かれやすい。水曜には一八八八ポイントまで突っこんだわけだが、その後はまたわずかながら戻している。この戻りについて今までとちょっと違う点は、反発期待がだいぶ強くなってきたことであって、相場はいよいよ陰の極である、という人氣が台頭しつつあるが、もしそうであればまことに結構なことで、不景気なことばかり書くのは全くやり切れない気持ちのしている私として、大いに望んでいることは皆さんと変りはない。

しかし前回にも書いたように、ダウの均衡表は容易なことでは好転しないばかりでなく、いっそう良くない経過である。ごく目先的には八月一日を中心としての相場がとくに大事であるが、それまでに大きく叩かれなければ、八月一日からひと反発入れる順序となるであろう。イヤ、かりに叩かれて相場の方向がキマったとしても、一応反騰相場に入ると見るべきだが、問題はそこでの反騰力いかにきわめて大事である。

均衡表からみれば、八月四日から、とくに七日からはやや危険をはらむ時間関係となってくる。それまでに人氣の一変するような相場を展開すれば良いが、つまり大証券がそうした意欲と努力を払うかどうか、であるが、その反騰力が期待に反すれば、アトは相当厄介なことになりかねない、ということをお頭のなかにおいておく必要があると思う。

商いが極度に少ないので、陰の極、閑散にウリなし、と一般にいわれているが、やや長期的な立場でそれが本当にいえるのは、玉整理が徹底したアトのことである。超閑散をどんなに叩いて見ても、相場はもう下がらない。日証金残も減少傾向からとかく増加に転じやすい、といった場合のことであって、そのように相場の戻りを見せても商いは全然ふえない、ということでは、閑散はかえって、目先的にはおもしろくないのではないだろうか。

「相場は相場に聞け」というが、私は決して材料を軽視するものではない。しかし、材料がいかにきくかも、要するに相場のあり方一つであって、その点において、私は均衡表ただ一つを自分の城として、それによってつぎの相場を見、材料のきき方を考えるのである。私としては活躍相場を捕えて、大いに楽観することに本当の意味を感じているもので、およそ不景気なことを書くのは、単に一つのリアクションに過ぎないとはいえ、それ自身はほとんど無意味である。常にそう考えている私として、かくも連続的に用心深い書き方をするのは、いかにもやり切れない気持ちである。この株は大いに高い、と書いて、それで大きく上がったのだ、といわれることは、まことに愉快千万であるが、私が相場は良くない、と書いて、それで相場が悪くなったのだ、といわれることは絶対にイヤである。

いつもそれをとくに慎んでいるが、そんな気持ちから、こんな時でも何か少しでも景気の良いことはないか、と思って前回北辰を書いてみたが、それでもやっぱりダメであった。

もっともダウ均衡表の悪い時ではあり、北辰の均衡表もまだまだじゅうぶん構成を終わって
いなかったもので、構成への条件は書いておいた。すなわち「一節の間において二三四円を
下回らないこと。できるならば五日以内の再騰が一番良い」という条件であったが、みな
さんがそれをご覧になった時は、すでに二三四円を下回り、しかもそれはちょうど五日目
であった。これでご迷惑はかけずにすんだが、まだ散発高にも追随すべき時期ではないこ
とを示唆しているようである。なお前週のダウは酒田足から見てもとくに良くない。＝七
月二十八日記＝

昭和 44 年 7 月 31 日 日本証券新聞掲載

2008/06/22 第 113 号

一目均衡表の急所(7) 一目山人

《突っこみ後の反発 最も重要な時間的变化》

前回は「反発期待は強いが、均衡表は一層悪化してきた。閑散にウリなしというが、戻
りでの閑散はかえって良くない。ただし目先的には八月一日を中心としての相場がとくに
大事であるが、問題はそこでの反騰力いかんがきわめて大事である」という気持ちで書い
たが、翌火曜には一八四五ポイントと六月二十一日の一八六六ポイントを一気に下回って
きた。

私が前回の分を書いた七月二十八日にはすでに大証ダウは新安値にあったので、東証ダ
ウの新安値突っこみは、だれにも容易に考えられたことであるが、ただ、そこで私がウツ
カリしていたことは、ダウの新安値となれば、前に何度か書いた七月二十九日、という変
化日が、もっとも有力なかたちで再生されて来るということであった。上または下の極で
なければ有効でないものと、その中間でも有効なものとの変化日があるが、この辺に時間
関係の非常にびみょうな、かつむずかしさのあることを、ぜひこの際記憶しておいてい
だきたい。八月一日といったのはダウの上のことで、各銘柄としては、二十九日であっ
たのである。

これは均衡表によるものではなく、スパンとしてとくに大事なところであったが、しか
しこの大事なところでの反発によって、今後の相場のあり方について、これまでとった考
え方を変えなければならぬかもしれない、ということ、今私はとくに感じているのであ
る。

ダウについていえば、この「均衡表の急所」の第一回に「ダウ一八五〇台でとまるかど
うか。そのつぎは一八三〇台でとまるかどうか」と書いたが、実際は一八六六で、それか
ら大きく戻して、今度が一八三〇台であった。

それと今一つ、七月三日まで戻した一九九八によって、私がN反動と称している計算値

が一八三五ポイントであって、三十日のザラバでそれを実現、今日までの反騰となったのであるが、むろんダウの均衡表好転は期待できない。しかしその限りでは一八九七ポイントまでの戻りが当面の限界であって、それを突破するか否かが目先の重要なポイントとなるわけであり、突破のしかたによっては、その後の相場に対する考え方も変って来るわけであるが、もちろんこの戻りは八月一日を中心とする当然の自律反騰である。それ以上のものではあり得ないから、前回にも書いた八月七日以後が問題であって、そこでまた売られると見るほかない。

去る三十日の突っこみによって、ダウは完全に下値を切り下げたのであるから、この戻りが強くて弱くても、決して油断することはできないが、ただしかし、私がいま、従来からの考え方に対し、いささか反省しつつあるのは、ダウのそれよりも個々の銘柄のスパンがあまりにも見事にものをいっていることである。一期、ないし二期の終りと共に大きく反騰したものが少なくないが、それは大証券の方寸によるにしても、あまりにも見事である。そこで私は、いま一、二回結論を出すのを保留しようと思っている。

下値を切下げた以上、九月なかばまでにダウ〇〇〇〇台はすでに必至である、と書くつもりであったが、活況相場を予測するのであれば、ともかく、不景気なことをいい急ぎをする必要はない。この戻りを終って、今一度突っこむことは、これは何人も否定できないことだと思われるが、その突っこみの程度を、時間関係とにらみ合わせて、それから結論をくだしても、決しておそくないと思う。

その突っこみによって、ダウはとにかくとして、個々の銘柄のうちには、私の均衡表が好転し、しかも再活躍への構成を完全にするのではないか、と思われるものも相当ある。もちろんこれは構成を終るまでは単なる予想に過ぎないが、たとえば化薬、日本電気、横河、光学、明葉などは週間足の均衡表から見て、こんごの押目は、すくなくとも一応買って良い、ということになっている。

もっとも、これは週間足によるもので、非常にすばらしい時もあるが、時に人気化株以外にはロスもある。いま責任は持てないが、これからがもし、こんごの突っこみにより日足の均衡表構成を完了すれば、大いに有望となる。もしそうなればその他にも均衡表構成を見るものは相当数に上り、ひさしぶりにちょっと希望のもてることにもなりかねない。

そんな希望をもちながらこんごの突っこみを見定めたいのであるが、こんごの変化日は八月二十三日、二十八日が大事である。＝八月四日記＝

昭和 44 年 8 月 7 日 日本証券新聞掲載

2008/07/20 第 116 号

一目均衡表の急所(8) 一目山人

前回は「ダウ一八四二ポイントと六月二十一日の安値一八六六を下回ったので、いよいよ相場はキマった。目先はとにかくとして、九月十七日までにダウ一七三〇台が必至である、と書くつもりであったが、新安値により二十九日の変化日が改めてものをいい、スパンとしてはまことに申し分のないものであり、かつ三十日のダウがN反動であったため、これはウカツに大勢観は書けない。時にやや大きく変化するかも知れない、と思い、一、二回保留しておいて、七日以後の反落とその程度を見定めてから」という気持ちで書いたのであるが、さすがにスパンのきわめて重要な時間的変化における大きな変化は、大証券の方寸によるものとしても大いに価値のあるものであって、さる八日には一八四四まで急落したものが、週末はフランの切下げを材料として、土曜は一気に反発した。

休日明けの今日は、マルクの据置き声明などにより模様ながめに波乱商状を繰返していたが、しかし今月に入ってから反発が小幅であっただけ、ここで一八八ポイントを上回ってくれば、前回のスパンが良かっただけ、ちょっと有望になってくる。それに今一つ。均衡表の受動面としては今日すなわち八月十一日の変化日が記録されているだけであって、相場が一だんと反発しない限り、アトしばらくはないことになっている。受動的というのは、過去の騰落と商いによって、自然に出てきたものであって、前回に書いた当面の変化日八月二十三日、八月二十八日は能動的な変化日、つまりこれからの騰落によって、当然起こるべき変化日である。この受動と能動と相場の三者総合によって、大天井、大底を見定めんとするものであるが、とにかく今日の変化日はとくに大事であって、この変化日に材料が出れば、その効果は大きい。

この日を過ぎてダウ一八八をを上回ってくれば、とにかく強気に分がある、と見ねばならぬわけである。しかもその後の人気がかんによっては、相場の本質が変わってくることもあり得るわけであるが私が前回において結論を保留したのも、そうした変化の可能性が均衡表、とくにスパンに現れていたからであるが、もっとも、フランの切下げに続いて、その連鎖反応が継起するかいなか。さらにはそれを機会に外人買いが再燃してくるかどうか。こちらのことをいえば、大証券がこの機会にどんな方寸をもって臨むか、などということが当面の関心事であるが、しかしいづれにしても、このフラン切下げは、かつての相場上昇期における通貨不安のように、株式相場の買材料一本と見ることはできない。国際的高金利との関係も考慮しなければならないが、何よりも当面の株式相場が整理過程にはいつて、まだ日が浅い。一本調子の下げでなく、殆んど玉整理が進んでいない、ということが問題である。したがってここでは、私はつぎのように考えている。

ここで果してどれほどの反発力がついてくるか。その程度いかんが、何よりの問題であるが、しかしもっと根本的な問題は、これからの反発によって、果して出来高がふくれるかどうか、さらには玉整理が進むかどうか、ということである。戻すにつれて商いが細り、しかも玉整理が進まないばかりでなく、かえって買玉がふえるようでは、戻すだけ、アトが厄介である。ダウの均衡表を見ればいくら相場が戻しても上値には大きな抵抗帯が傘にかかっている。ダウが均衡表を好転させることは容易でない。しかも下値にはまだ抵抗

帯はできていないからである。

ただし、それはそれとして、前回に書いた週間足によるものの化薬、日本電気、横河、光学は、その後の経過も悪くない。さらには東亜港、五洋、鐘化、大正製薬、エーザイ、千代田、石井、三協などもやや有望である。これらのうちには、均衡表が完全に構成されるものも出てこようから、それは構成されてから書くことにしよう。なお、大して意見が変化することはないと思うが、八月十四日に短波放送をする。参考のため聞いて頂きたい。
=八月十一日記=

2008/08/17 第 120 号

一目均衡表の急所(9) 一目山人

《中間反騰か否かは 28 日までのダウに注目》

前は「当面最も大事な変化日八月十一日を過ぎてダウ一八八ポイントを上回ってくれば、相場はかなり有望になってくる。ここで果してどれほどの反発力がついてくるか。その程度いかに、何よりの問題ではあるが、もっと大事なことは、これからの反発によって、出来高がふれてくるかどうか、玉整理が進むかどうか、それを見定めてから、相場の大勢的方向を決定する」という気持ちで書いたのであるが、十二日には一九〇〇大台乗せ、十三日には一九一〇まで反発して、その後押しを入れている。十三日のザラバでは一九九八の戻り高値からの半値戻しを入れたことになるが、その間商いもできて、前週は八億株弱に達している。

日証金残は売り玉がいくぶん増加（特に値がさ株のそれ）したのが注目される程度で、もちろん玉整理のアトは見られない。しかし出来高さえできれば回転もきいてくるし、中味も変わってくるわけで、まずは順調な経過というべきである。

十四日の短波放送では（十三日録音）「十三日でひと頭を打ち十八日まで押してから二十八日まで高い、と見るべきであるが、その時、果してどれほど反発できるか。その程度いかに非常に大事である」旨を話したが、今日十八日はちょっと引締めている。今日一日安くて、十九日に突っこみ安値となるのが一番好都合であるが、ダウはともかく、個々の銘柄にはそうなるものも多いはずである。そんな細かいことはどうでも良いが、問題はこれまで何度か書いてきた八月二十八日までの高さである。

もっとも、これはダウに関するもので、個々の銘柄では一、二日早くなるものが少なくないはずであるが、とにかく二十八日までの高さによって、その相場がたんなる中間反騰であるが、あるいは本格的出直しとなるかが、ハッキリすることになる。

ところで均衡表をみると、東証一部の時価総額五〇円当たりは、十四日に好転しているが、ダウも明十九日には好転する。これが好転してくれば銘柄別の相場にもハズミがつい

てくるわけであるから、真に根底の強い相場なれば、二十日以後に相当活気を呈するところがなくてはならぬはずである。(もしそうでなければ一つの急所となる)はたしてそうなれば、前々回いらい書いてきた銘柄のほかに、約三十銘柄に及んでいる株の、均衡表がひとまず構成を整えてくることになる。

前週もっとも理想的な構成を経たのは同和鉱であったが、これはダウより少し遅れて、月末から九月一日ごろの相場が大事、ということになりかねないが、何分にもこの記事が皆さんがご覧になるのは、二十日の午後か二十一日の朝であって、アトいくばくの日数もないので、ここでは新しい銘柄を書くことは控えることにしたい。その理由としては、かりに予定通り二十八日までダウが高い場合でも、それによって反騰第一期が終るのであるから、その後はとにかくひと押し入れることは必至である。かりにこの反騰が本格的出直りのものであるとしても、あらためて買直しはきくはずである。

いわんやたんなる中間反騰ではない、という証明は、今のところまだない。その証明がハッキリするまでは、少なくとも中間反騰であった場合でも困らないように、二十八日までの高値において、ひとまず自己の玉整理をする、という心構えが必要だと思う。回転など問題にしない強力者はとにかくとして、一般者としては、いつでも自由に動ける、という姿勢を取ることがこの際は大事だと思う。

ただし、カラをウルことは、相場の大勢方向が決定するまでは厳に慎むべきであって、すくなくとも二十八日前後を見定めるまでは、控えるべきである。材料的にみればフラン切下げの連鎖反応は、あってもモット先のことであろうが、日銀の公定歩合引上げと、日証金の証拠金率引下げが、なるべく早く実現することが望ましい。

もし相場が本格的に出直るとしても、あるいは中間反騰に終るとしても、その二つの材料が実現してからの問題であろう。二十八日までにそれが実現しないとすれば、二十八日の重要性は一段と加重されるわけである。=八月十八日記=

昭和 44 年 8 月 21 日 日本証券新聞掲載

2008/09/07 第 122 号

均衡表の急所(10) 一目山人

《まず自己の玉整理》

前回は「十三日を高値に十八日まで押し、それから二十八日までの高さによって、中間反騰かいなか。すなわち過般の一八四二ポイントを底として本格的出直りとなり得るかいなかを決定しよう。十八日が突込みでなく、戻しを入れていたことにはいささか不満であったが、とにかく二十八日までのダウに注目しよう」といった気持で書いた。しかし十三日以降ズッと朝高の引け安を繰り返しつつ、ついに二十二日の一八七二ポイントまで突込

んでしまった。二十二日は七月三十日以来の反騰相場によって、自然にでてきた変化日であって、あるいはそれまで下げるかも知れない。ということは前回の記事を書いた十八日にも考えられたところであった。ことに二十一日までは均衡表でとくに大事な基準線が下降を続ける。以後は暫く横ばい、ということになるが、とにかく下降するので、その懸案のために「十九日ダウ均衡表の好転と同時に二十日以後に相当活気を呈するところがなくてはならぬはずである。もしそうでなければ一つの急所となる」とカッコしておいたのであるが、懸念どおりになってしまったが、それだけに週末の二十三日もたいした変りばえはしないし、きょうの朝高も引け安に終わってしまった。

こうした経過は目先的にもきわめて重大であって、十三日頭に対して、十八日あるいは十九日朝が底とならなかったこと、そのことがここでははなはだ面白くないのである。

しかしそれはまだ良いとしても二十二日の変化日以後二十八日まで急騰すれば、それ以前の不快指数を帳消しにできるのであるが、それでもダメだとすれば、ひとまずこの相場は中間反騰であって、本格的出直りにつながる可能性は乏しい、といわざるを得ないのである。

もちろんそれを決定づけるには二十八日で決定できない以上、二十八日以後若干の経過を見る必要がある。二十八日以後、とくに大事な変化日である九月十七日を経過するまでは、あるいは決定できないかも知れないが、値幅からいえば、それまでに旧ダウ一九二〇ポイントを上回り得れば事態は変わってくる。この相場が本格的出直りである、と決定するためには、すくなくとも二十八日を経過したアト、あまり遠くないうちに、一九二〇ポイントの関門を上回ることであるが、いまの段階において大手証券は果してどう考えているのであろうか。

仮りに大手証券や投信に、そうした積極的な意欲があるとしても、材料がそれを支援するかどうか。フラン切下げの連鎖反応は、今のところ一般の期待に反している。所詮はポンドの切下げ、マルクの切上げを見ても、よほどのことがない限り、結局のところプラス、マイナスされ易い。公定歩合引上げも、ところの処大体織込み済み。ただ決定されさえすれば、それを転機として相場は高い、とみんな知っているが、果してそうだとすると、それも相場の居処いかんである。輸出金利の引上げはまだじゅうぶん織込んでいない、という懸念もあるが、何よりも問題なのは市場の内部要因、とくに玉整理がまだじゅうぶんでないことである。

ただ最近のように、相場が軟調であれば極度に商いが細る、という現実には、何かいい知れぬ根強さを感じないでもないが、しかし、これでは玉整理は徹底しない。玉整理が徹底しないでは出直れないが、しかし玉整理されて日証金残が減少するようでは、上に望みはかけられない。この二律背反をどう乗り切るか。それには、まず時間がかかる、とみななければならないが、時間がかかることは、何よりも今までの買方が痛い。

「外人買い」ということが時々伝えられ、それによって相場も若干動いているが、いましばらくは外人だのみに多くを期待することは良くない。十九日に転換せず、二十二日ま

で押したために、せっかく期待した銘柄別の均衡表も構成未遂に終わってしまった。

今からしばらくは、何よりも自己の玉整理を急ぐべきだと思う。アトはとにかくとして、アトはアトのこととして……。＝八月二十五日記＝

昭和 44 年 8 月 28 日 日本証券新聞掲載

2008/09/14 第 123 号

均衡表の急所(11) 一目山人

《本格的な出直りへ 恐らくは大相場に展開》

前回は「十九日にダウの均衡表が好転したにもかかわらず、二十二日まで押した。結局二十八日までを見なければならぬが、この相場は、ひとまず中間反騰と見るべきであろう。この相場が本格的出直りと決定するためには、二十八日を経過したアト、あまり遠くないうちに、一九二〇ポイントの関門を上回ることである」という気持ちで書いたのであるが、規制解除とともに、二十八日には一九〇九ポイントと急騰、ついで二十九日には一九二三ポイントと早くも関門を突破。前々回に「二十八日までの高さによって、この相場がたんなる中間反騰であるか、あるいは本格的出直りであるかがハッキリする」と書いたが、これで七月三十日の一八四二ポイントの底入れ確定、本格的出直り相場の第一歩を踏み出したものとみるべきであろう。

前週末公定歩合の引上げを発表、相場はちょっと高ナグレとなったが、休日明けの今日は悪材料出尽しとして、ダウ一九五〇ポイントまで奔騰している。これでカサにかかっていた抵抗帯をも突破。

前週における変った点をみれば日証金の借株残が急増、融資残が最近の最少となってきたことであり、売買高も急増してきた。もちろん、まだシコリ玉は残っていると考えねばならぬが、相場が本格的出直りと決定した以上、アトはただ時間の問題である。ある時間と波乱を経たのちに、融資残が急増してくれば、それから相場に弾みがついてくるであろう。

一般的にはこの上旬高を期待しているようであるが、ダウとしては二十八日で第一期を終ったばかりである。ただちに第二期に連続したわけではあるが、今日は、あたかもダウの目先変化日に相当している。

こまかいことをいえば、今日九月一日を目先の戻り高値として、またひと押し入れるのが一番順調な経過…ということになるが、もちろん、これは押しても今週一杯であって、この段階では深押しの懸念はない。しかし、これまでどうしても好転しなかった第二部ダウの均衡表が、今日好転した。これで第一部の相場にも力がついてくるので、このまま二、三日続進するかも知れないが、当面の問題はV一九五〇ポイントから、E一九七七ポイン

ト前後である。前者は今日実現したが、Eがいつ実現するか、このまま連騰して実現しないともいえないが、こしばかりのダウに関するかぎり、値段よりも時間が大事であって、前記の値段が出現するまでの時間が、その後の相場をみる上に非常に重要な意味をもってくる。

むろん、そこではやや見るべき押しを入れるであろうが、その押しまでを見きわめればその次の相場と時間はハッキリする。もし、それがきわめて理想的であるならば、七月三日の戻り高値一九九八ポイントを上回ってから相場は大きくなるが、いくら景気の良いことだからとて、あまりに先走ったことを書くのは慎むべきであろう。それはその時にまた改めて書くとして、果して明日から押しを入れるとすれば、その押しは絶好の買い場である。

前回には「折角均衡表が構成しかけたものも、構成未遂に終わった」と書いたが、その後たちまちにして、ほとんどすべて構成し終った。もっとも途中で構成未遂、といったほど四、五日のズレがあっただけ、三、四月相場における松下や武田のごとき、まったく理想的な構成ではない。当時の松下や武田を二〇〇%の構成とすれば今度の構成は同和鉱が一六〇%。その他は一二〇%くらいであるからここで押しを入れなければ、これからの高値を飛びつけない。

はたして、ここで押しを入れれば、この記事を読まれたアトの悪目に対して、ご自分の引っかかっている銘柄で、二十二日以来、大きく上げた銘柄をどうぞ…ということにとどめておいて、読者へのサービスは、理想的な均衡表の構成を見出してからにしたい。

同和鉱については前々回にも「前週もっとも理想的な構成を経たのであるが、これは少し遅れて九月一日ごろの相場が大事」と書いたとおり、今日で第一期が終る。今日がちょっとした高値になることはたしかだとしても、第二期につながる可能性は強い。また買い直すとしての利食いは勝手だが、カラを売ってはならない。=九月一日記=

昭和 44 年 9 月 4 日 日本証券新聞掲載

2008/10/26 第 129 号

均衡表の急所(12) 一目山人

前回は「あたかも今日は(九月一日)から、ひと押し入れて良いところであるが、これまでどうしても好転しなかった第二部の均衡表が今日好転してきた。これが好転すれば、第一部の株にも力がついてくるので、このまま続伸するかも知れない。当面の問題はV一九五〇からE一九七七ポイント前後であるが、前者は今日実現した。Eがいつ実現するか、このまま連騰して実現しないともいえない」といった気持ちで書いたが、その後もほとんどゆるみなく、五日には一九八四ポイントと、すでにEを実現してしまった。第二部の好

転とともに、やや型破りの上げ相場を実現したわけであって、そうした相場そのものが本格的出直りとなった証拠ともいえるであろう。

一部には、この反騰によっていわゆる高値の三尊、酒田足でいうところの三山になるのではないかと、弱気観を捨てない向きもあるようであるが、前々回にも書いたように、ダウ一九二〇ポイントを上回った以上、さらに今日までの続騰となつては、とうてい弱気に組することはできない。均衡表の逆転なども、このままでは容易に考えることはできないのである。

しかも、この奔騰相場によって日証金の借株数はだいぶ増加してきたが、その増加以上に金額の増加が大きい。活躍した値がさ株のウリによるものと考えられるが、このダウの奔騰そのものを詳細に見れば、ごく一部分の値がさ株中心によるものであって、市場論的に見ればやはりウリ玉が狙われたといった感じが非常に強い。その限りにおいては、まだ本格的奔騰を展開するほどのエネルギーは十分でない、と考えられるわけであるが、しかし、だからといって、一部の人の操作によるものとだけ見て、この相場を軽視してはならないと私は思う。ちょっと手を添えれば、相場はこれだけ奔騰したという現実の底力を重視しつつ、今後の成行きを見守る必要があると思う。

もちろん、ダウもすでに七月三日の戻り高値に迫ってきた。前週末の九月六日では二番底からの一期を終っている。休日明けの今日もまた強調を続けているが、これはどんなに強ばっても、両三日のことであって、十日以後は何はなくとも反動を入れると考えざるを得ないのである。

もっとも、ここまで成功してきた相場であるだけに、大証券や投信の向背いかんは今後の相場に大きな影響を与えることはいうまでもないが、しかし今月は業者の決算月である。手持ち株が一応はけてしまえば、アトは来期の楽しみということになるのではあるまいか。

前週の相場はやや型破りであっただけ、その調子が今週も続くということが絶対にないとはいまのところいい切れないが、今日以後、いたずらに相場が強ばることは目先のにも決して良いとはいえない。もし、それ九月十七日までよいようだと、そのアトの相場のあり方はよほど変わってくる。

ウリ玉はだいぶ増加したとはいえ、相場の力強さを見て、経過待ちにさし控えているウリ方も潜在していることであろう。相場が行きつかえたとみたとき、そうした向きがどう出てくるか。前週型破りの奔騰を続けたアトだけにこのまま大きく奔騰するか、そうでなければいよいよひと反動ということになるが、私は今のところ後者でなければならぬと考えている。

そのために、今後の反動を見定めるまでは、とにかく大勢観は書かないことにしたい。けだし、今後の反動がはたしてどの程度のものであるか、さらには、はたしていく日の時日を必要とするか、それを見定めることによってこの相場の大勢観的値頃と、時間関係もハッキリするからであるが、それを見定める前に、へたに大勢観を書くと、それによって高値に飛びつかせる危険性が絶対にないとはいえない。すべては、ハッキリしてからで十

分間に合う相場である。

読者諸賢の期待されるお気持ちがわからぬわけではないが、それがわかっていればいるほど私のペンは用心深くならざるを得ないのである。しかし今後の反動安の限界を見れば、やや奔放に書けるかも知れない。＝九月八日記＝

昭和 44 年 9 月 11 日 日本証券新聞掲載

2008/11/02 第 130 号

均衡表の急所(13) 一目山人

《九月十七日以後の大事な変化を見定めて》

前は「休日明けの今日もまた強調を続けているが、これはどんなに強ばっても、兩三日のことであって、十日以後は何はなくとも反動を入れると考えざるを得ないのである。もっとも大証券や投信の向背いかんは今後の相場に大きな影響を与えるわけで、前週の相場がやや型破りであっただけ、その調子が今週も続かないとはいえない。もしそれ、九月十七日までよいようだと、そのアトの相場のあり方はよほど変わってくる」といった気持ちで書いたが、九日のダウは二〇ポイント急落、十日の朝寄りを叩いたのみで、相場は急激に好転、週末は二〇〇〇ポイント台に乗せた。

銘柄別に見れば、わずか三十数銘柄にすぎない値が株中心であるが、かくも一本調子の高騰を続けたのは、前回にも書いたようにウリ玉が徹底的に狙われているからであろう。六月から八月上旬にかけて、ずい分とウリ玉をすすめた向きがあるようだが、最近の奔騰が急激であったため、気がついた時は大きく引かれていて、フムひまがなかったという向きが多いようである。

そうした時に当って、最近私の書いてきたことが、はたして助けになったかじやまになったか。昨今大いに反省しているのであるが、最近私の耳に届いたところでは「この十二回にわたって均衡表の急所を読んできたが、一度も本当には買わしてくれなかった」ということである。それもそうだろうと思いつつも、この機会に少しいわけをさしてもらえば、均衡表が好転したか逆転したか、それを中心に書いているのだから、まずそれで商いをしてもらうことが一番良い。銘柄を期待されていることは、わかり過ぎるほどわかっているが、期待が大きいければ大きいほど、なかなか容易には書けないのである。

私としては「この銘柄を」と書く以上、十円の下値もない、二、三日のゆるみもないものを書きたい。しかるにこの原稿は月曜の正午に書いているが、読者の目にふれるのは、早いもので水曜の夕方、普通の人には木曜である（今週だけは金～土曜日）。一例をあげれば、前週の火曜日、九月九日に小松が二五五円の安値引けとなったが、これはスパンにおける〇印のついた翌日であり、この安値引けによって、均衡表から見れば、押目完了、と

ということが決定したのであるが、その翌日から連騰して週末は二九七円の高値引けである。均衡表を製作している人には、翌十日の二六〇円台は安心しきって買えるのであるが、記事では、その時、書き加えたとしても、ちょっと間に合うかどうか疑問を持つ。

しかも、いわんやである。みなさんが銘柄を期待されていると思えば思うほど、一〇以上の銘柄をまとめて書くなればともかく、一つや二つの銘柄を書いたらどうなるだろうか。みなさんの気が合って一気に買われるとすれば、アトはいったいどうなるのだろうか。書く以上は、そこまで見究めねば書くわけにゆかない、ということになるわけである。いいわけが長文にわたったが、こういう私の考え方をご承知願って「どう読み取るか」ということに重点をおいていただきたいと思う。

サテ話を本論に戻して、ズッと前から九月十七日の変化日が、かなり重大であることを書いてきた。前回にも「そのアトの相場のあり方はよほど変わってくる」と書いたが、はたして十七日の変化日に変化するかどうか。もちろん、それによって大天井を打つ、というようなものではないから、あまり神経質に考える必要はないが、今の私としては、この変化日の以後を冷静に見定めたい。それだけで、他に多くをいう気持ちはないのである。

十六日から十七日にかけて、はたしてフミ上げ相場となるかイナか。当面大きな関心ごとではあるが、それはともかくとして、いくら型破りの相場でもここまで一本調子に上げてきた以上、それによって大天井への寿命が短縮されるか、あるいは延長されるか。さらには大天井値段が縮小されるか、増長されるか、などなどについても、すべて次回以後にゆずりたいが、ただ通貨不安は遠のいたといわれながら、平和が前週十日の三〇五円でスパンの〇印がついた。このことは十一日短波放送にも知らせておいたが、アトどうなるかちょっと注目したいところである。=九月十五日記=

昭和 44 年 9 月 20 日 日本証券新聞掲載

2008/11/23 第 133 号

均衡表の急所(14) 一目山人

《ダウ高値二二一五 確定は今後の反動いかん》

前回には「前々からマークしてきた九月十七日が迫ったので、その後の変化を見定めることにする。大天井の時期と値幅が延長されるか、あるいは縮小されるかも、それを見究めてからにする」といった気持ちで書いたが、旧ダウは十八日に一日だけ急落したのみで、アトは今日まで小幅ながら連騰して、ザラバでは二〇二〇ポイントもあった。しかし、いぜんとして三十数銘柄に過ぎないひとにぎりの値がさ株のみで、ハ行現象はとくにヒドく、その他の株は意外に下げたものが多い。値がさ株はダウ以上に上げたわけであるが、ダウの上からみれば、この大事な変化日もちょっと敬意を表したに過ぎない。

しかし、一般的にみれば、やはりかなり変化しているわけであり、十七日以後も決して単純ではない。現に今日はダウばかりでなく、大幅に上げた値がさ株の大部分の銘柄にスパンの○印がついている。ここまで一本に上げてきたのは、たしかにドライな外人買いと、それにちょうちんのついたための型破りの相場であるが、今後もそうした点で、とかく調子を乱されることは十分に考えのうちにしておく必要があろう。しかし、私としてはあくまでも本格的な変動を基準として、その日その日の調子の乱れを見てゆきたい。今日ダウをはじめ、多くの値がさ株にスパンの○印がついたことでもあり、ここでの押しと程度を見定めねば、本当の大勢観は決定しない。

ところで、この「均衡表の急所」も、今日で連続十四回におよんだ。一目均衡表の見方、考え方もだいたいわかっていただけたと思われるので、この稿をもってひとまず打ち切って、しばらくは一目均衡表の読者サービスに力を入れたいと思う。この約二十日間に質問を受けたもの六二九。有望銘柄のために質問券を預かったもの四三八におよんでいるが、いうまでもなく、今後も引続いてくることであろう。数が多くなればなるほど、銘柄選別が非常に困難となるばかりでなく、結局、いくつかのグループに分けなければならないと思うが、それほど銘柄がみつかるかどうか。このへんでやや長期の変動が入れば良いが、そうこうしているうちに、あるいは大天井を知らせるということになるかもしれない。

しかし、いまのところまだ大天井の値段と時間はハッキリ決定していないが、本稿を今日で一応打ち切るので、未確定ながらダウの値段だけを述べておくことにしよう。

相場がこのまま続騰しないことが第一。ここで押しを入れる。その押しは時間はかかっても良いが、あまりに深くないということをも第二の大前提として書くのだが、まず七月三日の旧ダウ一九九八ポイントを中心点とすれば、V二一五三ポイント以上ということになるが、これはすでに実現するものと見て、だいたい良いのではないかと思う。その上は六月十日の二〇二九ポイントを中心点としたV二二一五ポイント以上ということになるが、それも実現性は相当有望性があると思われる。

さらには前記二〇二九ポイントを中心点としたE1の二三〇八ポイント、E2二三六八ポイント、E3二四一八ポイント、計算すればまだその上もあるが、いまはそこまで考えたりいったりする必要はない。

ただ、二一五三、二二一五ポイントが正しく出現するかどうか。さらにはそれが出現した場合、そこではたして大天井打ちとなるかどうか。それらを決定するものはいうまでもなく「時間関係」であるが、それもここしばらくの波乱日数にかかっている。

ここで依然としてなお一本調子の値がさ株を続けるならば、それは将来のために決して良いとはいえないが、ごく目先のことをいえば、二十六日の配当落ちがどんなかたちをとるかである。三、九月の配当落ちと、その後の相場のあり方はとくに大事であるが、配当

落ち後は高い…というのは、すでに一つの常識化されている。

はたして、ここの反動が軽微に過ぎて配当落ち後高いとすれば、十月十四日から十七日までが非常に大事な変化日となる。そうした場合は、相場の値段も時間も短縮されると今のところ考えなければならない。

長い間ご愛読下さって、ありがたく思います。最後にこの欄をお借りして私事を申すのは恐縮ですが、一目均衡表の「正誤とスパンについて」を近く発送いたします。いま多数申し込まれている研究会のご希望も、それをご覧のうで改めて… =九月二十二日記=

昭和 44 年 9 月 26 日 日本証券新聞掲載

2009/01/11 第 138 号

均衡表の急所(15) 一目山人

《今度は確定するか 十月十七日後の波乱で》

前回は九月二十二日記で終わったが、その時は「型破り相場の連続であるから、今後もそうした点を十分考えのうちに入れておく必要があるが、私としてはあくまでも本格的な変動を基準として、その日その日の調子の乱れを見てゆきたい。ここで当然のひと押しを入れれば、それによって大局的天井値と時日も決定されるが、今およそのことを書いておけば二一五三、二二一五ポイントの出現が有望である。ここから依然としてなお一本調子の値がさ株高を続けるならば、十月十四日から十七日までが非常に大事な変化日となる」といった気持ちで書いたが、その当日九月二十二日の二〇一六・八五ポイントを頭として、二十七日には一九六七ポイントと高値から四八の下げとなった。これで当時の私としては一応面目は立ったわけであるが、しかしアトたちまち奔騰したので、天井値と時期を決定するところの、スパンとトレンド構成法と称しているものの構成は十分ではなかった。

ただし、九月十九日の高値二〇一六・七ポイントを頭として計算すれば、かろうじて「構成」したことにはなるが、あまりハッキリしないので、今もなお疑いをもっている。もし構成済みとすれば、E一九〇ポイントの出現時期は十二月なかば、ということになるが、まだ決定しかねている。

ところでその後ダウは一本調子に上げて、前週末は二〇四四ポイントであり、今日は二〇六八ポイントとさらに高い。しかしその割りに大証ダウは添わないが、八月以来予定していた十月十七日の変化日もいよいよ迫ってきた。九月二十二日以降の変化によって新しく出てきた計算日はV二〇六五、NT二〇九四ポイントであって、Vは今日実現。十七日までには後者を実現するかも知れないが、この変化日は今までの経過からみてもかなり重大である。

まさかこれで大天井打ち、とはまだ考えられないが、何分にも、この極端なハ行振りを見ては、まともな相場とは思えない。ドライな外人買いと投信の巧妙な入れ替え。それに一部のクロウトや意外に大量のシロウトウリに対して、値がさ株一本に絞った小口買い方の集中、などなどによるものであろう。あまりのハ行なのでダウでは相場の本態はわからなくなっている。

わずか四〇たらずの銘柄が大きく躍るだけであって、ソニー一つでダウ一〇〇ポイント上げである。アトの数百銘柄はまるで株ではないような扱いを受けている。マルクの切上げもこれでは「出たらひとまず」ということになるかも知れない。円の切上げなどを今考えるのは思い上がりもはなはだしい。

十七日までの高騰ぶりいかんによっては、これで天井を打たない、とはいいい切れませんが、しかし前にも書いたように、今のところまだトレンド構成には疑問を持っている。今の私としてはむしろ十七日以後の反動によって、最も理想的な「トレンド構成」となるのではないかとひそかに期待している。それを見定めないと、九月二十二日当時の変動によって、その時はたして構成済みであるか、いなかもハッキリしないのである。

この十七日以後によっても「構成」済みとなれば、大天井値幅も増長されるし、時日も来春に延長されることになるわけであるが、それには、この十七日までの経過をも見定める必要がある。

前にも書いた変化日は十月十四日一十七日ということであったが、もし十七日のギリギリまで高い、ということになれば、アトにはたしかに問題が残る。十七日を待たないで押しのはいることを望んでいるが、十七日まで高い、としても、カラをウルのはごく一部のクロウトに限ることであろう。一目均衡表の質問券を見ると、あまりにもシロウト筋のカラウリの多いのに驚くのである。なお十七日の変化後も大したことがなく、さらに続騰する、といういわゆる気違い相場となれば、十月二十九日が当面の限度である、ということも型破りの相場だけに、この際書き添えて置く。

＝十月十三日記＝

注＝先月をもって一応打ち切りました『均衡表の急所』を、読者の御要望により復活、今月からは月一回、第一週または第二週の木曜日付けに掲載することに致します。つづいてご愛読下さい。

昭和 44 年 10 月 16 日 日本証券新聞掲載

2011/04/10 第 250 号

均衡表の急所(16) 一目山人

《相場つくりと見る者 大勢観上大事な波乱圏》

十月十三日記の今回は「私は天井値を決定する前に、天井打ちの時日を決定することの方を大事にしているが、それにはスパンとトレンド構成法と称するものの構成を必要とするのである。しかし、それはまだ本格的には構成されていない。九月十九日を頭としてのひと押しで、かろうじて「構成」したとみれば、みられるが、あまりハッキリしない。前から予定してきた当面の変化日は十月十七日で、いよいよ迫ってきた。これはかなり重大であるが、この十七日以後の波乱では「トレンド構成」となるのではないかと、おおいに期待している。しかし自分にもまれにみる型破りの相場であるから十七日の変化後も、たいしたことがなく、さらに続騰するということになれば、十月二十九日が当面の限度である」という気持ちで書いたのであるが、その後の経過を見ると、ダウに関する限り、十八日に二一ニポイントの高値をつけて、二十日には二〇七九ポイントと急落したものの、たちまち反発して二十九日にはついに二一五〇ポイント（ザラバではV二一五三を実現）の高値を見せるに至った。

二十九日は前にも書いたようにきわめて大事な変化日であったため、さすがにひと頭となり、十一月八日の週末は二〇九六ポイントと二一〇〇大台を割ってきたが、私は『一目均衡表』の読者で質問券を預かった向きに対して、十月二十三日印刷して「二十九日における値がさ株の高値は一応利を入れて、押しを待つこと」を通知しておいた。すくなくとも高値は買わせない配慮であったが、二十九日の新高値は、洋陶とアマノだけであったものの、大部分の信用取引値がさ株は、戻り高値となっていた。

ダウの上ではそうであったが、個々の銘柄をみると、十月十七日、十八日を頭として大きく下げたものが、きわめて多い。リコーのごときは例外としても、意外に値を消した株の数は驚くほどであって、要するに、三十数銘柄の値がさ株に幻惑されているわけである。いかに相場の革命時代とはいっても、決して正常な相場とは思えない。

二十九日以後も値がさ株の中には、値を飛ばしているものもあるが、やはり相場一般としては、十月十七日から高値波乱時代にはいったわけである。そう考えてくると、前週末の八日ダウの二一〇〇ポイント台割れだけでも、だいたいスパンとトレンドの構成（天井前波）はできた…とみてみられぬことはないが、しかし、値がさ株を除く多くの銘柄においてはそうであっても、値がさ株によって、とくに化粧されたダウとしては、まだどうも不十分である。

さる六日の短波放送をお聞きいただいたと思うが、その大筋は「私は今後も非常に大相場時代を考えているが、そのためには、さる二十九日を頭として、ひと反動入れる必要がある。その反動は深いほど良いが、深くなくてもよい。ただ、やや時間をかける必要があるわけで、すくなくとも十一月十八日までは——二十八日までの反動を入れれば申し分ないが、しかし何分にも正常な相場ではない。値がさ株をどこまでアオるかわからないが、それにしても十一日前後であろう」と述べたのである。

一日や二日延びても別に問題とする必要はなく、ダウの均衡表は、きわめて順調であり、ことに昨今は連日基準線の上昇期に直面しているので、この点からの上げ相場は申し分な

いが、しかし、それにしても、この反発はあせりすぎる。

ここで問題なのは、今日の反発の強さである。これはどう考えても不自然であって、前週末の大台割れにまかせておけない気持ちで、逆向いにアオったものと考えざるを得ないが、はたしてそうであるか、どうかは、今しばらくの経過をみななければわからない。

何分にも近來の相場は、相場をつく（創）るものが著しく強化化しているが、今の私は、ただ相場そのものを見るだけであって、つくる人々とは全然交渉がない。つくられた相場か、そうでない相場かも、大分アトでなければわからぬ…という立場にある。私は、ただ均衡表を中心とする幾つかの方法によって、相場を見ているだけであるが、それだけに、つくられた相場を本当に見定めるためにはそのつくった相場の成功と否とにかかわらず、ゆきつくところまでゆくのを待つほかはない。

したがって、今の私は、それを見定めるまで、あえて結論を保留して、すべては、この次に譲りたいと思う。大勢観とすれば、それで十分間に合うと思うが、ここで一番大事なことは、今日の反発力に永続性がなく、ことに「V二一六六」をとらないで、ダウの新値を切らないで、前週末のダウ二〇九六ポイントを下回るかどうか、ということである。これを下回れば時間はかかっても大勢観上、申し分ないが、このまま再活躍に入れば、いや入らせれば、大勢観上の高値は、よほど縮小されることになる…という今は最も大事な波乱圏である。 =十一月十日記=

昭和 44 年 11 月 13 日 日本証券新聞掲載

2011/04/17 第 251 号

均衡表の急所(17) 一目山人

《「今落葉の雨の音」 十二月の第二週が重大》

十一月十日記の今回は「ダウの均衡表は極めて順調であり、ことに昨今は連日、基準線の上昇期に直面しているので、この点からの上げ相場は申し分ないが、しかしそれにしてもこの反発はあせりすぎる。ここで大事なことは十月二十九日のダウ二一五〇ポイントをひと頭としての押しが、十一月八日の二〇九六ポイントまででおしまいになるか、あるいはさらに押しして十一月十八日まで…二十八日まで押せばなおよいが、そのいずれであるかによって、大勢観上、値段と時間が大きく変わってくる。今はその大事な波乱圏であって、今の私としては、相場の将来のため、この押しのやや長期にわたることを希望している」といった気持ちで書いたのである。

もし、希望通りやや長期の押しを入れればダウの高値は二四六〇ポイント。時間的にはほぼ来年三月末、ということを決しようとしたのであったが、十一月八日の二一〇〇台割れから再活躍してさる十一月二十七日には二二三〇ポイントと、九月二十二日に書いた

六月十日の二〇二九ポイントを中心点としたV二二一五以上を実現したわけである。

十一月上旬の押しも短期に終り一目均衡表による天井前波の構成がじゅうぶんでなかっただけ、当面の天井値は大して延長されない。まず二二一五以上を実現すれば、それだけでもそれで一応満足すべきであって、おりから十一月二十七日の変化日に直面している。ことに値がさ株の三期の終りは去る二十日であって、二十一日から急落に転じているのもじゅうぶんなぜける。

しかし高値の転機としては十一月二十八日でなく、一日前の二十七日であるが、それも目先のなものである。相場の高値における本格的変化日は十二月八日。次いでは前から書いてきた十二月十三日であるから、つまり十二月第二週がもっとも大事ということになる。

十一月二十一日から反動安を入れている値がさ株も、今日から今一度買われて良い時間関係にあるが、おそらく値がさ株はそれをもって年内相場は沈静するだろう。

何分にも非常な型破りの相場であるから、十二月九日から急落する…とは必ずしもいい切れない。というのは、相場が天井を打つときは、その限界が近づけば近づくほど、とかくその限界の最後まで高いという習性をもっている。つまりとくに人気化しやすいからであるが、しかし、それだけに、十三日いっぱいまでダウが高ければ、十二月第三週の相場は、いっそう大きく警戒しなければならない。

十一月二十七日の変化日の翌日のひと反落が、たちまちに立ち直ったのを見ても、ぎりぎりまで買われる可能性はじゅうぶんある。その後もうれつな循環買いとなっている経過も決して悪くないが、もし第二週末まで買い進まれた場合、ダウ二三二〇を取る程度ならまだよいが、もし二三五〇以上を実現すればアトの反動はかなり厄介になる。

ただしそれは第二週を過ぎて見ればすぐわかることであるから、その理由は書かないが、しかし一般的ではないにしても、買気はきわめて旺盛である。ことに大勢観としては、私は今のところ、やはり大相場観を捨て得ないでいる。そこで、むろんまだ実証的ではないが、考え方としては、この十二月第二週をもって、相場が大天井を打つ、とは考えていないのである。

十一月上旬の押しが短期に終りそのために当面の高値が縮小されたのは事実だと思うが、しかしそれゆえに、十一月上旬の押しがやや長期にわたった場合よりも、ダウの高値がさらに大きくなる…ということもじゅうぶんあり得ることである。

そこで私は、十二月第二週の重大転機につづいて、第三週以後の相場がはたしてどうなるか、さらには必然的だと思われる中低位株への循環買いの程度いかん——それらを見定めるまでは、大勢観を保留しようと思うが、いずれにしても、一般的相場観としては、年内の相場は第二週において出し切ってしまうであろう。

私はこのほど新聞紙の観楓案内に誘われて久しぶりに出かけたが、満目の紅葉は実に見事であって、感嘆しているうちに、折りあしく、雨がふり出してきた。午前中は実に輝かしい好天気であったのに…と思いながらフト土井晩翠詩伯の「今落葉の雨の音」という五丈原の一句を、私は口ずさんでいた。このけんらんさこそ、新しい春を迎えるための、冬

枯れに直面した最後の、じねんのしょうごんであろう。 =十二月一日記=

昭和 44 年 12 月 4 日 日本証券新聞掲載

2011/04/24 第 252 号

均衡表の急所(18) 一目山人

《引かれ玉での強気 大勢観より一～三月相場》

十二月一日記の今回は「一目均衡表における値がさ株の三期（一巡）の終りは十一月二十日であったから、二十一日から急落に転じているのもじゅうぶんうなずける。当面、相場の高値における本格的な変化日は、前から書いてきた十二月十三日をもっとも大事ということになるが、なにぶんにも非常な型破りの相場だから、限界が近づくにつれて、一だんと人気化しやすい。その場合、ダウ二三二〇をとる程度ならばまだ良いが、もし二三五〇以上を実現すればアトの反動はかなりやっかいになる。そこで私は十二月第三週以後の相場がはたしてどうなるか。さらには必然的だと思われる低中位株への循環買いの程度いかん——それを見定めるまで、大勢観を保留する」といった気持ちで書いたのであるが、従来から活況を続けてきた株はほとんど十二月十三日を転機として、さらには、つぎの変化日十二月二十五日で終りとなった。

しかし建設株をはじめ低中位株の著しい人気のかいふくによって、ダウは大納会まで続騰して遅ればせながらついに二三五〇以上を実現してきた。これだけでもすでに転機はじゅうぶんなのに、衆口一致の総楽観人気によって、新春は二四〇〇ポイントに乗せてきたのである。

ときあたかも私は、一月七日に短波放送に録音して八日に放送したが、その要旨は、大勢観を中心としたものであった。大勢観はアトで書くが、ただ一月十二日、ついで月末の変化日がどうなるか、ということに大きな関心を寄せたわけであるが、当の八日はダウで大暴落。相場は十二月相場ですでに終っていたのである。

ついで九日、十日と反発したが、この数日間の経過をみると、一二二安の九六ポイント戻しで実にすばらしい大波乱であったが、問題の十二日から反落、きょうも引続いて安く、九六戻しに対してすでに八二ポイントの反落である。この波乱そのものよりも、私はやはり十二日の変化を重くみるわけで、かりに十四日からダウが戻りをみせるとしても、それに大きく希望をつなぐことはできない。

十一月二十一日以後の相場をみると、従来の活躍株はずいぶんと下げている。新しい物色株でも建設株のごときは、十二月二十五日以来の値の消え方ははなばなしのものがあるが、それにもかかわらず一般的に強気が多いようである。不思議と思うほどであるが、要するに引かれ玉をかかえながらの強気ではあるまいか。株価操作の巧妙さというよりも、

徹底的なハ行と循環物色にとかく目を奪われやすいからかも知れない。

いずれにしても、こんな状態では玉整理は容易でない。融資玉が大きく減少されるようでは立ち直りはいっそう困難であるから、借株残の増加を望むほかないが、長い間の好況でウリ方もヒソクし切っているのも、やはりこの相場の整理は常識以上に時間がかかる…というふうを考えざるを得ないのである。

なぜならば、なにぶんにも大勢観が楽観に一致しているからであって、私も前にも書いたように大勢は大いに楽観している。そこで、この相場の反動の限界を考えるのはまだ早いので、ここでは新春らしく大勢観について放送の話をくり返しておくことにしよう。

大勢観として均衡表の計算値では、ダウ三〇三八～三三〇〇ポイント。これをAとすれば、Bは二六四〇～六〇～八〇ポイント、Cは二四五八～二四九八ポイントということになっているが、このABC出現はその都度相当の反動を必至とするものであって、Aが今年出現するか、あるいは来年に持ち越されるかは、未決定である。

未決定であるばかりではなく、今年C、Bの出現経過によっては、Aの高値はさらに高くなるかも知れないが、今春の相場がいかに総楽観となっても、Cをもって限界とする。しかし前に書いた二三五〇ポイント以上の出現が、きわめて大きな拘束力となっているから、いかに型破りでも、春相場にCの出現は望みうすであろう。

とすれば、その反動はCの出現した場合よりもはるかに軽くてすむとみて良い。なお時間的には一月頭、三月底。早ければ七月天井、遅れば十一月天井…とまんぜんと考えているが、いまは大勢観よりも、一～三月相場のあり方がより重大である。ということをつけ加えておいて、今後の変化を見定めながらこの反動の限界をあらためて書くが、中低位人気はなおいく循環するであろう。

ダウの均衡表は引続き順調であるが、これはもっとも順調な場合でも一月二十二日が限界であって、そこでもなお逆転しないようになれば、春相場の考え方を変えなければならぬかも知れない。 =一月十三日記=

昭和 45 年 1 月 17 日 日本証券新聞掲載

2011/05/15 第 255 号

均衡表の急所(19) 一目山人

《突込み程度が問題 四月底ですむか否かも》

一月十三日記の今回は「一月十二日、ついで、月末の変化日がどうなるか、ということに大きな関心を寄せているが、相場は十二月ですでに終わっていたのである。新春相場は実にすばらしい大波乱であったが、問題の十二日から反落。この波乱そのものよりも私はやはり十二日の変化を重く見るわけで、かりに十四日からダウが戻りをみせるとしても、そ

れに大きく希望をつなぐことはできない。

大きく引かれているにもかかわらず、一般的には強気が多いようであるが、こんな状態では玉整理は容易でない。融資玉が大きく減少するようでは立直りは一層困難であるから借株残の増加を望むほかないが、長い間の好況でウリ方もヒソクし切っているの、やはりこの相場の整理は常識以上に時間がかかる。なぜならば、大勢観が楽観に一致しているからである」として、大勢観を一巡述べたアトで「時間的には一月頭、三月底、早ければ七月天井、遅ければ十一月天井、とまんぜんと考えているが、今は大勢観よりも一～三月相場のあり方がより重大である。中低位株人気はなおいく循環するが、好調なダウ均衡表も一月二十二日が限界である」といった気持ちで書いたのであるが、十四日は大証ダウ、東証ダウは十六日から反発に転じたものの、その後は二三二八ポイントを高値に、二二九〇台を安値にしつような波乱をくりかえしている。

ダウの均衡表は大証が一月十九日に、東証が二十二日に逆転。スパンも問題なく悪化した。相場はイツ崩れてもよい、という状態であるが、それにもかかわらず、実に不思議と思われるほど堅調な相場をつづけている。値がさ株は大体に下げているが、それも時おり反発しては叩かれている。

決して良い経過ではなく、どこかで大突っ込みなくして納まらぬといった相場付き、というほかないが、冶金、小西六、ナイロン、志村、三楽、豊年など低位株のほとんどは、均衡表を構成して大きく奔騰。ダウの横ばいを支持しているわけであって、この傾向はなお続くと見られる。

現に近く均衡表を構成するかどうか、と見られるものに、三越、ロープ、安川電機、信越化学、江戸川化学、帝石など、いろいろとあるが、それらがいかに活躍したとしても、当面のダウを支持する力はもはや尽きんとしつつある。

一月末にダウが反発しても基準値に圧迫されて一段の上昇はできなかったが、今や基準値は二三一〇ポイントにも達しない。この点を重視すれば、もはや二三一〇ポイント以上の大引けを求めることはむり、ということになるが、それをどうするかは、今までと同じように投信の意図いかんによるであろう。

ここは、やや危険なところであるだけに投信の出かたによっては、値がさをひとあおりできるころあいでもあり、ダウを上げることもできようが、そうなればいっそう整理期はながびく。こと今日に及んで、この上むりを重ねても、けっきょく、しかたがないのではないだろうか。

当面の変化日は、二月十八日、二十八日であるから、その辺で帰すうははっきりするであろうが、当面何よりも問題なのは、ほとんど玉整理が進んでいないことである。自己融資も相当大量のままだと思われるが、小口落しがはたしていくばくあるか、各取引所で小口落しを発表させていないのは株式市場だけである。これは誠に理解に苦しむところであるが、いずれにしても玉整理は進んでいない。投資大衆は大きく引かれた玉をそのままにして、大勢の楽観にのみ耳を傾け、もって自らを慰めているのではあるまいか。

しかしよくよく考えてみるまでもなく、この相場を上にもって行って、玉整理を進める道が、はたしてあるであろうか。大証券も時価発行に少し積極的であり過ぎ、急ぎ過ぎたようである。それが大きく頭にかぶさっている今日としては、何とかしてダウを維持しよう、とすることがかえって逆効果になるのではあるまいか。

かくして玉整理に時間がかかればかかるほど、いよいよ投げ出す瞬間のショックは大きいのではないか。私はとくにそれを憂うのであるが、それがいわゆる杞氏の憂いであれば、業者のためにもまた投資大衆のためにこの上もないことである。しかし、今のところ、余りのんびりとは構えておれないような気持ちで一杯である。玉整理に時間がかかるだけ、三月底では納まらないのではないか。

もちろん今日までも変化日に変化した銘柄は多い。三月底となる銘柄もあると思うが、時価発行株の公募値が出揃うのは大体四月であろう。そこで底入れとなるか否かが、当面の関心事である。そのあり方いかんによっては、大勢観を改める必要があるか、とも思っているが、その前に一つ。ダウが一段安となった場合、二二五〇ポイント台で止まるかどうか。それが当面最大の問題である。さらに今一つ。ウリ方が少し売ると直ぐフマせる。小刻みにフマしてはアトで困ると思うが、したがって規制解除なども玉整理のためには、かえって面白くないと思う。 =二月十六日記=

昭和 45 年 2 月 19 日 日本証券新聞掲載

2011/06/12 第 259 号

均衡表の急所(20) 一目山人

《波乱ごとの上昇相場 値がさ株はやはり四月》

二月十六日記の今回は「ダウの均衡表は大証が一月十九日、東証が二十二日に逆転。スパンも問題なく悪化した。相場はいつ崩れても良い、という状態であるが、それにもかかわらず、実に不思議と思われるほど堅調な相場を続けている。値がさ株は大体に下げているが、それも時おり反発しては叩かれている。冶金、小西六、ナイロン、志村、三楽、豊年など、低位株のほとんどは均衡表を構成して大きく奔騰、ダウの横ばいを支持しているが、この傾向はなお続く。現に近く均衡表を構成するかどうか、と見られるものに、三越、ロープ、安川電機、信越化学、江戸川化学、帝石など、いろいろとあるが、それらがいかに活躍したとしても、もはやダウ二二三〇ポイント以上の大引けを求めることはむり、ということになるが、それをどうするかは、投信の意図いかんによるだろう」とし、さらには一。

「ここは、やや危険なところであるだけ投信の出かたによっては、値がさをひとあおりできるころあいでもあり、ダウを上げることもできようが、そうなればいっそう整理期間

はながびく。当面の変化日は、二月十八日、二十八日であるから、その辺で帰すうは、はっきりするであろう」といった気持ちで書いたが、十八日には値がさ株から反発、ダウはたちまち二三一三ポイントとなった。ことに十九日の前場試算では二三二六ポイントと均衡表の好転を示唆したのみであったが、スパンは完全に好転した一方、第二部の均衡表が好転。ついで二十一日には二三二七ポイントと均衡表を好転。この好転ぶりが、前記の二三一〇ポイントを十八日に突破したのみでなく、十九日のダウがいかに強力なものであったかは、均衡表の製作者には、きわめてハッキリわかったはずであるが、この欄は月に一度書くだけであるので、よほど幅広く書いておかないとじゅうぶんでない。

二月十六日記では、いささか値がさ株中心であり過ぎたが、しかし値がさ株はやはり時価発行株の公募値決定の出揃いを待つほかない。恐らく四月からということであろうが、二月十八日以降における中低位のいっせい奔騰はすさまじい。ことに二月二十八日の変化日には、値がさ株が目先の底入れとなり、次の変化日三月五日には全面証拠金率四割という規則により、かえって買気を刺激して、ダウは二四二二ポイントと一挙に新高値となった。引続いて今日は二四五五ポイントであるが、この間日証金の借株残は増加の一途をたどり、七三二四万株と昨年暮から見れば倍加してきた。金額から見れば値がさのウリが多いようであるが、最近奔騰した中低位株もだいぶウリ込まれたようである。

一部に警戒も強いようであるが、しかしこの相場はダウに関するかぎり決して悲観はできない。大勢観的計算値は一月十三日記に書いたとおりであるが、当面の計算値は一月十日の二三七九ポイントを中心点とするV二四七一ポイント。次は一月六日の二四〇六ポイントを中心点とするV二五二八ポイントということになるが、差し当たり問題なのは二四七一を実現したアトがどうか、ということである。当面の変化日は三月十八日、十九日。次は三月二十五日である。もしこの変化日と計算値が一致すればちょっと困るが、とにかくそこでは、二四一〇ポイント前後へのひと押しがはいっても良いわけであって、波乱ごとに上昇する相場と見るべきだが、しかし各業者とも規制以上の制限を行なっている。玉整理が進まないためであるから、相場が大きく奔騰するためには、なお時間がかかると考えられるが、今のところ、まるで問題にされない値がさ株も公募値が決定前後になれば、またひと活躍すると思われる。その前に、最近活躍している中低位の化学、鉄鋼、食品などなお一段と活躍するであろう。

最近大きく上げた株のすべては、均衡表の構成上申し分のないものばかりだから、それらをいちいち枚挙する必要はないが、私はとくに作意のない、作意のむつかしい株を選びたいと思っている。小西六、ナイロンなどの押目はなお有望。とくに信越はこれからであり江戸川化学も面白い。ロープに次いで倉レ、日水、帝石なども今後の動向は注目に価するが、前週の週間足による均衡表の好転は日東紡、日立、トヨタ、ダイハツであって、少し時間はかかるかも知れないが、今一〇〇円のダイハツはとくに面白いのではないかと考えている。 =三月九日記=

2011/06/19 第 260 号

均衡表の急所(21) 一目山人

《天井の時期は延びる 値がさ株は今少し叩いても》

三月九日記の今回は「値がさ株はやはり時価発行株の公募値の出揃いを待つほかない。おそらく四月からということであろうが、二月十八日以降における中低位のいっせい奔騰はすさまじい。ことに二月二十八日の変化日には、値がさ株が目先の底入れとなり、次の変化日三月五日には、規制強化により、かえって買い気を刺激した。一部に警戒も強いようだが、相場はダウに関する限り、決して悲観はできない。当面の計算値は二四七一、次は二五二八ポイントということになるが、さし当り問題なのは二四七一を実現したアトがどうか、ということである。変化日は三月十八、九日。次は三月二十五日であるが、ここでは二四一〇ポイント（印刷での二三一〇は誤植）前後へのひと押しがはいっても良いわけで、波乱ごとに上昇する相場と見るべきだ」といった気持ちで、アトは幾つかの銘柄を書いたが、三月十一日ザラバでダウ二四七六ポイントを実現するなり、翌十二日には二四三三ポイントまで急落したが、それから再活躍。十九日にはザラバで二五〇〇台に乗せたが、二十五日には二四七五ポイントと下げ、それから、いよいよ二五二八ポイントを上抜いてきた。

しかし、ここは極めて重要な関門であるだけ、すでに十二日間に及ぶ高値モミを繰り返している。ことに二月二十八日前後に底入れをした値がさ株が、公募値決定後は高い、ということから先回りをして買っただけ、公募値決定とともに、まずハウスが下げ、ソニーの公募値発表も、すでに叩いている。

こうした経過をみれば、やはり一般の常識どおり、公募値決定後しばらくは低調をまぬがれまいがしかし、いずれ一度は相当の高値を呼ぶことは間違いあるまい。果してそうだとすれば、天井値の時間は延長される、とみて良いであろう。

私は去る三月二十五日に短波放送をしたが、その時は「この上高くてもダウ二五二八を実現すれば、一応の限界とみるべきであって、大きな反動を入れるとは考えられないが、四月なかばまでの反動があれば、まったく理想的。ただし、値がさ株が公募値決定前に余り高いのはアトのために決して良くない。時間的にはまだ決定していないが、天井打ちは五月六日前後が重大。今後の押し具合によっては、五月三十日、六月に入ることも考えられる」といった気持ちで話したが、むろん、このままで奔騰すれば、五月上旬が間違いなく転期となる。

しかし、前述のような意味あいにおいて、おそらく天井時は延長されるであろう。それを決定するものは、ここしばらくの経過である。今日はちょっとした変化日であるから、

明日以後の経過がとくに大事であるが、明日高ければまずまずとしても、安ければ四月三日の二五〇〇ポイントを割るかいなが問題となる。これを割ればここしばらくは、余りな楽観もできないが、天井期延長は確定である。

ただし、延長されれば、五月上旬の変化を見きわめねば、天井時期を決定するわけにもゆかないが、いずれにしても大きな転期は、これからの燃え方いかんによることながら、だいたい二ヵ月いないに迫っている。それが一月十三日に書いたようなダウ値であれば、恐らく今年中の大天井となるであろうだけ、これからの奔騰相場には、大いに慎重を期していただきたい。

ただし、相場が大天井を打つ前には急調子の上げ相場となる。それでなければ天井打ちとはならぬものであるから、値頃感でカラウリをすることは、一層慎重を要する。

天井打ちの相場は、計算値もさることながら、とくに時間関係が重大であるが、それも近く確定するであろう。

ところで、これからの変化日は四月二十二、三、四日。次はやはり五月四、六、七日で、これは相場の寿命が延長されてもされなくても、かなり重大であって、その時の値頃いかんが問題となる。正確なことは近く決定されるが、おそらく次回の執筆で間に合うだろう——と今のところ思っている。

ところで、私は銘柄を書くことは、特にひかえているが、前回に書いた銘柄についての、その後の経過をみれば、小西六は富士写真の影響とともに押しているが、これは信越と共に近く転換するであろう。ナイロン、江戸川化学、日東紡、トヨタは引続き順調。とくにダイハツも引締めている。

このダイハツは、一五〇～六〇円までは時間がかかるものの、それからは大きく化ける可能性をもっていると思うが、ついでに富士重工も相場は変って来た。

むろん、中低位の相場もなお大いに期待できるが、値がさは、遅れても五月相場には大いに期待できる。一度は百花乱れ咲く…といったところがあるであろう。

＝四月十三日記＝

昭和 45 年 4 月 16 日 日本証券新聞掲載

2011/07/03 第 262 号

均衡表の急所(22) 一目山人

《一気に暴落したので 今後の反騰を見定めて》

四月十三日記の今回は「いよいよダウ二五二八ポイントを上抜いてきたが、ここはきわめて重要な関門であるだけ、すでに十二日間に及ぶ高値モミを繰り返している。ことに先回りをして買った値がさ株がハウス、ソニーともに公募値決定後下げている。やはり値が

さ株はしばらく低調をまぬがれないが、いずれ一度は相当の高値を呼ぶだろう。天井打ちは五月六日前後が重大だが、しかしおそらく天井時は延長されるであろう。四月三日の二五〇〇ポイントを割ってくればしばらくはあまり楽観はできないが、天井期の延長は確定される。云々」と書いたが、大体において大勢的楽観論の印象が強かったと思う。その点では一般読者にはかなりご迷惑をかけただろうと深く反省しているが、この際いいわけがましいことながら、当時の人気として、ことに時価発行を大いにすすめた大証券としても、発券会社としても、このまま放置するとは考えられなかったのである。それに強調されてきた外人投資が、今度のようなモロさを、今度のような拙劣さを暴露するとはまったく考えられなかった。資力にものをいわせる以外に能力の乏しい外人投資家が、とても下手であろうことは、かねてから考えていた私ではあったが、今度ほど拙劣だとは思いつけなかった。

それは決して単にドライだといふべき性質のものではない。自分のカイで煽って、自分のウリで叩きコウス。ということは日本の利用者も良くないが、いつも損ばかりしている日本の投資大衆よりもさらに大きく拙劣である。私においても、この時価発行の盛行と、外人投資の拙劣さとは、ともに初めての経験だったので、事態をいささか軽視していて、まことに申しわけないと思っているが、しかし一目均衡表の読者、一目均衡表の製作者には、必ずや大いに得るところがあったと思うのである。

前回の記事は十六日に載せられているが、十五日にはすでにダウ二五〇〇ポイントを割り込み、十七日にはダウの均衡表は久し振りに逆転している。これは当時としては大変な変化であったが、さらに私自身が驚いた事は、この十七日の引値における遅行スパンの素晴らしい悪化ぶりであった。皆んなまだ容易の観をなしていたが、一目均衡表を少し勉強した方々には、だれでもこの悪化振りは一目瞭然たるものであったと思う。十七日以後も、それから約一週間は大した事がなかったものの、二十四日に抵抗帯下限を一気に下抜いてからは、ダウ三〇〇ポイントの急落となったのである。この暴落によって「普通なれば大損をしたところであるが、一目均衡表のおかげで、今度は大いに良かった」という電話が七人からかかってきた。そのうち四人は女性であったが、私は四月十三日記の失敗で、とくに気になっていた時だけに、大いにありがたく思ったのである。損をした便りが大部分であって、儲けたという便りは殆んど無いだけに、こうした喜びの電話には、私自身の生き甲斐を感じしめる程のものであった。すくなくとも、一目均衡表を作製している限り、暴落相場に引っかかるようなことはない、というかねての自信を証明されたわけであるが、しかしそれだけに、これから書かんとすることも、非常に書きづらいのである。

これほど急激に追い込まれた株に対し、ことに高値づかみのまま、まだじゅうぶんの玉整理ができていない、と思われる現在、これ以上の悲観論を書く気にはなれないのである。しかし、だからといって楽観論の書ける現実ではない。仏教用語に「無記」というのがあるが、いましばらくはそれでありたいと思っている。一目均衡表の読者の一人から、しばらくは「ケセラセラ」でしょうが……と。けだし時に取っての至言だと思う。

これからの私にとって大事なことは、底入れを確認して再出発の日と位置を見きわめることであるが、それにはまず何よりもダウ均衡表の好転、とくに遅行スパンの好転にまつほかない、それがいつになるかはまだ見当さえつけるべき時ではないが、しかし、わからぬ、ということに終始してこの稿を終るわけにもゆかない。予想をしない私としては、いささか希望論的ではあるが、今日の安売りによって大体目先の最悪の場合を出したのではないであろうか。ハウス、ソニーは公募価格を大きく割ったが、松下は今日が払込み最終である。払込ませればアトはどうでも良い、というような松下ではないはずである。明十二日はちょっとした変化日でもあるので、値がさ株も全体的に見て大体良い所へきたと思う。

大勢観としては、ダウの二〇九〇ポイント、さらに悪ければ二〇三〇ポイント前後と考えていたが、あるいは今日で、最悪の場面を終ったのではないかと思うフシもある。幸いにもしここで反発して、五月七日の二二〇九ポイントを上抜けば、二二八〇～二三〇四ポイントが可能となる。果してそうなれば市場は著しく明るさを回復することになるが、当面の変化日は五月二十六～八日、六月二十二日がやや大事である。近来国際化とマスコミの発達によって変動が極端になっているので、とくに良い時、とくに悪い時は、それに引込まれない要心も必要で、過般の大暴落もまた、従来相場観によって驚くには当たらないと思うが、ニューヨークは当分楽観できない。これと関連人気を早く改める必要がある。
＝五月十一日記＝

昭和 45 年 5 月 14 日 日本証券新聞掲載

2011/07/10 第 263 号

均衡表の急所(23) 一目山人

《漸く大事な転期へ この反発力で大勢決定》

五月十一日記の今回は「これほど急激に追込まれ、ことに高値つかみのまま、まだじゅうぶんの玉整理ができていないと思われる現在、これ以上の悲観論を書く気にはなれないのである。しかし、だからといって楽観論の書ける現実ではない。しばらく「無記」でありたいと思っているが、これからの私にとって大事なことは、底入れを確認して、再出発の日と位置をきめることである。それには、ダウ均衡表の好転とスパンの好転にまつほかないが、それがいつになるか、まだ見当さえつけるべき時ではないが「わからぬ」ということに終始してこの稿を終るわけにもゆかないので、強いていえば、目先は一応良いところへきた。ソニー、ハウスは公募値を大きく割ったが、松下は払込みさえ取ってしまえば、それで良い…といった会社ではないはずである。云々…。さらに、当面の変化日は、五月二十六～八日、六月二十二日がやや大事であるが、ニューヨークは当分楽観できない。

これとの関連人気を早く改める必要がある」旨を書いた。

その後、二〇三〇ポイントもカンタンに割って、十九日には一九六三ポイントとなってしまった。その後二十三日まで戻したが、戻りはにぶく、休日明けの二十五日は一九三三ポイントに急落、きょうも朝寄り安くかろうじて一九〇〇台を維持した程度であったが、大引けはやや引締まってきた。ニューヨークの暴落ごとにショックを受けているわけであるが、しかし私としては、この急落によって、いささか目の先が明るくなったような感じを今もっているのである。

何よりも、十九日からの戻りが、あまりにもにぶかったが、たんに、にぶいばかりでなく、店によっては、かなりウツてきたというのに、そのウリ玉が日証金残には少しも現われない。まだ安い相場だ。どこまで突込むかわからない……ということ以外に、どう考えてみようもない経過であったのであるが、きのうからの急落によって、とにかくいくらか見込みがつけ易くなったからである。まず何よりも、前にも書いた五月二十六～八日に当面している。

ここで、ちょっと話をそらすようだが、由来上げ相場は毎日毎日のツミ重ねであるばかりでなく、時に順調な押しを入れながらの上げであるから、時間的にも段階的にも、さらには値幅測定の上にも、かなり規則的である。したがって、変化日も測定も相当価値あるものであるが、その点では単なる動、不動も全く同様である。しかし、相場が天井を打って暴落に入った以上、それは過去におけるツミ重ねが一挙にしてコワレるのであるから、ルールを調整するいとまのない方が多い。したがって、どこでどうなるかは、下げるだけ下げてみなければわからない。すくなくとも、やや注目に値する反発を入れてみなければ見直しはつかないのである。

だからこそ、値幅の予測も変化日も決定的なものとはなり得ないものであるが、それだけに私としても、この相場の限界について、非常に苦慮してきたのであって、前週までの相場ではどこにも変化を見る角度がないので困っていたのである。

しかし、二十五日からの急落によって、ようやくその角度が見えかけてきた。暴落相場においての変化日は、だいたい無効であるとはいうものの、しかしこの五月二十六～八日というそれは、いつの暴落相場でも、かなり重要であり、ことに今度の暴落経過に取っては一層大事である。

十九日からにぶいながらも数日の戻りを見せて、いよいよ、この変化日をめざして急落してきた相場の在り方は、必ずしも悪くないと、今の私は思っているのである。

あるいは、この暴落相場の底入れは、つぎの変化日六月二十二日以後となるかも知れないが、とにかくここでは、自律的な反騰相場が迫っていると考えたいのである。

もちろんそれは、均衡表によるものでなく、わずかに時間関係中心の考え方であって、厳密には今なお希望論を多く出せないものではあるが、当面の問題としては、自立反騰といえ、その反騰の程度である。

しかし、それももとより確定的に書ける段階ではないが、まず目につくのは二一〇ポ

イント台である。それを実現するとして、果していかなる形を取るか。その間において値がさ株がどんな姿勢をみせるか。それらの経過によって、一段の安値を必要とするか、否かも、ハッキリするであろうと思う。

もし、これからの反発もにぶく、せいぜい二〇五〇ポイントどまり…ということであれば、アトはまた相当やっかいであるが、ともかく、今は下値の予測値を書くことを謹んで、これからの反発に期待をかけ、それを見定めることにしよう。

＝五月二十六日記＝

昭和 45 年 5 月 30 日 日本証券新聞掲載

2011/07/17 第 264 号

均衡表の急所(24) 一目山人

《本格的回復相場へ 暫くは悪材料ほど良い》

五月二十六日記の前は「その後二〇三〇ポイントもカンタンに割って、十九日には一九六三ポイントとなってしまった。その後二十三日まで戻したが、戻りはにぶく、休日明けの二十五日は一九三三ポイントに急落、ニューヨークの暴落ごとにショックを受けているわけであるが、しかし私としては、この急落によっていささか目の先が明るくなった。何よりも十九日からの戻りがにぶいばかりでなく、店によってはかなりウツてきたというのに、日証金残には少しも現われぬ。どこまで突っ込むかわからない。どう考えてみようもない経過であるが、きのうからの急落によって、とにかく見込みがつけやすくなってきた。まず何よりも、前にも書いた五月二十六～八日に当面しているからである。云々…」とし、さらに「コワレ相場に時間も値幅測定もないが、しかし、それにしても五月二十六～八日の変化日は重大である。あるいは、この暴落相場の底入れは、つぎの変化日六月二十二日以後となるかも知れないが、とにかくここでは自律的な反騰相場が迫っている。反騰の程度は、まず二一〇ポイント台が目につくが、もしせいぜい二〇五〇ポイントどまりということであれば、アトはまた相当やっかいである」旨を書いた。

今からみれば、なんでもないことのように思えるかも知れないが当時の相場、人気としては、この反騰を見出すだけでも精一杯であった。

あの記事の出たのは三十日であったが、その前々日、故太田収氏の三十三回忌法要があった。実に故人となって三十三年を経て、およそ百五十人の人々が会したのである。世話人の努力によることではあろうが、もって若き日の太田氏の人柄をしのぶよすがとして私はしみじみとした感じにふけたのである。それに出席された各証券会社の幹部は、意外に明るい顔をしていた。そのとき私は、トータルとしてお客の帳尻をにぎっている人の顔を見たわけであってわれわれ場外者にして、相場を見ることの困難さを深く感じたわけ

あるが、その後の相場は、二十七日の一九二九ポイントを最安値として、週末の三十日には二〇七二ポイントと、私をもっとも懸念していた二〇五〇を一気に上抜いてきた。

由来、安値からの反発は、まず九日間にいくら戻すか…ということがもっとも大事であるが、六月四日の二一三三ポイントまで反騰した。二一一〇ポイントをも上抜いたので、これでほぼ大底入れを決定したわけであって、わが均衡表も六月六日には好転した。

その後、十一日には二〇二九ポイントと急落したが、この急落ですら、当日のわが基準線にてガッチリととまり、しかも十三日には遅行スパンが好転。これで大いに安心となったが、週末の二十日には二一五〇ポイントと、前の戻り高値を上回ってきた。もちろん、これで大底入れ確認であるが、問題はこれからである。

いくら好転したからといっても、これから、しばらくは波乱を繰り返すだろう。当面の計算値はV二二三八、E二三三八ポイントであるが、表面上の取組みも非常に改善されてきたし、安値で表面に出なかったウリ込み玉も、カイ方の利食いととも、漸次、表面に現れてきた。何か手品の種があったような気もするが、それはともかく、安値のウリ込み玉が残ったことはたしかであろう。

ところで、当面の変化日は前回にも書いたきょう六月二十二日、それから二十三日、二十五日である。五日まではちょっと大事であって、ダウはごく目先の頭となるかも知れないが、もちろん問題とするほどのものは考えられないし個々の銘柄については低位、仕手性へのハ行相場となる程度であろう。

次の変化日で大事なものは七月十二日前後である。月に一度書くのだから、やや先走って書いておけば、その次は八月上旬である。計算値と変化日とが、どうからみ合うか。こんなときにこそ私は、もっとも興味深く、相場の成行きをみるのを楽しみにしているわけであるが、かくもすでに、日本の相場そのものが自律的に、かつ自主性を回復してきた以上、相場が頭を打つまでは、問題のニューヨークもIOSも、もはや大した脅威ではない。

これからは悪材料が出るほどいいと思うが、この機会に、この欄をかりて私事を書かせてもらいたいのは、この暴落くらい、全然、処理しがたいほどの質問が殺到、正確な答えができないのはアトまわしに、大体は本欄にゆずってきたが、有望銘柄では鐘化の広告を出して、いくらか責をふさいだつもりである。しかし、これまでもできるだけ回答してきたが、これから漸次整理してゆきたいと思うので、どうぞあしからず。

＝六月二十二日記＝

昭和 45 年 6 月 26 日 日本証券新聞掲載

2011/08/14 第 267 号

均衡表の急所(25) 一目山人

《いよいよ本格相場 悪材料織込みずみ》

六月二十二日記の今回は「本格的回復相場へ、しばらくは悪材料ほど良い」と題して「由来、安値からの反発は、まず九日間にいくら戻すか……ということが、もっとも大事であるが、六月四日二一三三ポイントまで反発、均衡表も六月六日には好転した。その十一日には二〇二九ポイントと急落したが、この急落ですら基準線にてガッチリとまり十三日には遅行スパンも好転、二十日に二一五〇ポイントと前の戻り高値を上回ってきた。もちろんこれで大底入れ確認であるが、いくら好転したからといっても、これからしばらく波乱を繰り返すでだろう。当面の計算値はV二二三八、E二二三三ポイントであり、当面の変化日に前日も書いた六月二十二日、それから二十三日、二十五日である。二十五日までは、ちょっと大事であって、ダウはごく目先の頭となるかも知れないが、もちろん問題とするほどではなく、銘柄については低位、仕手株への八行相場となる程度であろう。次の変化日で大事なのは七月十二日前後、次は八月上旬である」旨を書いたが、二十二日から下げ二十七日に二一一三ポイントまで下げ、一時戻したものの、とかく高値は圧迫されて伸びなやみ、七月十日、七月十四日の変化日から急落、十六日には二〇六七ポイントと、いかにも底抜け商状を呈してきた。前回に書いた直後に気付いたことであるが、高くても安くても、どうせ外人は売ってくる。そうすれば安いところで引き取ったほうが良いと考えるのは当然であって、この一カ月間はいわゆるオイデオイデだったようであって、その間悪材料にはまったく無反応で、悪材料はずいぶん出てきた。

ことにわが均衡表では、二部の五〇円当りが六月二十六日に逆転、それも程度が悪く、一部の五〇円当りは逆転していないにもかかわらず、全相場銘柄の均衡表は七月一日に逆転したので一部のダウも一度は叩かれるのではないかと、ひそかに心配していたのである。ところが、七月十三日にいたって、一部の五〇円当り均衡表が逆転、目先の突っ込み必至とはらをきめたわけであるが、高値モミがやや長期にわたり、かつ閑散続きに悪材料ふくそう。それは五月の大天井当時をおもわせるほどのものであった。

しかし、五月当時と大いに違うのは、何よりもスパンである。五月天井では均衡表の逆転とともに遅行スパンがことの外悪化したのであるが、この十六日の急落では東証はギリギリ、大証はやや余裕があった。ということは、遅行スパンが実際に接触してきたわけが一転して急騰する可能性を潜めていることになる。

果せるかな、十七日、十八日で六四ポイントの急反発であり、しかもそれは、遅行スパンが六月十八日、十九日の上昇相場にそってそれ以上の奔騰ぶりである。週あけ月曜七月二十日のスパンは、二一五〇ポイントの高値をつけた六月二十日に相当するが、月曜がどうであろうと、すでに遅行スパンとしては上乘である。ただ、ここでとくに強調して置かねばならないことは、去る十六日の急落によって、東証、大証ダウとも均衡表が逆転したことである。もし十七日に反騰しなかったならば、その後において相場を上にもってゆくには、非常な力を必要とする。そういうギリギリのところであったが、均衡表が逆転、または好転した瞬間に相場が大きく反転することは、必ずしも珍しいことではない。昭和四

十三年一月いらいでも、ウリ、カイでは数回におよぶがその都度いずれも相場は大きくなっている。今度の好転もまさに大相場型であって、当然ここで大きく急騰する…と考えるべきであるが、もしそうでなく、なお当分この辺中心に往来相場を繰返すようであれば、それは四月天井をも上回り得る力を蓄積するかも知れない……ということを一応考えても良いような気がする。

なによりも今逆転している第二部、第一部の五〇円当り、大証、東証ダウの均衡表がいつ好転するか…それが当面の一大事であるので、油断なきご研究を望むや切である。

なお、今度の相場を銘柄別に見れば、一期のそれはほとんどなかったが、その次の、一目均衡表用紙の下段欄外にある十の記号中第四の〇に1を加えたものが、今度のような銘柄別構成記号として用意したものである。つまり一期以上ということであるが、それに相応する銘柄はリコー、光学、信号をはじめ、ほとんどの値がさ株など三十数銘柄におよんでいる。これがいつ均衡表好転となるかも、当面の大事なことであるが、この相場が仮になおもち合うとしても、先行スパンから見限り、しかく長期にわたるわけにはゆくまい。

というのは、六月二十日以来の相場は、先行スパンによる上限と下限に制圧されてきたわけであって、例えば去る十六日の急落でも下限の二〇五二ポイントを割らなかったところに大きな意味がある。七月二十九日を過ぎれば、下限はあるが上限を圧迫する先行スパンはなくなるからであるが、これまで書いてきた意味あいからも前回のタイトルはそのまま、まだ生きていると思う。計算値は前回通り、変化日は八月十日である。

＝七月十八日記＝

昭和 45 年 7 月 21 日 日本証券新聞掲載

2011/08/21 第 269 号

均衡表の急所(26) 一目山人

《大勢強気で時間まち 年末相場増長のために》

七月十八日記の今回は「七月十六日には二〇六七ポイントといかにも底抜け商状を呈して、ダウの均衡表も東西とも逆転した。ことに二部の五〇円当りが六月二十六日に逆転、七月十三日には一部の五〇円当りも逆転していた。しかし四月当時と大いに違うのは、何よりも遅行スパンである。四月天井では均衡表の逆転とともに遅行スパンがことのほか悪化したのであるが、この十六日の急落では東証はギリギリ、大証はやや余裕があった。ということはスパンが実際の相場に接触してきたわけで、一転して急騰する可能性を潜めていることになる。果たせるかな、十七日、十八日に急騰、遅行スパンとしてはすでに上乘である。ただ十六日に逆転した均衡表がいつ好転するか、それが大事である。なお今度の相場を銘柄別に見れば一期以上の準備構成をとげたものは値がさで三十数銘柄におよんで

いる

が、これらの均衡表がいつ好転するかも大事である。七月二十九日を過ぎれば先行スパンの圧迫はなくなるが、計算値は前回変化日は八月十日である」旨を書いたが、その後七月二十日には大証、十二日には東証ダウの均衡表が好転、八月五日には二一六九ポイントと戻り新値となった。

しかし、それからとかく高ナグレ、八月十日も計算値を実現し得ないばかりでなく、十二日は二一八ポイントと下げてきた。次の変化日は八月十四日、同二十二日であるが、まず十四日は別に問題はなかったものの十五日には東西ダウの均衡表がまた逆転してきた。まことに小幅な騰落相場のくり返しであるが、しかしこの逆転もまったく前回における七月十六日のそれと同じく逆転当日基準線が上昇、しかも遅行スパンは問題なく順調である。

つまり逆転そのものよりも、基準線とスパンが優先するので、均衡表の逆転というも反落の条件はととのっていないばかりでなくかえって急反騰の可能性さえなくはないのである。しかし何分にも極度の閑散続きである、しかも九月における悪材料の輻輳(ふくそう)を控えての気迷い深い折柄である。しかくかんたんに吹き切れる相場とは思えないが、とにかく二十二日にはダウ二一七〇ポイントと戻り新値となり、わが均衡表も一節にして好転してきた。

もっともこの二十二日には、ダウは高くならなくとも均衡表は好転したのであるが、何分にも二十二日の変化日であるだけにこれからどうなるか。必ずしも安心ばかりはできない。均衡表だけを見れば、八月十日までに計算値を出していないだけに、次の変化日九月十日までには二二三八ポイントを取ると考えるのが普通であるが、しかし前週末二十二日の変化日はかなり重大である。

もし九月十日過ぎの反動を必要とするならば、これからあまり買わない方がよい。この閑散続きが破られるのは何よりも環境変化、心境の変化なくしては容易でないと思う。ところが九月は幾多の悪材料が並べられている。まず一千億円以上の払い込みがある。三、四月高値の期日がくる。九月決算の悪いものが出る。米国のダンピング問題の結論が出るというのであるが、そのうち決算悪はたしかにやっかいである。一番やっかいなのは、公定歩合の引下げを早期に期待しているとすれば、それは間違いのもととなりやすいと私も思うが、しかし私は材料を無視はしないものの、まず相場そのものを第一とし、第二は相場構成の市場論的なもの、市場内部のいわゆる家庭の事情、期日、玉関係、大証券、特に投信の動向などについて、材料観ということになるわけであるが、それはことのほかの突発材料でない限り、すでに相場はいつも知っていると考えからである。

その点からすれば、九月の悪材料を承知しながらの、小幅とはいえこの強調相場に注目すべきだと思う。かりに九月十日以後にやや大きく反落するところがあってもおそらくそこは絶好の買場となるであろう。

けだし九月の配当落ちを過ぎれば、当然環境も心境も変化するであろう。これほど長期にわたる閑散小商いは、大勢的に見ればやはり陰の極と見ざるを得ないのであるが、とに

かくこの小高い時代にあつて結論を急ぐ必要はないので、強気における時間待ちという程度の気持ちで、九月十日までと、その後の経過を見定めようと思う。その経過によっては十月以後の年末相場には、相当の期待が持てることになるわけだが、九月十日前といえども遅行スパンにはとくに注目していただきたい。

＝八月二十四日記＝

昭和 45 年 8 月 27 日 日本証券新聞掲載

2011/08/28 第 270 号

均衡表の急所(27) 一目山人

《重大な関頭に立つ 大勢観確定をめざして》

八月二十四日の前回は「八月十五日には東西ダウの均衡表がまた逆転してきたが、これも前回のそれと同様、逆転当日基準線が上昇、しかも遅行スパンは問題なく順調である。かえって急反発の可能性さえなくはないのであるが、なに分にも極度の閑散続きでありしかも九月は悪材料のふくそうを控えての気迷い深い折柄である。とにかく二十二日には均衡表も好転したので、次の変化は九月十日までに計算値を取ると考えるのが普通であるが、しかし二十二日の変化日はかなり重大である。数えられている悪材料はすでに相場はいつも知っていると考えた私としては、この強調相場に注目すべきだと思う。かりに九月十日以後に反落するところがあつても、おそらくそこは絶好の買場となるであろう。これほど長期にわたる閑散は、やはり陰の極と見ざるをえないが、とにかくこの小商い時代にあえて結論を急ぐ必要はないので大勢強気で時間待ちといった気持ちで、しばらく経過を見定めたい。十月以後の年末相場には相当の期待がもてるわけだが、九月十日前といえども遅行スパンにはとくに注目していただきたい」旨を書いたのである。

その後の経過を見れば、八月二十五日には大証ダウの均衡表が逆転、東証ダウも九月二日に二一八ポイントと突っ込んで逆転した。本来ならば、これをもってやや深押しに入るところであるが、値がさの代表ソニーがスパン第四の一期にわたる一本反動を入れたところであり、その他もこれに準じる銘柄が多かったので、ソニーの一節（九日）にわたる反発を期待したのであるが、実際にも九日戻して二五九円の高値をつけダウも九月九日には二七六ポイントの戻り高値となり、均衡表も逆転、遅行スパンも申し分なく、この調子ならば九月十日の変化日もどうにか経過できるかと思つたほどであった。

しかし、ソニーも九日上げて反落に入り、ことに大証ダウが驚くほど悪い。七月二十九日には東証ダウとの開きは一八ポイントであったものが、最近は一〇五ポイントと拡大。大阪の極端な弱さが何を意味するかちょっと見当がつかないが、ともかく東証ダウも九月十日の朝高から反落に転じてきた。何よりも一般的に考えられることは、小幅の中段波乱

の繰り返しであって、ハッキリ二番底を入れるまでは安心できないということであろう。

むろん景気、業績の前途観も従来の樂觀一途とは大いに違うからであるが、私は必ずしもここでの深い二番底を必要とするとは考えていない。しかし今までのところどこにもキメ手が見当たらないのでキメ手の出るまで待つほかはないわけである。

しいていえば、ここでソニーが二六七〇円台の戻り高値はともかく二五一九円の高値を大引けで上抜いてくればかなり有望になってくるが、しかしソニーはニューヨーク上場という特殊事情もあることだし、とにかくここは非常に重大な関頭に立っている相場だけに前回同様、大勢強気でいましばらく時間待ち。ここしばらくの経過を見定めたいと思う。ここしばらくの経過がもし私の今考えているようであれば、それによって大勢観を確定することができると思うからである。

次の変化日はここから上げ相場となれば九月三十日から十月二日、下げ相場の場合は九月二十一日よりも十月十二日ということになっているが、目先この暗い人気は一転して良いと思うが、もしそうだとすれば大証からサヤを寄せてくるはずで、もしそうならば非常に面白いことになるが、東証から縮小すれば、かなり厄介となる。

なお、鐘化についての問合せが多いので、この欄を借りて少しお答えします。鐘化はE四一二円を出現後も前の押目三八円以内の押しで四三三円まで買い進まれたが、これは第一次活躍に対する大きなN四三二円を実現したもので、むしろこれをもって第二次活躍の終りと見るべきであろう。その後押して九月一日には四一〇円引けであるが、これは質問者の大部分の人が気づかれたように、均衡表用紙の斜線を下回ったもので、当分上昇の望みはかけられない。翌日には遅行スパンも実線を下回り九月八日には均衡表も逆転。第三次活躍に入るための波乱としては、相当時間のかかることを覚悟しなければならない。普通なら三七六円前後で下げとまると考えるところだが、そうならば先行スパンをも下回ることになる。そこでとまるかどうか、とくに用紙の斜線との関係、おしらせしてある一節足（九日）を大いに研究して下さい。八月二十四日の寄りからの一節足は、酒田五法でも最も良くないものとなっています。

＝九月十四日記＝

昭和 45 年 9 月 19 日 日本証券新聞掲載

2011/09/04 第 271 号

均衡表の急所(28) 一目山人

《大勢観上重大な関頭 月末までがトクに大事》

九月十四日記の今回は「ダウも九月九日には二一七六ポイントの戻り高値をつけたが、変化日九月十日の朝高から反落に転じてきた。一般的に考えられることは、小幅の中段波

乱の繰り返しであって、ハッキリ二番底を入れるまでは安心できないということであろうが、今までのところどこにもキメ手が見当たらないので、キメ手の出るまで待つほかはない。ソニーが二五一九円の高値を上抜いてくれば、かなり有望になってくる。とにかくここは非常に重大な関頭に立っている相場だけに、大勢強気でいましばらく時間待ち。次の変化日は九月三十日から十月二日。十月十二日ということになっているが、とくに下げている大証ダウからサヤを寄せてくるか否かが大事である」旨を書いたが、その後、期日の投げと値が株に対するウリ人気、とくに西筋のウリあびせにより、二十九日には二〇二〇ポイントまで叩かれた。

この時点におけるダウをどう見るかについては、昨年公表した一目均衡表だけではじゅうぶんでない。その際、約束した続編による変化日のキメ方と波動論、その他との総合によらなければ正確を期しがたいが、ダウの二〇二〇ポインは当時の滔々(とうとう)たるウリ人気に照らしてどこまで下げるかわからないといった気分が陥りやすいところであった。しかしダウのほかにも、落ちのはげしい銘柄について、スパン第四と変化日を調べてみて、すくなくとも一節の反騰は間違いないことを発見した。

一目均衡表の予約番号による質問者には、十二日までの反発を答えたわけであるが、事実、相場は翌三十日に二〇六五ポイントと急騰、じらいいささかジグザグのうちにも十月十二日には二〇九二ポイントと反発してきた。しかしカイ方はほとんどいかれたのに、ウリ方は大きくふくれている。この時点では容易にフンでこない。十二日はちょっとした変化日であったが、しかし中心のソニーが十月二日に待望の二五一九円の高値を大きく上抜いてきた。

そればかりではない。ソニーはダウの安値に先んじて六日前の十月二十二日の二二三五円という安値によって、実に完全な逆三尊。それもY三尊となったのであるから、これはただごとではない。

さらにそればかりではない。この変化日の十月十二日に、一部の逆転に先んじて逆転していた第二部の均衡表が好転したのである。かくてこの変化日から相場にはハズミがついてくることとなって、二一〇〇ポイント台に続騰し、十月十五日には、均衡表も好転してきた。しかし、力のついたウリ方はまだ十分フンできていない。

一九ザヤだった東西ダウの開きは一三五となり、今日のところは一二五である。これからもし、東証ダウよりも大証ダウの上昇が大きいようであれば非常におもしろくなってくる。今日までにややフミが出たと思われるものは、ミツミ、大隅、化工機、触媒などだと思われるが、まだ安心ウリのままの銘柄は相当多いと思う。

当面の変化日は十月二十九日、三十日であるが、その前に来週末の十月二十四日というものがある。これは相場のあり方によってはかなり重大な変化日であるが、大相場になれば、その出発ともなり得る変化日である。それだけに、来週末から月末までの経過について、私としては冷静に経過を見定めたいと思っているが、波動論としてはまだ大勢観は未決定である。前回につづいて、やはり重大な関頭に立っているというほかはないが、しかし、材

料観としては今までの暗さとは、比較にならぬほど明るい。

何よりも高値取組みの期日が、すでにほとんど一巡している。この十月を過ぎれば、今度は安値取組みの期日が回ってくる。そうなると、最近の安値でウリ込んだ向きも、果してジッとしていられるかどうか。問題の公定歩合引下げもだいぶ迫ったようであるが、これはあまり早くない方が良くと思うが、いずれにしても市場の内部材料から見れば、決算悪とのツナ引きを考慮しても、十一月以後の相場は、しかく悲観することはできないわけである。

もちろん、私は均衡表の総合観を重視して、材料は二の次としているのであるが、なにぶんにも前に書いたように波動論としてはまだ中勢観も大勢観も決定していない。およそ相場の中勢、大勢観を決定し得るものは、いろいろの意見はあるとしても、結局、波動論以外に求めることはできないのである。今回の記事も、今一つたよりないものとならざるを得ないゆえんであるが、しかしここで一番大事なことは前に書いた変化日までに二一七六ポイントを上抜き得るか否かということである。当然来週はテンポが早まるべきであるが、もし上抜いて、計算値を取り得るかどうか。さらに上昇相場が延長されて、十一月十八日がつぎの変化日となるかどうか。とにかく戻り新値となれば、それによって、すくなくとも中勢観は決定。安心してウリ方は窮地に立たされることになるであろう。まあ決定前にいろいろ書くことはやめるとして、この際また私事を書かせていただければ、私に対する通信は当新聞社宛ではなく、私の方へ下さい。なお一目均衡表の続編については、ずいぶんお問合せが多いのですが、すでに十月三日で原稿整理は終わりました。しかし、いつ公表できるかは、全然見当がついていません。

＝十月十七日記＝

昭和 45 年 10 月 21 日 日本証券新聞掲載

2011/09/25 第 274 号

均衡表の急所(29) 一目山人

《中勢観もなお未確定 十二月中旬が勝負処か》

十月十七日記の今回は「ダウ二〇二〇ポイントはどこまで下げるかわからない、といった気分が陥りやすいところであったが、スパン第四と変化日から見て、すくなくとも一節の反騰は間違いないことを発見した。しかもソニーが十月二日に待望の二五一九円の高値を大きく上抜いてきた。それも実に完全な逆三尊、それもY三尊となったのである。かくて、まず第二部の均衡表好転とともに相場にハズミがつき、二一〇〇ポイント台に続騰。一九ザヤだった東西ダウの開きは一三五となり、今日のところは一二五である。これからもし、東証ダウよりも大証ダウの上昇が大きいようであれば、非常におもしろくなってく

る。当面の変化日は十月二十九日、三十日であるが、その前に十月二十四日というのがある。波動論としてはまだ大勢観は未決定であるので、前回につづいて、やはり重大な関頭に立っているというほかないが、ここで一番大事なことは前に書いた変化日までに二一七六ポイントを上抜き得るか否か。さらに上昇相場が延長されて、十一月十八日がつぎの変化日となるかどうか」という意味で書いたのであるが、その後の経過を見れば十月十五日に東証ダウの二一八で均衡標好転。十九日には大証ダウその他の均衡表も好転。二十四日にはダウは一時二〇〇台を割ったが、二十九日には二一七ポイントと二〇〇大台を回復、引続いてダウ十一月九日の二四七ポイントとなったのである。

たしかにダウでは十月二十九、三十日から延長されたのであるがしかし銘柄の変化をみれば、早いものは十月二十四日、値がさ株の大部分は二十九日を頭として急落、今日に至っている。ここでちょっとご注意申上げたいことは、私がダウを見ているのは、株価全体の動向、とくに八行相場の人気うつり変り、変動、騰落の一般的限界を見るためであって、いうまでもなくダウで商いは出来ないのであるから、そのダウに照らしてとくに注目すべきは銘柄である。

最近の急落相場に直面してダウはどうか、という電話がしきりであったが、私の答えはダウではない、持株の向背が大事なのだ、と常に返事をしているが、これらのことは、一目均衡表の読者には良くわかっているはずである。

ところで、七月二十九日大証ダウ二一三ポイントで東西ダウの開きは一九となったのであるが、その後大証ダウがとくに下げて十一月九日東証ダウが二四七の戻り高値をつけた当日は、一四二ポイントのサヤとなったのである。前回に書いたように大証ダウからサヤを寄せるのではなく、東証ダウからサヤを寄せて、今日は一〇二の開きと縮小されてきた。実に関西筋のウリ腰の強さには驚くばかりであるが、大証ダウの均衡表も十一月十四日には逆転、十七日には東証ダウも逆転、今日に至っている。

ここで今一つ皆さんに申し上げることがある。ダウは変化日十月二十九日からも上昇したが、ついに二一七六を上抜く力もなく、十一月四日から二四七ポイントをつけた翌日までに六日間にわたって朝高引け安の小陰線が続けて急落してきた相場だ、ということである。いまさら酒田足なんぞという見識家もあるが、私はやはり良いものはよい、歴史はくり返す、新古を問う必要はないと思っている。

ところで問題はこれからどうなるのかということであるが、いまの私にはそれがわからないで困っているのである。というのは、このごろ変化日がしきりに多い。にもかかわらず、その適格性もうすれている。たとえば、十一月二十一日はかなりの変化日であったが、そこで転換せず、下げが急調をおびてきた。むろん変化日としてはそれでも良いのであるが、しかしかような現象は従来の往来相場範囲を逸脱しつつあるものかも知れない。いぜんとして往来相場なれば、いくら悪くても明後二十八日の変化日はものをいわなければならない。

はたしてどうか、それは今のところハッキリしないが、銘柄別に見ればすでに一期の下

げを過ぎつつあるものもあって、この辺でひと反発入れる可能性はじゅうぶんあると思う。もしそうだとすればいまさかんに売り叩かれている値がさ株も、早いもので十二月八日、おくれるものは十八日までの戻りは入ると見なければならぬ。なぜそうも考えるかといえば、久しく売られるに任せられてきた松下の下値限界が近づいてきたからである。

松下が大相場に出発したのは一昨年の三二〇円からであるが、その当時の波動から見て、いかに悪くても三三〇円は当面の底値であると考えざるを得ないからである。その点から見れば、この二十八日の変化日がさらに延長されるとすれば、十二月九日を転機として、年末から新春相場はだいぶ明るくなるわけである。しかも、そのころ米国でさらに金利引下げが行われるかどうか。それはともかくとして、ここでの値がさウリはどうかと思う。むろん戻りはウられるに間違いないが、いつ大底入れかも、十二月中旬以後の相場を見ればだいたいの見通しはつくであろう。=十一月二十六日記=

昭和 45 年 11 月 28 日 日本証券新聞掲載

2011/10/09 第 276 号

均衡表の急所(30) 一目山人

《二〇一八も化け線か 底入れ近し、好調株へ》

十一月二十六日記の前は「たしかにダウでは十月二十九、三十日から延長されたのであるが、しかし銘柄の変化を見れば値がさ株の大部分は二十九日を頭として急落、今日に至っている。関西筋のウリ腰の強さには実に驚くばかりであるが、大証ダウの均衡も十一月十四日に逆転、十七日には東証ダウも逆転。ダウについては変化日十月二十九日からも上昇したが、ついに二一七六を上抜く力もなく、十一月四日から六日間にわたって朝高、引け安の小陰線が続けて急落してきた相場である。

ところで問題はこれからであるが、今の私にはそれがわからないで困っている。このごろ変化日がしきりに多いにもかかわらず、その適格性もうすれている。たとえば十一月二十一日はかなりの変化日であったが、そこで転換せず下げが急調をおびてきた。むろん変化日としてはそれでも良いのであるが、いぜんとして往来相場なれば、いくら悪くても二十八日の変化日はものをいわなければならぬ。松下が大相場に出発したのは一昨年の三二〇円からであって、三三〇円は当面の底値と考えられるが、二十八日がさらに延長されるとすれば、十二月九日を転機として年末から新春相場はだいぶ明るくなるが、米国の再利下げがいつになるか」といった旨を書いた。

困っているということは『こんな時には弱気は書きたくないが、どこまで下げるか、それがわからない』という気持ちの表現であるが、つぎからつぎへとウリ崩しが流行して、十一月末には一九九〇ポイントまで下げた。しかし十二月一日に米国の公定歩合再引下げ

により一気に二〇二七ポイントまで急反発した。これで二十八日の変化日がものをいったかと思ったものの、翌日から反落。これは私が四十年前から「決定反動」と名付けているもので、トテモ恐ろしい反動来となりやすい姿勢である。

本紙編集局加納氏の酒田五法によれば、おそらく「バケ線」に相当するものであろうが、その後西筋からのつぎつぎの叩きにより十二月八日には一九六三ポイント、変化日の九日も大差なく、果して転換するかどうか。私もひそかに考えさせられたのは、十日の後場になっても国際電気や松下などをウリ叩かれたが、さすがに引けから締まって翌日はたちまち二〇一八ポイントである。もし十二月九日の変化日が延長されれば十八日まではダメということになるが、この反発でひと息入れた気持ちであった。しかし二〇一八ポイントをつけただけでは依然としてバケ線でないとはいえない。波動論として、中間波動について大事なことは、二〇二七ポイントを上抜いてくることであって、それまでは反騰相場を期待するわけにはゆかないが、今日はすでに二〇〇〇台を割っている。二〇一八への急反発が化け線とすれば、どこまで突っ込むかわからない。コワレ相場だから値はわからないが、しかし時間的にはきわめて良いところへきている。十二月九日の変化日は上げ相場なれば、必ず「天井打ち」といえる日であるが、下げ相場はコワレまたはコワシであるから、そうカンタンではない。しかしこれからはすくなくとも中勢的な、あるいは大勢的な大底入れの圏内にはいったもの、ということだけはいえる。

これほど人気の腐っているさなが、ことにコワシ屋の跳梁している折柄、あまり深刻なことは書きたくないので、下値の計算値は、この際は書かないことにするが、大手証券にしても、値頃、時間は良いところへきたとは思っているであろう。にもかかわらずあえて積極的に買って出ないのは、材料観よりもむしろ、帳ジリをながめてのことではあるまいか。

問題は、大証券の出方一つであって、ただただウリ叩かれている電機株については、松下の決算とソニーの動向にまつほかないがソニーは今でも公募値に対する責任感を捨ててはいない。ソニーさえ変えれば、いつでも底入れ確認ということになるわけであるが、マア軽く下げる株は下げるにまかせるとして、株にとって今後の大問題は、円の切上げと、それにまつわる諸政策である。その意味においては、大相場型の平和を初めとする損保、商社、その他の含み資産株は、意外な相場時代がくると思う。さらに低、中位にも来年度の本命はたくさんあると思う。鐘紡も大相場型であるが、その他富士紡も何十年ぶりかに来年は面白いと思う。化学株安で叩いた日曹も来年は増資に進む、本当の活躍はこれからだと見られるが、この際いたずらに、悪いことばかり見ないで、これから心機一転、良いものに目を向けるべきではあるまいか。なお、とにかく相場の大きな転機は近いはずであるが、酒田五法でいうところのバケ線のあとの下値は小さくなる、ということになるかもしれない。=十二月十五日記=

昭和 45 年 12 月 18 日 日本証券新聞掲載

《ほぼ「大相場型」だが ダウの重大点二一七六》

十二月十五日記の今回は「十二月一日には米国の公定歩合引下げにより一気に二〇二七ポイントまで急反発したが、これは決定反動に終わり、十二月十一日の二〇一八ポイントへの反発もバケ線らしい。波動論として中間波動について大事なことは、二〇二七ポイントを上抜いてくることであって、それまでは反騰相場を期待するわけにはゆかないが、二〇一八がバケ線とすれば、どこまで突っ込むかわからない。しかし時間的にはきわめて良いところへきている。十二月九日の変化日以後は、すくなくとも中勢的な、あるいは大勢的な大底入れの圏内」とみた。

さらに「問題は証券の出方一つであって、ウリ叩かれている電機株については松下の決算とソニーの動向に待つほかないが、ソニーは今でも公募値に対する責任感を捨ててはいない。ソニーさえ変れば、いつでも底入れ確認となるわけであるが、しばらく下げる株は下げるにまかせるとして、今後の問題は円切り上げと、それにまつわる諸政策であり、大相場型の平和、損保、商社、その他の含み資産株、さらに低、中位にも来年度の本命はたくさんある。鐘紡、富士紡、日曹も本当の活躍はこれからだと思うが、この際はいたずらに悪いことばかり見ないで、心機一転。とにかく相場の大きな転機は近いのだから、まず良いものに目を向けること」ということを書いたが、十二月十七日には一九七二ポイントまで下げた。ダウでは大したことはないものの、値がさの悪化ぶりは著しかったが、この日は均衡表では最後の一つ手前の変化日であった。それからダウに関する限り、いくぶん戻したものの、値がさの悪化ぶりは依然たるもので、ついに最後の変化日たる大納会まで下げ続けた。しかしダウは大納会の朝寄り安値一九七ポイントをもって終わりを告げた。この変化日は、きわめて重大であるだけに、ダウの上では新春安値なし、ということが決定されたわけだ。

下げ相場はコワレであるだけに値段は容易にわからないが、すでに最後の変化日に直面した以上、もういくら叩いてもコワスことはできないからである。コワレるならば大納会前のことであるだけ、九月十日以来の下げ相場も、すでに中間波動を逸脱し得ないことが明らかとなったのである。

新春相場に対する一般人気も異口同音に三、四月安値ということであったが、大納会を終わった以上、とうてい、年度末安値は考えられない。もっとも大発会后、銘柄によっては安値をつけるものもあったが、ダウの均衡表は一月八日の二〇四〇ポイントで東西とも好転、しかも、これは十二月十一日の二〇一八、十二月一日の二〇二七のバケ線を一気に上回ったもので、前途の一大奔騰を期待するに十分であった。しかし、今日までのところ

十九日の二一五ポイントを高値にモンでいるに過ぎない。金融相場の特徴としての低位株買いは今後も相当イキの長いものであるが、何よりも三月決算悪による悲観人氣が強く、そのために値がさ株に対する買気が今一つ盛り上がらない。早くも三月の業績悪を点々としてウラれているが、日証金の貸株残は連日増加の一途をたどり、すでに一億株を超えている。市場人氣としては、これをとくに樂觀しているが、私も大局的には大相場型として同感である。

しかし上げ相場が本調子になるためには、まず融資差引残の激増を必要とするか、融資差引残は大納会の八百四十一億円に対して、今日は七百八十五億である。いつでもよいかから差引残が大きく増加に転じれば、そこから借株残の激増が本格的になるという。そこで、これからの問題であるが、中間波動としては、どこかで五〇～六〇ポイントの押しを必要とするが、当面の変化日は二月一日、二日であり、そのつぎが三月一日～四日である。

もし二月初めがダウの戻り高値になれば、そこから押しのはいる順序であるが、中勢的には三月四日までの向背いかんである。それまでに昨年九月九日のダウ二七六ポイントを上回るかどうか。中間波動はいかようにもあれ、基本波動としては、それが一番大事であって、それさえ実現すればアトは単なる押しに過ぎず、きわめて平坦な大道を進むのみである。その場合の計算値は最小限二二〇ポイントであるが、とにかくソニーの奔騰、松下の三二〇円からの立ち直り、さらには低位株の永続性などから考えると、昨今のモタつきについては大して気にする必要はないと思う。

すでに、一節の押しを入れているものもすくなくない。優良値がさ株にスイッチする日も近いはず。今度はソニー、松下とともに、今日四九〇円まで叩いた東京電化が三本柱となるであろう。電化につれて現株ながら東北金も有望。 均衡表でとくに注目されるのは横河電機であるが、薄商いだけに二四三円引きを見る必要はある。もちろん低位株に当面大いに有望なものが多い。鐘紡、富士紡、日曹も相場はこれからであるが、東洋電機も力がついてきつつある。興人にくらべて山パルの割安が目立つが、帝石や三井鉱山に比較して三菱鉱が大きくハネて良いはず。もし二月からダウの押しがはいるとしても、低位株はそれからが本番となるであろう。

とにかく下げ相場の値段の限界は容易にわからないが、変化日は前からわかっている。変化日における転換か、加速度か、あるいは延長か、それさえわかれば相場はきわめてわかりやすい、ということが大納会における重大変化日の変化において、今さらながらしみじみと感じたわけである。

＝一月二十五日記＝

昭和 46 年 1 月 28 日 日本証券新聞掲載

《いよいよ大相場型 やはり重大点二一七六》

一月二十五日記の今回は「値がさは最後の変化日たる大納会まで下げ続けたが新春相場に対する一般人気は異口同音に三、四月安値ということながら、すでに大納会を終わった以上、とうてい年度末安値は考えられない。金融相場の特徴としての低位株買いは今後も相当イキの長いものであるが、何よりも三月決算悪に対する悲観人气が強く、そのために値がさ株に対する買い気が今一つ盛り上がらない。早くも三月の業績悪を点々としてウラれているが、日証金の借株残は連日増加している。私も大局的には大相場型として楽観しているが、何よりも融資差引残が激増するまでは、目先の楽観材料とはいえない。この差引残が大きく増加に転じれば、そこから借株残の大きさが大きくものをいう。中間波動としては、どこかで五〇～六〇ポイントの押しを必要とするが、当面の変化日は二月一日、二日であり、そのつぎが三月一日～四日である」という気持ちだった。

さらに「もし二月初めがダウの戻り高値になれば、そこから押しのはいる順序であるが、中勢的には三月四日までの向背いかん、それまでに二一七六ポイントを上回るかどうか。それが一番大事であって、その場合の計算値は最小限二二一〇であるが、昨今のモタつきについては大して気にする必要はない。すでに一節の押しを入れている値がさ株にスイッチする日も近いはず。今度はソニー、松下とともに、東京電化が三本柱となるであろう。均衡表で注目されるのは横河電機であるが、二四三円引けを見る必要がある。鐘紡、富士紡、日曹も相場はこれからであるが、東洋電機も力がついてきつつある。山パルの割安も目立つが三菱鉱が大きくハネて良いはず。もし二月からダウの押しがはいるとしても、低位株はそれからが本番となるであろう」と書いたが、その後ダウでは一月二十七日、三十日の二〇九九ポイントを安値に四日は二一三三の戻り新値である。二月一日、二日のダウが戻り高値でなく、二週以上にわたる高値モミをこの二月三日～四日で打破してきたわけである。

これで二月初めの変化日はすくなくとも延長されたことになるが、もしこれから融資差引残が急増してくれば、延長にとどまらず加速度されることになる。加速度されるとなれば、いよいよ大相場型となるわけであるが、それをたしかめるためには、やはり融資差引残の向背を注目する必要がある。

借株残はさらに増加したが、融資残はいぜんとして減少している。これは期日関係による投げっぱなしが主因と考えられるが、借株増、大商いも一向に偉力を示さないのは、要するにこの融資残によるものであって、これがいつ激増するか、それは買い方の気力回復、ないし大衆参加を示唆するものでもあろうが、とにかく融資残激増の瞬間からフミ上げ相場を考えて良いと思う。

それまではいぜんとして低位株中心であるが、すでに変化日が延長された以上、これが

らは値がさ、低位と交互に人気を盛り上げて、結局ウリ込み株の大フミ上げにつながるのではないだろうか。

これからは、とくに三月決算を中心として、いろいろと攻防論がくりかえされるであろう。現に今日も引けぎわにちょっと高ナグレのかたちだったので、これで上げ相場は終わり、何々の悪材料などとしきりに悪宣伝をながしている向きもあるそうだが、しかし相場は変化日延長で、すでにきまったのである。

およそ材料と相場との関係は、一般的には材料が相場を支配すると考えられているが、そうである時よりも、そうでない時の方がはるかに多い。私としては、ほとんどの場合、材料を評価しているのが相場だと考えているのである。悪材料を織り込んだ、そうではない、などということはおよそ一つの見当にすぎない。何よりも相場にきくことである。

ところで、ここで果して変化日が延長されたとすれば、このつぎの変化日は二月の二十日である。これは、前には書かなかったけれども、三月初めよりも重大である。この二十日がダウの高値になると、その前にひと頭打ちとなるとでは、アトの考え方にはかなりの相違もあるが、当面の問題は二月二十日までにダウ二一七六ポイントを上回るかいなかである。上回れば最小限二二一〇は必至であるが、それだけでそれ以上の計算値を書く必要はないほどである。

今までのところ基本波動はもとより、中間波動さえ構成されていないので、とくにこれから二十日までの経過について、特別の関心を寄せるわけであるが、もし二一七六を上回れば問題なし、上回らなくても大して不安はないはずである。

なお、まだモタモタしている鐘紡、富士紡、日曹の第二ラウンドはまさにこれから、東洋電機もこれから、横河電機はちょっと先回りをしたが、アト一両日が重大。山パルは減配かいなか。しかし三菱鉱は大化けものではあるまいか。これはすでに石炭株ではなく、しゅんせつ、建設、住宅、石油など各関連株として、十年振りに本格的な大出直りとなる会社である。 =二月四日記=

昭和 46 年 2 月 6 日 日本証券新聞掲載

2012/01/15 第 290 号

均衡表の急所(33) 一目山人

《すでに大相場確定 当面のひと反動を見て》

二月四日記の前は”いよいよ大相場型”という題名のもとに「二月一日、二日のダウが戻り高値ではなく、二週以上にわたる高値モミをこの二月三日～四日で打破してきたわけで、二月初め変化日は延長、融資差引残が急増してくれば、延長にとどまらず加速度、いよいよ大相場型となる」とした。

さらに「借株残は増加したが、融資残は依然として減少している。これが増加に転じた瞬間からフミ上げ相場を考えて良いが、それまでは、依然として低位株中心であろう。しかし、すでに変化日が延長された以上、これからは値がさ、低位と交互に人気を盛り上げて、結局、売込株の大踏み上げにつながるのであろう。これからは、とくに三月決算を中心として、いろいろ攻防戦がくりかえされるのであろうが、すでに相場の方向がきまったのである。このつぎの変化日は二月二十日であるがこの二十日までにダウ二一七六ポイントを上回るかどうか重大である。上回れば最小限二二一〇は必至であるが、上回ればすべてに問題はなくなる」旨を書いたが、その前回は一月二十五日記であった。

その間隔の短さは、二月十五日～六日から遅行スパンの悪化するものが多いが、これを売られては困る…という配慮からであった。その後スパンの良いものから奔騰して、二月十八日には二一七六ポイントを突破、二十二日には二二三〇と二二一〇を上回ってきた。これですべては完了。いよいよ大相場時代を確定したわけである。

その後ダウの上では、一月二十五日記の三月一日～四日、さらには、九日も無事、今日まで延長されてきて、今日のダウは二三〇九であるが、この限りない変化日延長も、さすがに大相場時代にはいっただけのことはある。

しかし銘柄別に見れば、二月二十日前後に頭打ちとなったものがきわめて多い。そのアト三月一日～四日に頭打ちとなったものも相当ある。銘柄を入れかえて、ダウの上ではわが変化日に二、三日敬意を表した急変を見せただけで今日まで延長されてきたが、一般的にはダウに幻惑されて、意外に下がっている銘柄が忘れられがちである。すでに一期の下げを続けている株も相当あるが、昨今売り方が時々売りたいしている株はほとんどそうした株である。借株残の激増裏にも、融資差引残が減少している間は良かったものの、これが増加に転じてからは、いよいよ売り方の踏み上げ時代にはいっただけであるが、この売り込み玉は、容易に踏めない事情にあるもよう。

昨年時に売りたいしているのはあたかも少女誘かい劇のような人騒がせのしぐさに過ぎない。いろいろ不時たたきをして見ても、一般性にはつながらないが、かくて売り方は一層深みにはまるだけであろう。

しかし当面の変化日は、十二日は大したことがないとしても、三月十九日は相当に大事である。もし、これをさらに延長しても、その後は一層大きな波乱含みとなるはずである。

計算値としては、さし当たり二三三二～二三三八が注目に価するが、それから上は二三九〇、二四二二～二九といくらでもあり、その上は二五八八、二六二一、最高は三四四三である。

もちろん時間との関係であるが、いかに大相場型といっても、ダウが新高値に出るには、なお幾多の波乱があるはずである。はたしてどの計算値が今年上期、下期、来年上期に正しいことになるかは、かかって、三月十九日を変化日としての押しの深さにある…今のところでは、そういうほかはない。

もし三月十九日以後においても、さらにダウの騰勢が延長されるようであれば、その後

の反動は相当やっかいなものになるはずである。私は、大相場を期待しながらも、今のところ、差し当たり六月上旬の一頭を考えているのであるが、そのためには、三月二十日からの反落を必要とする。二月二十日からなれば彼岸底で良かったが、急落相場でなければ、一期の押しは必要であろう。いずれになるか、大相場時代だけに、今少し経過を見定める必要はあるが、要するに押しは単なる押しである。

ソニーはかつて書いたように、十二日公募値を回復した。アトの関心は松下であるが、松下の公募値逆算は五〇四円であって、その可能性もじゅうぶんある。引けあと規制があったが、この規制銘柄を見ると、大したことはない。かえってウリ方不利ともなりかねないであろう。ただ十二日の変化日がものをいえば、相場のためには一層良い。なお、今は良く日時がわからないが、すぐハッキリする。

なお、本紙の愛読者からの質問として、いろいろありますものの、とくに一目均衡表として、大相場型ということが、何んでいえるのか…ということであります。それは要するに波動論。基本波動と中間波動の結論として大相場型と決定したわけでありまして、拙著『一目均衡表』にはまだ書いてありません。 =三月十一日記=

昭和 46 年 3 月 13 日 日本証券新聞掲載

2012/01/22 第 291 号

均衡表の急所(34) 一目山人

《おくれ過ぎた反動 普通ではない波乱ぶり》

三月十一日記の前は「二月十八日にはもっと重大な二一七六ポイントを突破、二十二日には二二三〇と最低計算値二二一〇を上回ってきた。これですべては完了、いよいよ大相場時代と確定したわけである。その後ダウの上では、三月一日～四日、さらには九日も無事、今日まで延長されてきて、今日のダウは二三〇九であるが、この限りのない変化日延長も、さすがに大相場時代に入っただけのことはある。しかし銘柄別に見れば変化日ごとに頭打ちとなり、すでに一期にわたって下げている株もすくなくない時にうり叩いても一般性にはつながらないが、融資差引残が増加に転じてからはウリ方は一層深みにはまりやすい。当面の変化日三月十九日は相当大事であるが、これをさらに延長しても、その後は一層大きな波乱含みとなるはずで、計算値としては幾らでもあるものの、時間との関係が大事である。いかに大相場型といっても、ダウが新高値に出るにはなお幾多の波乱があるはずで果してどの計算値が今年上期、下期、来年上期に出現するかは、かかってこれからの反動いかにある。今のところ三月十九日の変化日を見るほかない」旨を書いたが、その後も極端な八行と循環をくり返すのみで、変化日には規制が出て、ちょっと押しを入れてまた出直り、ダウの上ではきわめて強い一本相場を続けてきた。

さすがに大相場観も一般的となったが、それにもかかわらず安値の売り込み玉は容易にフメない。ニューヨーク高とともに外人買いは意外にアトを絶たない一面、金融のダブつきがとくにはなはだしく、機関投資家ばかりではなく、ヤミ金融の暗躍も容易ならぬものがあるという。まことにますます大相場型となってきたが、しかし四月十二日ダウ二四三五ポイントと前に幾つか書いたうちの計算値二四二三～二九を実現した以来は、いよいよ波乱圏内にはいった相場である。すでに一巡を終わったからばかりではない。この計算値は能動面ただ一つのものであって、この外に幾つもある計算値はみな受動面ばかりである。ことに鐘化均衡表の読者は、おわかりのことと思うが、四月十九日から二十日、二十一日、二十二日と変化日が集約的に連続し、これをも無事に突破することは容易ではない。

昨二十日の急落も当然の経過であるが、今日の急反発は予期されたこととはいえ、あまりに強きに過ぎる。まさに大相場時代の面目躍如たるものであるが、私が大納会を最悪場面として、大相場来の計算値は、三一四〇～三二九四ポイントであった。今もなお、その実現を期待しているわけであるが、しかしそれを実現するためには、すでにこの反動はおそすぎた、とさえ考えられる。ここではすくなくとも三波Nの中間波動を実現しなければならぬ。それなくして、二十日の突っ込みだけに終わってさらに買い進まれるようでは、高値は二五五〇ポイント台ということになるばかりでなく、非常な大波乱型となる。私は今でもそうは考えたくないので、ここしばらくの経過を見定めたい。

今私が描いている経過は、中間三波動として二二八四ポイント、ないし二二五一～九ポイントを実現すれば、時間との関係において、前に書いた六月天井説が一層有望になってくると思うのである。もしそうだとすれば、二十日の急落、二十一日の急反発が、あたかも高値三尊構成の位置にあった銘柄が多いただけ、アトは相当ヤッカイなことにもなりかねないが、何分にも大相場時代であるから、常に物色買いは連続するであろうし、利下げが〇・二五なればなお低位株時代もじゅうぶん期待される。ハ行と循環時代は容易に終わらないと思われるが、しかし、最近のハ行と循環、とくに三日とたもない波乱ぶりを見てみると、ただ単に、大相場時代だから、とばかりはいつておれないものがある。どう考えても不思議の感にたえないのであって、決して単なる人気作用とは思えないで困っている。

最近めまぐるしい株価の変動、商いのうつりかわり、人気の変化を見ると、とても普通なものとは考えられない。ウリ玉をねらったの自己売買かとも考えてみたが、業者が、これほどのアクラツなことをするはずはない。関西筋では時々うわさに上るグループがあるようだが、東京にも何か、毎日一パツねらいのグループがあるのではあるまいか。全く無軌道の波乱ぶりを見れば、そう考えるより考え方はない。

私は十分調べてはいないので、決定的なことはいえないが、寄り付き前の成り行き売買数など、もし手品のネタに使える方である。そうした黒幕、演出家がいるかどうかは、私は知らないが、とにかくこの現象は、決して健全なものではない。信用規制はもちろん結構であるが、この乱高下相場の銘柄については、すべて報告銘柄として、市場取引の肅清、健全化をはかることが、今とくに必要なのではあるまいか。

なお、私に変化日を書いたからとて、それに先回りをしないように。皆さんのお便りを見ると、結局私は何も書けなくなる。十回当てても、一回間違えると大変なことになるからです。この徹底的な作為相場に眩(げん)惑されないようご自重を願います。

＝四月二十一日記＝

昭和 46 年 4 月 24 日 日本証券新聞掲載

2012/01/29 第 292 号

均衡表の急所(35) 一目山人

《この上もない好反動 高値も時間も増長さる》

四月二十一日記の今回は「その後も極端なハ行と循環をくり返すのみで、変化日には規制が出て、ちょっと押しを入れてまた出直り、ダウの上では、きわめて強い一本相場を続けてきた。さすがに大相場も一般的となったが、それにもかかわらず安値の売り込み玉は容易にフメない。まことに、ますます大相場型となってきたが、しかし二四二三～二九ポイントを実現した以後は、いよいよ波瀾圏内にはいった相場である。すでに一巡を終わったからばかりではない。この計算値は能動面ただ一つのものであって、四月十九日から二十日、二十一日、二十二日と変化日が連続的に集約し、これをも無事に突破することは容易ではない。昨二十日の急落も当然の経過であるが、今日の急反発は予期されたこととはいえ、あまりに強きに過ぎる。まさに大相場時代の面目躍如たるものであるが、この大相場の大きな計算値を実現するためには、この反動はすでにおそすぎたとさえ考えられる。しかも二十日の突っ込みだけに終わって、さらに買い進まれるようでは、高値は二五五〇ポイント台ということになるばかりでなく、非常な大波乱型となる。時間との関係において、前に書いた六月天井説が実証されるかどうかはかかって、ここしばらくの経過にある。ただ最近の相場は決して単なる人気作用とは思えない、何か作為的なものを考えるより考え方はない」旨を書いたが、まずこの最後のところを申せば、大してアクラツなものではなかったようである。

一、二の銘柄を除いたその他の多くの波乱株は、相場の調子に乗じることの上手な業者ないし仕手の動きによるものであった。これは少しゆき過ぎではあっても、自然のなりゆきとして、相場社会としてはおそらく仕方のないことであろう。むしろ相場の調子を利用して、わがお客に利益せしめるなれば、それは必ずしも悪いことではないかも知れない。そうであれば、相場社会の良き利用法とも考えられなくはないのであるから、このことを一言しておく。

さてその後の経過は、皆さんご承知の通り、ダウの上では二十日の突っ込みを決定反動として、五月四日の二四八九ポイントまで上げてきた。当時ザラバでは二五〇〇大台乗せ

もあったが、その後反動を入れて十日には二三九〇ポイントとなってきた。ザラバでは二十日の安値と顔合わせもあったが二十日のそれと違うのは、すでに遅行スパンが悪化しようとしている一面、十七日には東西とも均衡表が逆転し、十八日の変化日にも直面している。戻したのが良くないわけで、十九日には二三六五ポイントと二十日の安値を下回ってきた。

かくては当然ひとくずれあるべきところであるが、その後戻して今日も極度の閑散に強い戻しを入れている。おそらく、ウリ込んだためであろうが、出来高が七千万株を割ったことは大発会以来、土曜でさえなかったのが、平日で割ってきた。

大発会以来、これほど大きく上げた相場だから、本来ならば融資差引残も最高圏にあって良いわけだが、三月の最高から二百五十億円の激減である。今週一杯の戻りは良いとしても、もし来週も突っ込まないということになれば、遅行スパンの好転を待って買いを考えねばならなくなる。

ここ数日の経過が重大であるがそれはともかくとして、二四八九ポイントから二三六五ポイントまで反動を入れた経過を大局的に見れば、まことに申し分のない反動というほかはない。二五〇〇大台のせからさらに買い進まれて、二五五〇ポイント台を実現すれば、その後の反動は相当やっかいなことになるが、その手前で反動を入れただけ、高値もさらに大きくなり、時間的にも八月か九月ということになり得る可能性が出てきた。

その意味では、当面の反動は深いほど良いわけであるが、目先的に見れば、とかくウリあせりの多い一面、物色買いはアトを絶たない。それにライ油、大福工、三光汽、立石など、いつ大きくあふられるか知れない銘柄はいくらか目につく。

私が希望している基本波動の計算値は二二九〇ポイント前後であって、それが実現すれば、天井値はさらに大きくなるが、むろんそこまでの深押しはむりであろう。中間波動の計算値としてはYの二三四九、Nの二三三二ポイントであり、当面の変化日は五月二十六～八日、六月四日、六月二十六日となっているが、何分にも大相場時代である。ずいぶん問い合わせがあったが、まだカラウリの時機ではない。変化日は少なくとも、銘柄と人気の移り変わりはある。

現に、四月二十日前後の変化日、それにつぐ五月四日、七日には値がさ株を除いた大多数の株が頭打ちとなっているが、それらはすでに一期ないし二期をはるかに過ぎている。もし値がさがおとなしくなれば、しばらく中位、とくに低位株に人気は回ってくるであろう。

今の私の情熱としては、まず再活躍への出発を、そして今年の大天井と、その時期を決定することであるが、それは当面する反動の限界を見ればハッキリすると思っている。

＝五月二十四日記＝

昭和 46 年 5 月 27 日 日本証券新聞掲載

《波乱期は近づくが 天井期の予告は未だし》

五月二十四日記の今回は「五月四日の二四八九ポイントまで上げたアト反動を入れて、十日には二三九〇ポイント。ザラバでは四月二十日の安値に顔合わせもあったが、二十日のそれと違うのは、すでに遅行スパンが悪化しようとしている一面、十七日には東西とも均衡表が逆転し、十八日の変化日にも直面している。戻したのが良くないわけで、十九日には二三六五ポイントと二十日の安値を下回ってきた。かくては当然ひとくずれあるべきところであるが、その後戻して、今日も極度の閑散に強い戻しを入れている。おそらく、ウリ込んだためであろうが、出来高が七千万株を割ったことは大発会以来、土曜でさえなかったのが、平日で割ってきた。大きく上げた相場でも、融資差引残は三月の最高から二百五十億円の激減である。今週一杯の戻りは良いとしても、もし来週も突っ込まないということになれば、スパンの好転を待って買いを考えねばならなくなる。ここ数日の経過が重大であるが、しかし二四八九から、二三六五ポイントまで反動を入れた経過を大局的に見れば、まことに申し分のない反動というほかないが、この反動によって、高値と時間も増長される。当面の変化日は五月二十六日～八日、六月四日、六月二十六日である」旨を書いた。

しかし、その後の相場は五月二十七日から積極カイとなり、さらには六月五日からも加速度されて、相場は上昇の一途をたどった。五月十九日のダウ二三六五ポイントの突っ込みが、小さいながらも一本底となったが、これは五月十八日の変化日がものをいったわけで、ウリ込みのはげしかったことを物語っており、その後一本調子の奔騰では、いかなるウリ方もフメなかったであろう。

ことに六月十七日は五月の突っ込みから見て、ちょっとした急所であったが、翌十八日に二五八四ポイントの新高値をつけたにもかかわらず、その後、米国のプライム・レートの引き上げ、ニューヨークの急落を入れながらほとんど動揺していない。これは驚くべきことで、本来なれば相当の反動を入れて良いところである。それだけにここ両三日の経過はとくに大事であるが、もしこの調子で今週買い進まれば、やはり二十六日が問題となる。その場合ダウ二六一三以上を実現すれば、一層問題であって、小相場時代なれば、この二六一三ポイント以上の実現によって、他の条件が整えば、まさに天井打ち、と見るべきである。

しかし、ここでの先端波動一二四ポイント幅は良いとしても、五月の押しがわずか十三日に過ぎないので、これほどの大相場時代としては、天井打ちを決定し得ず、私はいまだに迷っていて、二六一三以上を実現した以上、来週以後の経過を見定めたいと思っている。それに一二四ポイントという幅もこの上げ相場としては十分でないが、しかし昭和三十六年天井の先端波動は一二四ポイントであった。かれこれ勘案して、その他の条件のわから

ない今日は経過待ち、ということにしているが、いずれかには直ぐきまる。今日のところ、六月二十六日以後も、大なる反動は入れないで済むであろう、という仮定の上になつて、以下を書くことにしたので、そのつもりで読んでいただきたい。

ところで、五月の好反動によって高値も時間も増長されており、しかもこれまでの上げ相場では、まだ大天井打ちの時期も、値段も予告されてはいない。大発会以来、これほど奔騰した相場にして、予告なくして、しかも実証もなくして大天井を打つはずはないから、それが出現するまでの悪目はお安心して買えるわけである。五月の突っ込み以来、まんざんとではあれ、八月末から九月はじめころが天井時期ではないかと考えているが、もちろんまだ実証されたわけではない。六月二十六日以後にもし波乱がなければ、おそらく七月六日以後に波乱を入れて、天井時期と値ごろを予告することになるであろう。

もし、前記の八月末という天井時期が早まって、七月二十三日から八月二日にかけて天井を打つものと仮定すれば、六月二十六日の変化日は大きくものをいわねばならぬ、という仮説をたてるほかない。波乱期は近づきつつあるが、それは目前に迫っていることなので、実際の経過を見定めて、アトの計画をたてることにする。

私は確定しないことを、予想的に書くことは、とくにつつしんでいるが、値ごろについても、およその見当はつけてあるものの、たんなる計算値としては、大発会以来、これまでいろいろ書いてきた通りで、まだその中から選別確定するところまではきていない。対等波動の第一は今日までに取ったわけである。第二は二六五五ポイントであるが、これをこのまま一本調子に取ることは、まず期待出来ないことであろう。とすれば、それにいたる以前の波乱こそ、たのしみ多き見もの、というべきであろう。

なお天井の時期、値ごろが確定したなれば、ただちに書いた方がよいが、あるいは天井を打つまでまつべきか、底値から上昇相場を書くのは楽であるが、何分にも天井打ちを書くことはよほど影響を考えねばならぬので、今のところ迷っている。

＝六月二十二日記＝

昭和 46 年 6 月 25 日 日本証券新聞掲載

2012/02/12 第 294 号

均衡表の急所(37) 一目山人

《重大な一転機迫る ただし今一段高あれば》

六月二十二日記の今回は「五月十九日のダウ二三六五ポイントの突っ込みが、小さいながらも一本底となったが、これは五月十八日の変化日がものをいったわけで、ウリ込みの激しかったことを物語っており、いかなるウリ方もフメなかつたであろう。その後新高値をつけながら、米国のプライム・レート引き上げ、ニューヨークの急落を入れながら、ほ

とんど動揺していない。これは驚くべきことだが、もしこの調子で買い進まれば、やはり二十六日が問題となる。この場合ダウ二六一三以上を実現すれば、一層問題であるが、しかしこれを先端波動と見ることには疑問が残る。大発会以来、これほど奔騰した相場にして、予告なくして、しかも実証もなくして、大天井を打つはずはないから、それが実現するまでの悪目はなお安心して買えるわけである。六月二十六日以後にもし波乱がなければ、おそらく七月六日以後に波乱を入れて、天井時期と値ごろを予告することになるであろう」むねを書いた。

その後二十六日も無事に過ぎ、七月一日には二六五一ポイントの新高値へ。七月六日に二五七一と急落したものが翌七日にはたちまち急反発して、これまた決定反動に終わった。五月十九日の決定反動とともに、これで二つ目であるから、先端波動としての条件は漸次整いつつあるが、それはともかくとして、七月二十三日から八月二日～四日の変化日は問題であって、もしその前にNSB平均（旧ダウ）二七三一ポイント以上を実現すれば、その後の波乱は一だんと激化すると見ねばならぬ。

計算値はなおいろいろとあるが一目均衡表の読者には良くわかっているはずの二七三一ポイントは二つの計算値が一致したものであって、かなり重大である。ただしこれをもって天井打ち、と決定するにはまだじゅうぶんでない。

前回にも書いたように、もし七月二十三日から八月二日の間に天井を打つものとするには、七月六日前後の波乱が簡単に過ぎていくし、決定反動二つ出現だけでは、まだ確定的なことをいうわけにはゆかない。

むろん決定反動後の上進力がじゅうぶんでなければ、それだけでも一応は警戒せねばならぬから、NSB平均（旧ダウ）二七三一を実現しうる以上、もしそこで警戒する必要がないならば、NSB平均はさらに大きく上進しなければならぬ。そうでなく、かろうじて三〇台に乗せた程度では決して面白くない。いずれにしても来週末から八月二～四日の間は波乱が大きくなる、と考えて一応警戒するにしくはない。

週替わりの十九日から高いというのが一般の一致した人気であるが、その裏目が出て、今週一杯低調を続けるようであれば、それは必ずしも恐ろしくないはずであって、こんどは八月初めを重視すれば良いことになる。はたしてどうなるか。あらゆる点を総点検してみても、まだ決定的なことのいえる時ではないが、一ということ逆説すれば、現在のところ、まだ大きな反動を考える必要はなく、目先の悪目は買って良いということになる。

もちろん、著しいハ行相場であるから、買えるものと買えないものとの区別をハッキリ弁別する必要はあるが、当面の問題は二十三日の変化日を機として、規制が出るかいなか、さらにはこれまで売られた株と買われた株とに変化が起きてくるかどうか、低位株に人氣が循環するかどうか、ということであろう。

時あたかも二十三日は米国市場でソニーの無償権利落ちだという。これが直ちに日本市場のソニーを動かすかどうかは、まだハッキリしないが、日本市場では権利落ち前が高値となっているだけに、もしソニーに買い気があるものなれば、米国市場の権利落ちは一つ

のキッカケとなって良いはずである。それがまた、今まで売られてきた電機株にも波及するかいなか。ソニーとともに松下の向背を注目すべきであるが、当面の柱はやはり石油と損保と財投であろう。

なかならず海上と奥村、東洋建設をとくに注目したいと思っているが、米国の対中態度を見れば、ベトナム問題にもやがて大きな転機を考えて良いだろう。はたしてどうなるか。

なにもかも仮定的な書き方をして申し訳ないが、当面の変化日がもし転換日となれば、その後の反動をゆっくり見定めることにより、もっと確定的なことが書けると思う。たのしみなことである。＝七月二十日記＝

昭和 46 年 7 月 22 日 日本証券新聞掲載

2012/02/19 第 295 号

均衡表の急所(38) 一目山人

《ヤリ気配でろうばい 今はハラをきめて落着け》

七月二十日記の今回は「今一段高あれば、重大な一転機迫る」と題して「七月六日にNSB平均(旧ダウ)二五七一と急落したものが翌七日にはたちまち急反発してこれまた決定反動。五月十九日のそれとこれで二つ目であるから、先端波動としての条件は漸次整いつつあるが、八月二日～四日の変化日まえに、もし二七三ーポイント以上を実現すれば、その後の波乱は一だんと激化する。むろん決定反動後の上進力がじゅうぶんでなければ、それだけでも一応は警戒せねばならぬから、二七三ーを実現しうる以上、もしそこで警戒する必要がないならば、NSB平均はさらに大きく上進しなければならぬ。そうでなく、かろうじて三〇台に乗せた程度では、決して面白くない。いずれにしても来週末から八月二日～四日の間は波乱が大きくなると考えて警戒するにしくはない」旨を書いた。

その後七月二十九日に二六八三と上昇、八月四日に二六三〇と急落したが、そこで日証新聞の風林火山に「七月十九日の二六九二を頭として、四日まで下げているが、二七三ー以上の計算値を実現していないので、まだここでの反動安はおそろしいくはない。ただ材料としては、米国の諸問題、とくにドル防衛策のいかんが大変な問題であるが、それさえ出なければ、近くひと戻りするはずである」旨を書いた。

その後五日から反騰に転じ、変化日の効力を発揮、遅行スパンも理想的に実線に添って上昇。十一日まではなかなか二七〇〇台に乗れなかったが、十二日から急伸、十四日には二七四〇と、ついに二七三ー以上の重大な計算値を実現した。

由来相場が天井を打つまでは、悪材料は出ないものである。かりに出ても、致命的なものではないが、さすがに待ちに待った重大計算値であり、それが八月四日の二六三〇による第三の決定反動。やや不十分ながら先端波動、それに三尊天井の可能性も出たわけであ

るが、八月十六日には、私が最もおそれていたドル防衛策が打ち出された。

ドルは円以前の問題だ、と私は考えていたが、単純な円引き上げよりもはるかに厄介な経過となり株価は十八日までの三日間で実に四一三の大暴落となった。これは上げ幅に対してすでに五割三分の下げである。

この急落、ことに今日の下げはいかにもすごい、第一の計算値二四〇〇を割ってきた以上、この四一三安は第二の計算値ではある。しかし何分にもドル防衛策の景況は大きい。しかも、一気に第二計算値を取った以上、これで下げ止まるとは、ちょっと考えられなかった（十九日はさらに一三八ポイント安）。

これほどの悪材料が出ないでも、昨年大納会からほとんど一本調子に上げた相場であるから下げもまた一本調子となりやすいのは当然であるが、これからドルと円をめぐってイヤな情報ばかり連続するであろう。これ以下にさらに叩かれるとすれば、二一八〇～三五どころよりちょっと手がかりはないが、材料はどうあれ、これほど一気に下げた相場だから、少し人氣が落ち着けば最小限一二〇ポイント以上の戻りは良いはずである。

いずれにしても、戻りを入れてみなければ、何も考えることはできないわけであるが、しかし材料的にみれば悪い面ばかりではない。

ドル防衛策による影響が大きければ大きいほど、景気浮揚策は一だんと積極的とならざるを得ないし、低金利の徹底とともに、金融筋や機関投資家は株を買うよりほかに手はない。昨年四月の大暴落は外人の大量ウリを動機としたが今度は外人ウリの懸念はあまりないばかりでなく、ここまで相場が下げてくれば、むしろ外人カイを期待しても良いはずである。

余りにショックが大きいので、カイモノのないところを投げ出すので、ヤリ気配が多く、一層ろうばいを深めて、さらにウリあせりとなっているが、それだけにカイモノさえはいれば、自然に人氣も落ちつく。どうだろう、投資家も一つハラをきめて、静かに人氣の落ちつくのを待つことにしては。

また、大証券や機関投資家が手をそろえて強引に買って出れば、この相場なれば人氣はたちまち落ちつくだろう。ドル防衛策の影響はいかに大きくても、少し永い目で見れば、しょせん一時的なもので、これほどの措置を取らねば米国は本当に立ち直れないのだから、私は来年以降における米国景気の立ち直りに注目して、来年度大相場のキッカケをつかみたいと思っている。

なお、この稿は「一目均衡表完結編」一五五ページ参照のこと。

＝八月十八日記＝

昭和 46 年 8 月 21 日 日本証券新聞掲載

《当面の経過を重視 大局観を決定のために》

八月十八日記の前は「八月十四日にはNSB平均（旧ダウ）二七四〇と、ついに二七三一以上の重大な計算値を実現した。由来相場が天井を打つまでは、悪材料は出ないものであるが、さすがに待ちに待った計算値を出現。しかも、第三の決定反動、尖端波動を実現したものであって、そこで私がもっともおそれていたドル防衛策が打ち出されたわけであって、株価は三日間で実に四一三ポイントの大暴落となったが、このすごい下げで、第一の計算値二四〇〇を割ってきた以上は、この四一三安は第二の計算値ではある。しかし、なにぶんにもドル防衛策の影響は大きく、しかも一気に第二計算値を取った以上、これで下げ止まるとは、ちょっと考えられない。これ以上にさらにたたかれるとすれば、二一八〇～三五どころより、ちょっと手がかりはないが、材料はどうあれ、これほど一本に下げた相場だから、少し人气が落ち着けば、最小限一二〇ポイント以上の戻りを入れて良いはずであって、材料的に見れば悪い面ばかりではない」とした。

さらに「余りにショックが大きいのでカイモノのないところを投げ出すヤリ気配が多く、一層ろうばいを深め、さらにウリあせりとなっているが、それだけにカイモノさえはいれば、自然に人气も落ちつく。どうだろう、投資家も一つハラをきめて、静かに人气が落ちつくのを待つことにしては。また大証券や機関投資家が手をそれえて買って出れば、この相場なれば人气はたちまち落ちつく。ドル防衛策の影響はいかに大きくとも少し長い目で見れば、しょせん一時的なもので、私は来年度大相場のキッカケをつかみたい」と思っている点を書いた。

その後、八月二十四日二一六二の安値までみせた。ザラバでは二一三三までであったが、この日は高値からのXに相当するので、たちまち反発。そこで私はどう考えたかといえば、九日の下げが、いかに絶好とはいえ、これをもって大底入れ…と考えることは、むろん容易ではないが、しかしすでに計算値一ぱいを一気に実現した以上、相当時間をかけての戻りにはいることは間違いない。

その場合、最も問題となるのは（一）四割戻しであるが、さらに問題なのは（二）四割戻し以上にどれほど、いつまでに戻せるか、ということであった。私においては（二）のあり方いかんによって早くも大勢観が決定される…と考えているからであるが、その後、ウリ玉の増加と低金利の一般化とともに、戻りも強く、九月六日には二三六五まで戻して来た。これは三分の一戻しをやや越えたところであるが、ここは一目均衡表上きわめて重大なS点に相当するので、この時点では、まだ四割以上の戻しは決定的ではない。

しかし、その後、しきりに伝えられる外電の悪材料、国内の業績不振にも、相場はほとんどたたけなくなってきた。わが均衡表も、NSB平均が九月十六日に東西とも好転。同時に基準値も切り上がってきた。かくて九月二十日には、二三七七とS点を上回ってきた

が、これはきわめて重大な点である。

というのは、九月二十二～三日の変化日を控え、ことに飛び休明け九月二十七日の配当落ち権利落ちを目の前にして、四割以上の戻しを決定したものであるからであるが、かくて配当落ちから様変わりとなり、今日の前場引けは二四一一となってきた。これでいよいよ大勢観決定について、きわめて有望な経過となってきたが、それはいよいよ決定してから述べることにして、ここでは静かに、これからの経過を見定めたいと思う。

ここで問題なのは、ここで余りに調子づいて、一気にカイ進まれるようだと、その値段はともかく十月四～五日の変化日がちょっと気がかりとなるが、しかし九月二十二～三日は加速度されたのだから、今度も延長されるとすれば、まず十月十三日の変化日が問題となる。

それまでに二四三八ポイント以上なればいくら高くても良いが、それを実現することになれば、実に申し分がないわけであるが、現在の相場においては、小勢というか中勢というか、当面のウリ場と大局観におけるカイ場を見出すことであるが、したがって深刻な悲観人気のなかにあって、大局観を確定することが最も大事である。

私は一般論に組みたくはないと思っているが、十月十六日に証券会館において、一目均衡表完結編の読者大会を開催、読者の質問を受けるが、その時は、大局観が確定してもしなくても、それについて述べるつもりである。

＝九月二十九日記＝

昭和 46 年 10 月 2 日 日本証券新聞掲載

2012/03/11 第 298 号

均衡表の急所(40) 一目山人

《戻し後突っ込み待ち 一大転機徐々に迫る》

九月二十九日記の今回は「大局観を決定のために当面の経過を重視する、という立場において、九日間の下げがいかにか絶好とは、これをもって大底入れ…と考えることは、むろん容易ではないが、しかしすでに計算値一ぱいを一気に実現した以上、相当時間をかけての戻りにはいることは間違いない。その場合、最も問題となるのは、①四割戻しであるが、さらに問題なのは②四割以上にどれだけ、いつまでに戻せるか。②のあり方いかんによって、早くも大勢観が決定される、と考えているからであるが、その後、九月六日に二三五五まで戻した。これはS点に相当するので、まだ四割以上の戻しは決定的ではないが、九月二十日にS点を上回って二三七七となり、四割戻しを決定的にした。ここで一気に買い進まれるようだと、十月四～五日の変化日が気がかりとなるが、それまでに二四三八以上なれば、アトはいくら高くても良い」旨を書いた。

この時点では、四割戻し以上では、一応二四七、すなわち二四〇九を期待したのである。問題はそれ以上、どのくらい戻せるか。もし二四三八以上が実現できるならば、いよいよ大勢樂觀が決定されるわけであるが、私の最もおそれたのは、二四三八が実現せずして終わることであった。

ここでの計算値は、九月十日の二三二一に対し九月二十日の二三七七をE点とした二四三二・三一であったが、これを十月二日に実現しながら、ついに二四三八を取り得なかった。十月二日は〇の中に×の当日であり、しかもこの戻り新値の当日、五十円当たり時価総額の均衡表が逆転してしまったのである。

その後、私が兜町の証券会館において、一目均衡表完結編の読者大会、並びに同人会総会を開いた十月十六日には、二二四六まで連続安を続けたのである。当日は遠隔の地からも出席され、ふかく感銘したのであるが、質問を受けるには完結編公表後いくばくもないので、無理だということは承知のうえ。しかも総会を急いだのは、相場の大底入れ前に、同人会を発足せしめ、同人会の会員を確定して、底入れ後のカイに大きく役立たせたい…ということを重視したからである。

同人会の幹事は、皆すぐれた証券マンであり、幹事の意見を聞くだけでも、大いにもうけるチャンスがある。そういうすばらしい同人会であるように、私も大いに努力したい。株をやるほどの人に皆もうけてもらいたい。損をしない方法として、一目均衡表二冊を公表したわけであるが、それだけではなお十分でない。若くしてお客の利益確保に情熱をもっている証券マンに、深く研究してもらって、その成果を読者に提供してもらおう。それが一番良く、かつそれを永久に求める方策は、同人会を大きく盛り上げるほかない、と考えたからであるが、この同人会は読者諸賢の要求に適応したものと見え、いまだ旬日ならずして、なかなかの盛会であって、今日の週末研究分会でも、意外に多くの人が集まられた。次回の十月三十日には、私も各分会を一巡するつもりであるが、同人会の会員になれば、私の相場観は、いつでも幹事に聞けば、明確にわかる仕組みになっている。銘柄についても、それぞれの大家がいるが、相場が変化し、たしかな銘柄が決定すれば通知をすることにもなっている。

この同人会はやがて今後大いに利用してもらいたいと思うが、十六日の総会当日には「まだ大勢観は決まっていない。またこれからコワレるときも決まっていないが、当面の計算値はまず二二一〇。二一六二を下抜いた場合は二一二四がとくに大事。そのつぎは一九三〇。一八九二、一八九〇（一八八二はあやまり）一八五四であって、どんなに悪くても一八〇〇台は大底ということになるが、変化日は小さいのは十一月一日、十日。もっと大事なのは十一月二十日である。来週は一応戻りを入れるが、もし十一月二十日が安値となり、しかも二一六二以上であるならば、なお三七五の戻りを期待し得る可能性をもっている。今日決まっていないのでわからないがわかるのもそう遠くはないと思う。今から完結編を勉強してもらえば、今しばらくヒマがあるだけでもっとも理想的なカイ出動ができることになるであろう。なお円切り上げは、一時的ショックを除けば、決して悲観材料ではなく、

第二の繁栄にいたる大なる樂觀材料とはである」旨を述べた。

その後、十月二十日にいたり、ザラバで二二〇〇飛び台をみせ、二十二日二二五九まで戻したが、この戻りは一応来週も続くとみて良いであろう。

当面のところ十月二十九日から十一月一、四日まで戻せば上々であるが、値幅は多くを期待出来ない。三分の一なればそれで良しとしなければならぬだけに、半値戻しを期待するのはちょっと無理であろう。

しかし万の一つ、ここで半値戻しをやれば、その後の反動安はいかようにもあれ、相場の大勢観は決定する。イヤそうでなくても、大勢観の決定は、そう遠くはない。それがキマれば本紙に書く。本紙から目をはなさないでほしい。一大転機は迫る。しばらく無心にして、来るべき好機に乗ずるべきであろう。

=十月二十三日記=

昭和 46 年 10 月 26 日 日本証券新聞掲載

2012/03/18 第 299 号

均衡表の急所(41) 一目山人

《なお中間反騰の領域 やがて大勢樂觀に》

十月二十三日記の今回は「戻し後突っ込み待ち＝一大転機徐々に迫る」と題して「当面の変化日は小さいのは十一月一日、十日、もっと大事なのは十一月二十日である。もし十一月二十日が安値となり、しかも二一六二以上であるならば、なお三七五の戻りを期待し得る可能性をもっている。十月二十日にいたり、ザラバで二二〇〇飛び台をみせ、二十二日二二五九まで戻したが、この戻りは一応来週も続くとみて良い。当面のところ十月二十九日から十一月一～四日まで戻せば上々であるが、値幅は多くを期待できない。三分の一なればそれで良しとしなければならぬが、万の一つ半値戻しをやれば、その後の反動安はいかようにもあれ、相場の大勢観は決定する。イヤそうでなくても、大勢観の決定は、そう遠くはない。一大転機は迫る。しばらく無心にして、来るべき好機に乗ずるべきである」旨を書いた。

その後、十月二十九日二二七八ポイントまで戻した。これは三分の一強の戻しであったが、それから反落に転じ、十一月六日には二二二四と、引け値では十月二十日を下回ったのである。これで二十日まで下げれば、大勢観上まことに申し分ないのであったが、翌八日には、大証ダウの均衡表が好転。東証も追随して、六日を安値に十一月二十日まで奔騰の一途をたどり、飛び休に挟まれた昨二十二日も一段高で、ついに二四〇八の高値引けとなった。

この戻りはすでに九割に達しているが、しかし、これまでの経過に関する限り、中間反

騰というほかはない。私が前から考えていたことは、十一月二十日が新安値になれば、それこそ昨年の大納会同様、大相場時代にはいる、いかなる悪材料が出現してもNSB平均（旧ダウ）三二〇〇～三〇〇ポイントを強調するつもりであったが、いかに大阪高に引っぱられたとはいえ、今日までの戻りはなお中間反騰と見ねばならない。大勢観がなお決定しないからであって一目均衡表としては、これが決定するまでは大勢観は書けないが、しかし、NSB平均では未決定であっても、各銘柄を見れば、すでに早くより大きな二番底を入れて好転しているものは決して少なくない。

このことは十月十六日の完結編読者大会でも発表したほどであって、NSBの運行スパンは十一月十三日の二三三五ポイントで好転したに過ぎないが、銘柄の運行スパンでは十月初めに好転したのも相当ある。なお完結編の第二付録による「週間引によるカイ、ウリの急所」から見たカイ目は、平和不動産を先駆として、意外に多くの銘柄に及んでいる。

いつだったか、同人研究会に出席した時「最近の小商いで、とくに出来高が目目の焦点となっているが、相場の弱い時に出来高が多いのは良くない。そんな時は少ないほど良いが、高い時に出来高の多いのは結構である。しかし出来高もさることながら、それが融資残につながるか否かが大事である。ウリ残の増加は、カイ方にとっては一応結構であるが、とはいえ、融資残の減少時代は効果的ではない。相場が底値から出発する時に、最も大事なものは融資残が一致して増加時代にはいることである」旨述べたが、今度の反発においても十一月八日から増加に転じ、すでに百五十億増となっている。

かくて市場の内部要因もきわめて順調であるから、今のところ、中間反騰といっても、必ずしも一時的であり、しかし強いものではない、というわけには行かない。銘柄の各均衡表に照応して見ても、この中間反騰もまた、遠からずして、大勢観好転につながり得るものと、今の私は期待している。ごく目先のことをいえば二十四日の変化日が、二四三二を上抜かないでも、ちょっとした問題である。

二十五日から素直に押しを入れれば、その後のヨミはきわめて楽になるが、その押しは、願わくば深いほど良いわけである。しかし前述のような点から、ここでの押しでは深いとはちょっと考えにくい、もし十二月七日まで高いとすれば、その後の反動にちょっと厄介となる。

いずれにしても、いつ、いかなる経過において、二四三二を上抜くか。それが大勢観を決定する上の、きわめて大事な点である。今のところでは、中間反騰の計算値は二四九四、二五三七であるが、それは二四三二を上抜いてからの問題である。いずれにしても、まず、しばらくは銘柄別であって、読者は同人会を利用されれば、いつでも私の意見はわかるようになっている。しかし、今のところ、私がつもつと静寂をよろこんでいる「決定的な相場のわからぬ時」である。ということは、やがて大いに乗ずる機会を与えられるはずである。

なお、この機会に私事を一つお許し願えば、完結編の第二付録は、予定を切り上げて、すでに発送済みであります。もし不着の方はご一報下さい。

=十一月二十三日記=

昭和46年11月27日 日本証券新聞掲載

編註：「完結編の第二付録」は原著週間編に収録されています。

2012/04/01 第301号

均衡表の急所(42) 一目山人

《当面の転換は迫る しかし大勢はなお大相場》

今回は十一月二十三日記であったが「なお中間反騰の領域、やがて大勢楽観」と題して、とくに十二月七日を問題にしたのである。しかし、それから大きく相場は変わっているし、十二月はついに書かなかった（新年号を十二月半ばに書いたが）。今さら十一月二十三日記にさかのぼって、せんさくする必要はない、と思うが、ただ一つ、ここでぜひ一言して置きたいことがある。

それは十二月二日以来八日までの波乱は予想通りのそれとして、別に問題はなかったのであるが、十二月十三日のNSB二四九六ポイントという第一次の計算値を実現して以来の数日、私は相場の見方を間違えていた、ということである。間違えていた、ということとは数人の電話連絡者より知らないことであるが、一番良く知っているのは私自身であって、この二十数年來の成績に照応して見て、はなはだ残念に思っている。

むろん一目均衡表としては、大証ダウは十一月八日に、東証ダウは十一月十三日に好転して以来、今日まで順調な好転の一途を続けている。均衡表に関するかぎり、今日まで一度も疑問をはさむ余地はなく、十二月十三日以後の数日といえども、決して警戒すべき何もなかったのである。そればかりではなく、スパン第三の一期はもちろんのこと、二節のスパン第三が最も適切であって、円切り上げの十二月二十日大引け二四八七ポイントも、いよいよ奔騰直前であることを明確にしている。

にもかかわらず、私がなぜ、十二月十三日からの一週間を間違えたか、といえば、要するに材料観にとられ過ぎたからである。私は非常に確実視される情報によって、円切り上げは二〇%以上ということを目にした。世紀の大材料、ということで愚かにも材料観を偏重したところに、間違いの因があったわけであるが、むろんそれが一七%弱と決定、十二月二十日について、二十一日の相場となつては、だれしも何も考える必要はないわけで、すくなくとも今日まではカイの一点であった。

十二月二十日以後の変化日は、まず一月二十一日、つぎは二十四日、五日、六日とつづくが、二十八日はちょっと大事である。しかし二十一日はザラバで二八六〇台を見せて二二ポイント引けである。かなり上げた後のハラミ線であるから、一般的に警戒嚴重となるのは当然であり、依然としてフミ惜しみとなるのもうなずける。いうまでもなく、いろいろ

ろと変化日が迫ってくるからであるが、しかし本格的な計算値を実現していないだけ、いまのところ、一部に伝えられているような、急激な反動はあり得ない。

現に一月十七日、二十四日ともに決定反動に終わっている。前述のように、二十八日の翌日は、はたしてどうか、ちょっと注目に値するが、しかし、もっと大事な変化日は二月十日である。まず、それまでは、この相場は上昇するのではないか、と今のところ思っている。相場の大事な頂点においては、何よりも変化日と計算値との照合であるが、これまでのように一本調子に上げてきた相場としては計算値よりも変化日が大事である。

それはともかくとして、当面の計算値は、Nの二八五四ポイント。つぎはN二九八三ポイント。その上は二九七三ポイントであるが、当面のところ、それ以上を書く必要はあるまい。それどころか、ここで二九三九が出現するか否かが、当面の重大な関心事である。

すべては半月に迫っているので、ここであえて決定的なことを書くよりも、相場の自然の成り行きを見定めつつ、相場をやる人としては、それに随順してゆくことが大切だと思うが、ここで大事なことは、計算値と変化日がどういうかたちで実現するか。それによって次の動、反動が決定されるわけであるが、二月からの反動は、一応常識化されたよりも深い…と考えるべきであろう。

しかし、それはアトでまた書くとしても、二月からの反動を、一応深い、と考えるとしても、容易なことでは、カラウリは控える、という気持ちが必要であろう。なぜならば、新年号にも書いたように、今年の高値は、おそらく前述の計算値以上であり、来年の大天井はさらに大きい、と考えられるからである。

本当の大天井は、近く決定されることになるが、今日までの計算によれば、完結編のグラフに書いてある昭和四十一年四月の三二九二ポイント。最近では三二四二。その他いろいろあるが、とりあえず、この計算値は必ず出現するはずであるから、それまでに小勢をウルとしても、ごく目先観による必要があると思う。

なお、これは今からいう必要はないが、来年の大天井はおそらく向こう七、八年の大天井となるものであろう。とすれば、今、来年の相場をマスターすることが、ある生涯の一大事となるわけである。

この記事をご覧の方は、今一度十一月二十三日記をご覧願いたい。そしてこれからは、とくに第三スパンを注目してほしい。

＝一月二十六日記＝

昭和 47 年 1 月 28 日 日本証券新聞掲載

2012/04/08 第 302 号

均衡表の急所(43) 一目山人

《いよいよ波乱圏内 一反動を見定めること》

前回は一月二十六日記で、二月はついに書かずじまいに終わった。新聞社の都合で申し付けがなかったためではあるが、私自身、いささか健康を害していて、積極的に意思表示をしなかったことにもよるであろう。したがってここで一月記を反芻する必要はないと思うが、ごく重点的なものだけを取り上げてみれば「もっと大事な変化日は二月十日であって、それまではこの相場は上昇するのではないか。当面の計算値は二八五四、二九三九、二九七三ポイントであるが、二月からの反動がかりに深いとしても、カラ売りは控える、という気持ちが必要である。今年の高値は前述の計算値以上であり、来年の大天井はさらに大きいと考えられるからである」旨であるが、二月にはいっては二八〇〇の大台において、NSB平均（旧ダウ）値幅はわずかでも、とかく波乱含みであった。

二月十七日から二九〇〇大台に乗せて、今日の三〇四〇ポイントとなったわけであるが、これまでの変化日はつねに規制を受けただけで、相場は若干の波乱を見せたのみで、だいたい一本調子の上げを続けてきた。

もっとも二月十日以後は極端なハ行相場を繰り返しているのも、銘柄別に見れば、変化日ごとに頭打ちとなっているものは決してすくなくない。近くは二月二十八、九日。三月二日の変化日にも、大証ダウの頭打ちをはじめ、銘柄にも大きな変化があった。

九日は朝寄りから約五〇ポイントの急落を入れたが、引けは例によって引き締まったものの、一月記に書いた計算値の上は、三〇三五ポイントであって、これ実現した以上、一段と波乱が大きくなるのは当然であって、今後も時日の経過とともに、波乱は加わるばかりである。

今日までの大相場は、隔世的な低金利下において、金融会社、機関投資家はもちろん、事業会社までが株式買いに奔走、そのうえ株主の安定工作や、株式の持ち合い、増加など、さらにはニューヨーク高の刺激まで入れている半面、安値売り込みの期日は順次到来しているにもかかわらず、波乱ふくみでフミ切れず、警戒嚴重でとかく売り込みやすく、連日株不足二十数銘柄に及ぶという極端な需給不均衡相場となっている。信用取引の規制が相次いでも、その影響はその日限り、はなはだしいハ行相場であるだけ過熱感がないのも当然であるが、しかしこのようにして相場はいつでも限界に達する。

もっともいつその限界がくるか。これだけ一本調子に上げているので、そのための警戒心であるが、相場そのものとしてはまだ若い。すくなくとも時間的には上げ相場の三分の二に近づいたに過ぎないから、当面の相場は、相場それ自身が答えてくれるのを待つほかないが、それを待つ、という以上、一般的には、大いに警戒を要する時点にきているわけである。

しかし、細かいことは四月にゆずるとして、新年号に書いた大勢観を主軸として、今一度書いてみよう。これ以上の計算値は一月記にも書いたように、昭和四十一年四月による三二九二ポイント、昨年十月による三二四二ポイントが年内の問題であるが、このままそれに直結するとは実証的には今のところ思いようがない。時間的には、まだ実証的ではな

いが、おそらく今年の天井は六月から七月の間ではあるまいか。八月、九月の可能性もなくはないが、それは今後の証明に待つほかないとして、今年の天井打ちが三二四二ポイントを最小限としても、すくなくともそこでは、一目均衡表完結編にいうところの、先端波動を出現しなければならないはずである。

もし今年の天井打ちにおいて、先端波動なくして終わるとすれば、来年の最終的大天井はそれだけ低度になる、ということになるが、来年度の大天井は、これも実証的ではないものの、三六七六ポイント、時間的には八月から十月、と今のところいうほかないわけである。

その場合、問題なのは円の再切り上げとデノミのいずれが先行するか。私はデノミには前にも書いたように反対であるが、円の再切り上げにデノミが先行できれば無意味ではない。しかし円の再切り上げにデノミが先行できるとは、今のところ考えにくい。先行できなければ、デノミはやれなくなる。やる必要はどこにも見出せないわけである。

昨年十一月六日の二二二四ポイント以来、中間波動なくして、今日に及んでおり、変化日も延長に延長を続けてきているが、規制の影響はずでに出来高、融資残にも現れつつある。そこで当面の変化日は三月十三日、二十三日が問題であるが、いずれにしても、ぼつぼつNSB平均二〇八ポイントの反動を考えた方が良くと思う。ことに今後とはげしく銘柄はかわる。値がさ株高が一巡すれば、規制の影響もあって、買い気が強ければ当然中低位に人気は回るであろう。

私はこの欄で銘柄は控えているがあまりに電話が多いので、波乱のないものとして、リッカー、油脂をあげておこう。リッカーはもし一四〇円どころへ一気に行けば二〇〇円近いものが期待できる。油脂も当面一五〇円近いものであろう。そのほかには東洋紡を注目したい、と思っている。

=三月九日記=

昭和 47 年 3 月 11 日 日本証券新聞掲載

2012/04/15 第 303 号

均衡表の急所(44) 一目山人

《天井前後の波乱圏 この上は一般の逃げ場》

前回の三月九日記では「安値売り込み玉の期日は順次到来しているにもかかわらず、波乱ふくみで踏み切れず、警戒嚴重で、とかく売り込みやすく、連日株不足二十数銘柄に及ぶという極端な需給不均衡相場で、信用取引の規制が相次いでも、その影響はその日限り。はなはだしい行相場であるだけ、過熱感がないのも当然であるが、しかしこのようにして相場はいつでも限界に達する。もっともいつその限界がくるか、一本調子に上げている

ので、そのための警戒心であるが、相場そのものとしてはまだ若い。すくなくとも上げ相場の三分の二に近づいたにすぎないから、当面の相場は、相場それ自身が答えてくれるのを待つほかないが、現在以上の計算値は、NSB平均三二九二ポイント、三二四二ポイントが年内の問題である。時間的には、まだ実証的ではないが、おそらく今年の天井は六月から七月の間ではあるまいか。当面の変化日は三月十三日、二十三日が問題であるが、いずれにしてもぼつぼつNSB平均二〇八ポイントの反動を考えた方がよいと思う」旨を書いたが、十三日に二九七六ポイントに急落したものの、翌十四日には朝寄り四ポイント安を安値として早くも回復に向かっている。

この突っ込みは八〇ポイントに過ぎなかったが、その週末十八日には三〇三八ポイントで引けている。この週間引けは週間足による均衡表上、まれに見る暴騰記号の出現であって、そのことは十八日の同人会には発表したわけであるが、以来急騰して、四月三日にはザラ場で三二〇〇ポイントまでであった。

むろん八行相場は一だんとはなはだしくなり、この高値にきて借り株残の増加が目立ってきたが、八行相場の激化は一般者がじゅうぶん好成績をあげていない証拠であろう。借り株残の増加は、名義書き換えのためのツナギと見れば必ずしも楽観材料ではなく、むしろ融資残の減少を警戒しつつ、今後の経過を注目すべきであろうが株不足銘柄は増加の一途をたどっている。

これはまことに驚くべきことであって、この限り銘柄によっては時に大きく踏み上げることなしとしないが、前回にも書いたように今年の天井打ち三二四二ポイントを最小限とするものであっても、すでに三二〇〇台を指呼のうちにして、これからの八行と波乱を軽視するわけにはゆかない。

これまで書いてきた計算値以上は、四十六年八月のV三三一八、E三五一七、三五五一ポイントであるが、それは当面の三二四二ポイントを実現してからのことであって、当面の変化日は、四月十日、十二日、十四日である。今のところ、それ以後の変化日は書かない方がよいと思う。

変化日の先回りをする向きがある由だからだが、当面の変化日まで、相場が順調に伸びれば、伸び方にもよることではあるが、そこでは、これまでのように、延長を期待することはちょっとむずかしい。ただし、相場の天井打ちがハッキリ証明されるまでは、変化日に先回りをするのは厳につしむべきであってもしカラを売るとすれば、変化日にやや大きく変化したのちにおいて、第二付録による週間足の売り目の出たものの中から選ぶべきである。しかし本格的な売りは、天井打ちの正確な時間が証明されてからである。

今日のところ、決定的なことが書けない。まだ天井打ちが確定していないからである。しかし、とにかくこれからは、すくなくとも天井前後の波乱圏内である。これ以上の高値では、まず持株処理を考えてよいころあいである。

新規に買いつくには、まず低・中位。それもよほど新しいものを選ぶべきであろう。したがって、銘柄は一層書くべきでないが、ただ前回に書いたリッカー、日本油脂は意外に

好評であって、これからが仕上げ期にはいる。

その筋書き添えた東洋紡も減配がハッキリしたので、いよいよ佳境にはいる時期に直面したようである。計算値はまず一〇〇円。ついで一二〇円であるが、まだ低位であり、商いはいくらでもできるし、含み資産の大きさ、繊維一本からの脱出などにより、案外おもしろい取り残された銘柄だと思う。

追記＝この際、私事を書かせていただければ、三月末をもって、これまでの霞町を引き上げ、東村山市久米川町一ノ七八九に移りました。霞町がだんだん静かさをうしなったが、ここ久米川は静かであり、ここで健康が許せば、第三付録に打ち込みたいと思う。均衡表完結編を三月二十日で締め切ったのも、この引っ越しのためでした。

＝四月四日記＝

昭和 47 年 4 月 6 日 日本証券新聞掲載

2012/04/22 第 304 号

均衡表の急所(45) 一目山人

《重大な天井前波 当面一節の経過に注目》

前回の四月四日記では「天井前後の波乱圏内」と題して「十三日の突っ込みは八〇ポイントに過ぎなかったが、その週末十八日には三〇三八ポイントに引けた。この週間引けは、週間足による均衡表上、まれにのみ暴騰記号の出現であって、いらい急騰…むろんハ行現象は一だんとはなはだしくなり高値にきて借り株残の増加が目立ってきた。これはツナギとみれば必ずしも樂觀材料ではなく、むしろ融資残の減少を警戒しつつ、今後の経過を注目すべきであろう。これまで書いてきた計算値以上は、V三三一八、E三五一七、三五五一ポイントであるが、これは当面の三二四二ポイントを実現してからのことであって、当面の変化日は四月十日、十二日、十四日である。当面の変化日まで相場が順調に伸びれば、そこでは、これまでのように、延長を期待することは、ちょっとむずかしい」旨を書いた。

その後、名義書き換え株の還流にも売り玉は意外にへらない。私は月末の引っ越しで、どこに何を入れたか整理がつかず、健康上、グラフを全然見ていないので、ここでもまたハッキリしたことは差し控えたいが、しかし、だいたいにおいて、十四日の最も大事な変化日はものをいった。これは完結編に示すところの基本数値記号の八番目一二重四角に相当する時間関係であるが、その後十七日までに一〇四ポイントの急落を入れた。しかもNSB平均(旧ダウ)は三三二二ポイントと、三三一八を実現したアトであるから、これはこれまでのように、ただたんに低金利、法人買い、ニューヨーク市場高などだけでは片づけられない。

もっとも、十七日の下げは、大証券の希望的変動によるところも大きかったようであり、

そのための十八日の急反発ではあろうが、突っ込みに対する反発は、まことに当然の経過である。いささか強過ぎたので、一般的には、おそらくこれで底入れと考えるだろう。

今の私は、それを否定する根拠を見出してはいないが、しかし、もしそうなれば、十七日の三二一八ポイントを底として、ここで決定反動とならなければならない。今のように重大拠点において、わずかな動きで結論を急ぎ、ウリとかカイとかいうことは、はなはだ不謹慎である。ここまできたら、相場がハッキリ決まってからでじゅうぶん間に合う。

私としては、高値から一節、九日間の経過を見なければ、ハッキリしたことは言わないことにしているが、それまでに決定反動とならなければ、時間的にはまず一期の反動、値幅は二〇八ポイントが一つの要請となる。

ただし、その場合でも、この波乱が先端波動となるか否かは、その時でなければ、きまるかきまらないかもわからない。今までのところ、全くきまっていない。

ただ、三三五一ポイントの実現が今年の大天井であるということになれば…すなわち、それが大天井であるという確定点があられたならば、それはおそらく先端波動を実証するであろうが、それはこれからの波動を見ながら、ゆっくり研究しつつ、相場自身の声を聞けばよい。

まだどうも、ハッキリしたことの書けないのは、三三二二ポイントが、今年の大天井とキまっていないからであるが、かりに、この相場が数日中に決定反動となっても、それだけで直ちに大相場を展開するわけにはゆかない。もし展開すれば非常に悪質な、タチの悪い相場となるわけであるから、かりに、ここで決定反動となっても、今一、二度の急落場面があり得る。

真に本格的な相場となるのは、そうした決定反動が、その決定反動そのものの底値を切り上げてからである。

＝四月十八日記＝

昭和 47 年 4 月 22 日 日本証券新聞掲載

2012/05/06 第 306 号

均衡表の急所(46) 一目山人

《一段と波乱圏内 当面の計算値三四二六》

前回の四月十八日記では「重大な天井前波、当面一節の経過に注目」と題して「だいたいにおいて、十四日の最も大事な変化日はものをいった。その後、十七日までに一〇四ポイントの急落を入れたが、しかも NSB 平均三三二二ポイントと、三三一八を実現したあとであるから、これは、これまでのように簡単には片づけられない。もっとも、十七日の下げは、大証券の希望的変動によるところも大きかったようであり、そのための十八日の

急反発ではあろうが、突っ込みに対する反発がいささか強過ぎたので、一般的には、おそらくこれで底入れと考えるであろう。

今の私は、それを否定する証拠を見出してはいないが、しかし、もしそうなるためには、十七日の三二一八ポイントを底として、ここで決定反動とならなければならない。一節（九日）の経過を見なければなんともいえないが、三五五一点の実現が今年の大天井という確定点があれば、それはおそらく、先端波動を実現するであろうが、それは、これからの波動を見ながら、ゆっくり研究すればよい。ハッキリしたことを書けないのは、三三二二ポイントが大天井ときまっていないからであるが、この相場が数日中に決定反動となっても、それだけで直ちに大相場を展開するわけにはゆかない。もし展開すれば非常に悪質な相場となるわけであるから、今一、二度の決定反動、そしてその決定反動の底値を切り上げる必要がある」旨を書いた。

その後二十二日までは低調であったが、すでに一節を経過したにもかかわらず、決定反動にもならなかったけれども、十七日の安値三二一八ポイントを下回らなかった。これは時にとってきわめて重大であって、本当に悪い相場なれば、一気に一〇四ポイントたいた相場であるだけ、二、三日のうちに決定反動となれぬ以上、すくなくとも一節のうちには十七日の安値を下回るはずである。そうなれば二〇八ポイントの反動が確定的になるのであるが、その反動も将来に持ち越されたわけである。

しかも、二十七日には三二九九ポイントとなって、いよいよ決定反動となり、ゴールデン・ウィークも週末まで堅調を続けて三三七二ポイント、もちろん新高値である。ここで問題なのは、このまま一気に奔騰を続けえるかどうか、ということである。

前にも書いたように、四月十四日はきわめて重大な変化日であったが、それを日ならずして上回った強さを、ただたんにそれだけ見れば、このまま一気に奔騰を続けると考えることもできるが、しかし、相場はますます一層の波乱圏内にはいつている。今一～二度、すくなくとも決定反動のための突っ込みなしとし難いが、五月二日から、週末五月六日がちょっとした変化日であるから、休日明けの相場はやや注目に値する。

今後の変化日は五月十九日、六月七日、七月十日となっているがこれはいずれも相当大事であってことに七月十日がさらに延長されるとは、容易に考えられない。先端波動にしる、あるいは三尊天井にしる、おそらくその転換は七月十日をもって最後とするであろうと今のところ思っている。

はたしてどうであるか。こんごの経過を照らしつつ、また書くとして、天井値はまず三五五一点以上のはずであるが、しかしその前に当面の計算値三四二六ポイントがいつ実現するか。それが実現のしかたによっては、その後のきわめて重大な波乱となるというこのことをこの際とくに強調しておきたい。

なお前回の記事の最後に追加した記事が落ちてしまったので、ここに書き加えておけば「NSB平均の騰落はいかようにもあれ、これから中、低位株を主流として、一般的には二、三月から整理にはいった銘柄中、業績不安のないものが買い方にねられるであろう」

というのであったが、これはまだこれからもそうであろうと思っている。もちろん最後は全面高とならなければ、これほど上げた相場の天井とはならないであろう。

=五月六日記=

昭和 47 年 5 月 11 日 日本証券新聞掲載

2012/05/13 第 307 号

均衡表の急所(47) 一目山人

《当然急伸相場だが 六月相場では波乱激化》

五月六日記の今回は「二十七日にはいよいよ決定反動となったが、ここで問題なのは、このまま一気に奔騰を続けるかどうか、ということである。しかし相場は一層の波乱圏内にはいつているので、今一、二度すくなくとも決定反動のための突っ込みなしとしたいが、五月二日から六日がちょっとした変化日であるから、休日明けの相場はやや注目に値する。

今後の変化日は五月十九日、六月七日、七月十日となっているが、これはいずれも相当大事であって、ことに七月十日がさらに延長されるとは容易に考えられない。先端波動にしろ、三尊天井にしろ、おそらくその転機は七月十日をもって、最後とするであろう。と今のところ思っている。はたしてどうであるか。こんごの経過に照らしつつまた書くとして、天井値はまず NSB 平均三五五一点以上のはずであるが、しかしその前に当面の計算値三四二六ポイントがいつ実現するか、その実現のしかたが重大である」旨を書いた。

その後八日、九日と急落したものの、十一日には早くも第二の決定反動となり、十七日には三四二六ポイントも実現。当然、一波乱あるべきところであり、翌十八日には、何度目かの大蔵省による大証券引接があったにもかかわらず、十九日にはわずかに二〇ポイント安にとどまった。しかも週末の翌二十日には、たちまち決定反動となった。これで前々回からかいてきた第三回目の決定反動であって、これによる相場のスケールは当然大きくなった。

一応、一気に三五五一点以上を実現する急伸相場と考えるべきであるが、しかし五月十九日の変化日もわずかの反動安にとどまったにもかかわらず、第三次決定反動のあとにしては、伸び方がじゅうぶんとはいえない。ことに大蔵省の無配低位株自粛要請により、値がさ株にスイッチしたにしては、いかにも相場に迫力がとぼしい。

由来、連続第三次の決定反動はただそれだけで、急伸相場による天井接近を示唆するものであって第三次決定反動から急騰すればもちろんのこと、急騰できなければできないで、いつ天井打ちとなってもよいのである。いわんや、第三次決定反動後において、どこかで

一急落があれば、それはきわめてやっかいである。

前回にも「一だんと波乱圏内」と題したように、あとNSB平均でいくばくありとしても、要するに、ボーダーラインに直結している。ながい間の一本調子の上げ相場に酔いしれることは、これからは特に気をつける必要があると思う。

もちろん気をつける、といっても、不足の変化が予定されているわけではないし、天井時期も、まだ確定していない。今の私としては一だんの急伸相場を当然としたいのであるが、それだけに私としても、ここ一節前後の経過をとくに重視したいと思っている。はたしてこれからの急伸相場を余じんとすれば、さらには安値売り込みの期日相場とすれば、これからしばらくはとくに値がさ株の向背に注目すべきであろう。まだ天井打ちの時間関係は決定していないといっても、値段は現在、または現在以上なればいくらかでも文句はない。

ただ決定的となるためには、何度もいうように三五五一点以上をとることであるが、さらに大事なのは時間である。当面の変化日としては五月三十日であるが、これは一応のもので、やはり大事なのは六月七日と七月十日である。前回にも書いたように、七月十日はきわめて重大であるが、すでに第三次決定反動を見た以上、それまではたまたないかもしれない。

はたしてどうであるかは、六月七日までの経過を見定めてから書くことにするが、もしそれ六月七日の変化日以前に三五五一点以上を実現し、七日の変化日後も大きな反動がないとすれば、一だんと七月十日の重大性がまずわけであるが、三五五一点以上の計算値は三六七六、三七二四ポイントということになる。

もちろん相場がそこまで伸びるためには、前もってそれを確定する動きが出なければならぬが、今の私としては、ひたすら六月七日までの経過と、その後の変化に注目したい。六月相場はとにかく波乱は激化するはずである。

＝五月二十四日記＝

昭和 47 年 5 月 27 日 日本証券新聞掲載

2012/05/20 第 308 号

均衡表の急所(48) 一目山人

《変化日は延長型だが 本格的な波乱圏内入り》

五月二十四日記の前回では「週末の五月二十日には、たちまち決定反動となった。これぞ前々回から書いてきた第三回目の決定反動であって、これにより相場のスケールは当然大きくなった。しかし第三次決定反動のあととしては、伸び方がじゅうぶんとは言えないし、迫力がとぼしい。由来、連続第三次の決定反動はただそれだけで、急伸相場による天

井接近を示唆するものであって、第三次決定反動から急騰すればもちろんのこと、急騰出来なければ出来ないでいつ天井打ちとなっても良いのである」

「もちろん天井時期もまだ確定はしていないし、今の私としては一だんの急伸相場を当然としたいのであるが、それだけに私としても、ここ一節前後の経過をとくに重視したいと思っている。ただ相場が決定的となるためには、何度もいうように三五五一点以上を取ることであるが、さらに大事なのは時間である。当面の変化日は五月三十日であるが、これは一応のもので、やはり大事なのは六月七日と七月十日である。六月七日までの経過を見定めてから書くことにするが三五五一点以上の計算値は三六七六、三七二四ポイント(あった)ということになる」

これを書いた二十四日までの伸長はまだじゅうぶんでなかったが、二十五日からようやく調子がつき、本格的な急伸相場時代にはいり、二十九日には早くも三五五一点を實現。一節を待つまでもなかった三十日、三十一日の変化日もちょっと押しただけで無事にすみ、六月五日三六七六ポイントを実現するや、六日には約三〇ポイントの急落となったが、それは重大な計算値を實現したことと、七日の変化日が迫っていることによるもので、一応変化日の先取りと見て良いであろう。

したがって、この重大変化日の翌日、すなわち今日も銘柄は交代したが、NSB平均は無難であった。一応延長型と見るべきであるが、しかし延長されなければ、七月十日までは取り上げる必要のない変化日がいくつかひかえている。

まず目につくのは六月十五日、二十六日であるが、何分にも連続三次の決定反動前の急伸であり、第一次の決定反動以来実に三四〇ポイントの急伸である。すでにこれだけでもじゅうぶんであるが、この決定反動については一目均衡表完結編には書いてある。しかし連続三次のあとの相場観については、わざと書くことをやめた。けだしきわめてまれにしか出現しないものを実績編に書けば、当然「守株の愚」をいましめねばならぬが、それよりも時を得て、それが出現した時に書くつもりであった。幸いにも、こんなに早くそれを書き得たわけであるが、しかしそれだけに、守株の愚、悪い言葉で言えばつまりバカの一つおぼえのようなことのないよう、大いに注意してほしい。けだし連続三次の決定反動後急伸相場となるか、あるいは急落相場となるか、それを何により何処できめるかがわかるまで少なくとも完結編の読者には研究してもらいたい。

とにかくこの急伸相場によっていよいよ本格的な波乱圏内にはいったわけである。はたして三七三八ポイントを実現するとしてもあといくばくもない。すでに一四五〇ポイント以上を奔騰した相場であるからこれ以上の追求は大いに用心を要する。ちょっと燃えかけた値がさ株も静かになっているが、低、中位にはまだ人気のおとろえを見せないものが多いのでダウはいかようもあれ、銘柄別にはなお相当研究の余地があると思う。

私は銘柄を書くことはとくにつつしんでいるが、最近余りに常識外の株が躍っているので、それがしずまるまでは、まず天井打ち、ということはないかも知れない。そうした意味で、四、五の銘柄を書くとすれば、まず日魯、帝石、住金鉱、日通などであるが、私は

意外に化ける可能性をもつものとして、宝酒造、セントラル硝子を注目している。

金相場はすでに六四ドルを超えたが、このことについては、本紙の新年号にも書いた。しかし、今のところこれを楽観材料にし過ぎているようである。相場は過熱していないというが、画時代的な低金利時代であり、規制相次いで、今ではほとんど現物相場となっている。それによって過熱感が薄いのであるが、しかし、いよいよ売り時代となれば現物相場のあとだけに、いっそう厄介である。ということもこれからはぼつぼつ考えて良いと思う。まだハッキリした事が書けないで申しわけないが、決め手が出たらすぐ書かしてもらうつもりである。

=六月八日記=

昭和 47 年 6 月 10 日 日本証券新聞掲載

2012/06/03 第 310 号

均衡表の急所(49) 一目山人

《相場は新しくなる NSB 平均四〇〇〇台実現か》

六月八日記の前回では「変化日は延長型だが、本格的な波乱圏内入り」と題して「二十五日からようやく調子がつき、本格的な急伸相場時代にはいり、二十九日には早くも三五五一点を実現。当面の重大変化日たる八日、すなわち今日も銘柄は交代したが NSB 平均は無難であった。一応延長型と見るべきであるが、しかしそうだとすれば七月十日までにいくつかの変化日がひかえている。まず目につくのは六月十五日、二十六日であるが、なにぶんにも連続三次の決定反動後の急伸であり、第一次の決定反動以来実に三四〇ポイントの急伸であって、すでにこれだけでもじゅうぶんである。とにかくこの急伸相場によって、いよいよ本格的な波乱圏内にはいったわけで、はたして三七三八ポイントを実現するにしても、あといくばくもない。すでに一四五〇ポイント以上を奔騰した相場であるから、これ以上の追求は大いに用心を要する。金相場はすでに六四ドルを越えたが、このことについては本紙の新年号にも書いた。しかし今のところこれのみを楽観材料にし過ぎているようである。相場は過熱していないというが、規制相次いで、今ではほとんど現物相場となっている。それによって過熱感がうすいのであるが、しかしいよいよ売り時代となれば現物相場のあとだけにいっそう厄介である、ということもこれからはぼつぼつ考えて良いと思う」旨を書いた

翌六月九日には五一点の急落となったものの、十日には早くも反発、連続高を入れ NSB 平均は三七二二ポイントとなった。まさに変化日は延長されたわけであるが、なにぶんにも本格的な波乱圏内にはいった相場である。十五日の変化日は無事に過ぎたものの、九日の突っ込み安から一節の連続高後は、とかく陰線つづきとなり、二十四日にはポ

ンド・ショックで一気にヤリ気配となり、引けまでにヤリ気配のままのものが第一部で二百九十二銘柄に及んだ。しかも、二四二ポイントという暴落であったが、前にも書いたように、規制相次いで信用取引が閉鎖的となり、現物商いが主となっただけに、いよいよヤリ気配となるとカイものが出ない。わずかな玉で値だけ下げたわけである。

しかも金高を買った後である。金高そのものはポンド、ドルの不安をはらむものであるから一層のショックを受けたわけであるが、しかし休日明けの二十六日は前にも書いた変化日であり、NSB平均もザラバでは三三四〇ポイント台があった。この三三四〇ポイント台は、第一次決定反動の安値であるから、何はなとも一度は下げ止まる。二十七日に七〇ポイント以上の戻りを入れれば、それは戻りではなく、相場が新しくなる。相場が新しくなれば、当然四〇七五ポイントを考えねばならぬことになるわけである。

そう思って、その後の急騰をながめてきたのであるが、七月三日には三七五一ポイントと、前には実現しなかった三七三八、三七四二ポイントを実現してきた。ここは当然ひと反落入れて良いわけで、今日の高ナグレもじゅうぶんうなずける。

そこで問題なのは、前出の四〇七五ポイントが果たして実現するか否かであるが、それはまだ決定的なものではなく、むろん証明も得ていない。おそらくそれは拡大されるか、縮小されるかのいずれであろうと思うが、それを決定するものは、これからの高値波乱である。

何度も書いてきたように、非常な波乱圏内にはいつている相場である。一途に上ばかり見ているわけにはゆかない。「天井打ち」という決定的なものがあれば、むろん大暴落となり、安心してウリ時代となるが、天井打ちらしいものがないとしても、決して安心ばかりしてはおれない、という心がまえが大切だと思う。

ところで当面の変化日であるが、これは相場がここまできたので、非常に複雑に多くなっている。それを皆書けば、読者には訳のわからぬことになるであろう。そこで本格的な変化日にとどめて書けば、まず七月十日、二十二日、二十五日、八月二日、九日ということになるが、いずれに重点があるかは、こんごの波乱を見定めてからにしよう。

私は、少なくとも数日前には、天井値と天井日を発表して、多年の愛読に報いたいと思っているが『一目均衡表・完結編』の読者による同人会は、当然のことながらすばらしい成績を上げているという。これにできるだけ出席して勉強されんことを。

＝七月四日記＝

昭和 47 年 7 月 6 日 日本証券新聞掲載

2012/06/10 第 311 号

均衡表の急所(50) 一目山人

《証明は今後の波乱 拡大か縮小か天井近し》

七月四日記の前回では「相場は新しくなる」と題して「休日明けの二十六日は、前にも書いた変化日であり、二十七日に七〇ポイント以上の戻りを入れれば、それは戻りではなく、相場が新しくなる。相場が新しくなれば、当然四〇七五ポイントを考えねばならぬことになる。七月三日には三七五一点と、前には実現しなかった三七三八、三七四二ポイントを実現してきた。ここは当然ひと反落入れてよいわけで、今日の高ナグレもじゅうぶんうなずける。そこで問題なのは四〇七五ポイントが果たして実現するか否かであるが、それはまだ決定的なものではなく、むしろ証明も得ていない。おそらくそれは拡大されるか、縮小されるかのいずれであろうが、それを決定するものは、これからの高値波乱である。ところで、当面の変化日であるが、本格的な変化日だけを書けば、まず七月十日、二十二日、二十五日、八月二日、九日ということになる。いずれかに重点があるかは、こんごの波乱を見定めてからにしよう」旨を書いた。

七月四日と五日の突っ込みはNSB平均三六四六ポイントを実現したアトとしての押し目は、例によってきわめて軽微なものであった。しかも七月十日に先駆したので、問題の七月十日も三七一〇ときわめて平静であり、延長されることになり、数日のモミを経て、再活躍時代にはいり二十二日も無事、今日はザラバで三八三〇ポイントの高値があった。

当面している計算値はV三八五六ポイントであるが、これをもし二十五日の変化日まで実現しないならば、二十六日以後の相場もしか恐れる要はないはずである。出来高が非常に大きく、それが連続しているので、一面警戒心も強く、適当に利食いも出ているようであるが、変化日が延長されると否とにかかわらず、一段と波乱圏内にはいった相場であることに間違いはないのであるから、大衆と否とにかかわらず、警戒にしくはない。

波乱があるたびに警戒嚴重となれば、ごく目先的にはいくらか大転機を延長することになるわけだが、それだけに一本調子の上げ相場は危険であると思わねばならない。七月二十六日が大過なくして延長されるとすれば、八月二日、九日、十二日が問題となる。むしろそこで大天井を打つ…ということは、今の段階では、考えるべき証拠がない。

前にも書いた四〇七五ポイントが拡大されるか縮小されるかは、かかってこれからの高値波乱のいかにある。これだけの大相場の天井打ちである以上、急いで結論を出す必要はないからであって、もはやそう遠くはない大天井打ちをいつのいくらかとハッキリさせるためには、私は不健康を押して、人知れない情熱をかたむけている。拡大されるか縮小されるかについても、遠からず決定証明されると思うが、これだけの規制相次いでしかも立ち会い時間短縮による大商いは、低位株だけの大商いだからとて、それだけで安心はしておれない。

もっともこの低位株から中位株へ、さらには値がさ優良株への発展がなければ、NSB四〇〇〇ポイント台は望めないわけである。最終的には、そうならなければ、当然縮小されざるを得ないのであるが、今の私はやはり拡大を考えている。低位では北炭、帝石、三井金、三菱金、洋紡、セントラル、リッカー、日通などなお相当余熱を残していると見ら

れるが、私は一般相場の天井打ち前後の、銘柄の向背いかんという点で、ダイハツを注目している。これが大きく化けるかどうか。今の一般相場において、これが大きく訂正されないようでは、それは一般的にすでに、たいした望みをかけるわけにはゆかないのかもしれない。それほどに考えるのである。

なお前回の記事が新聞に出たアトちょっと不快な電話を受けた。なぜ七〇ポイント以上の戻りで、相場が新しくなるのか、という問いは良いのであるが、七月四日の時点で、相場が新しくなるとはだれでも書けるのではないか、という冷やかしであった。そう思われなかったために、前回の記事中「七〇ポイント以上の戻りがなければ相場が新しくなるから、そのつもりでと二十七日同人会には通告した」旨を書いたが、それが削られていたのである。なぜに相場が新しくなるかの理由事由については、六つあったのであるが、それも同人会には説明してある。冷やかしがなかったなら電話の主にもその六つを説明したと思うが、しかしこれを機会に本紙の読者にも優遇策を考えたので、別版の広告を参照されたい。
＝七月二十四日記＝

昭和 47 年 7 月 27 日 日本証券新聞掲載

2012/06/24 第 313 号

均衡表の急所(51) 一目山人

《およその天井時期 ただしすべては未決定》

七月二十四日記の前は「証明は今後の波乱」と題して「当面している計算値はVの三八五六ポイントであるが、これをもし二十五日の変化日までに実現しないなれば、二十六日以後の相場もしか恐れる要はないはずである。大出来高の連続で、一面警戒心も強く適当に利食いも出ているようであるが、変化日が延長されると否とにかかわらず、一段と波乱圏内にはいった相場であることに間違いはないのであるから、警戒にしくはない。七月二十六日が大過なくして延長されるとすれば、八月二日、九日、十二日が問題となるが、むろんそこで大天井を打つ…ということは、今の段階では、考えるべき証拠がない。前にも書いた四〇七五ポイントが拡大されるか縮小されるかは、かかってこれからの高値波乱のいかんにある。この低位株から中低位株へ、さらには値がさ優良株への発展がなければNSB四〇〇〇ポイント台は望めないわけであるから、そうならなければ当然縮小されざるを得ないが、私はやはり拡大を考えている」旨を書いたが、八月二日には一八ポイントの急落を見せた。しかし、これは変化日当日で、翌三日にはたちまち決定反動となっている。

八月五日に三九七四ポイントの高値をつけたアト、大蔵省の自肅要請により四日間連続安を入れたが、この値幅はわずかに六六ポイントに過ぎなかった。これは八月四日から値

がさ優良株に買い気が回ってきたためであるが、かくて十日、十四日の変化日翌日も無事に過ぎて今日に至っている。この限りではまだ何も決定していない。むろん波乱圏内にはいった割には、波乱の幅が小さく、そのために天井の値段、時間ともにまだ決定していない。

その点から見れば、前回にも書いたような天井値は拡大されると考えるほかないが、さし当たり天井未決定のままでこの記事を書いている今の私としては、はなはだ不愉快である。どう考えても読者の読後感が充足されるとは思えないが、この際は「未決定」ということだけでご了承を願いたい。それをつぐなうために、アトで銘柄を一、二ご覧願って、こい茶で一服してもらおうことにしよう。

ところで当面の計算値は前にも書いた四〇七五ポイントであるが、その上の大きなものはまだ現れていない。それと同じようなものとしては四〇七八、四〇四八、四〇四〇、四〇三二ポイント等である。なかんづく大事なものは、四〇四八、七五の二つであるが、このままの一本調子の相場で、それらが実現すれば、相場も時間もさらに拡大延長されざるを得ないであろう。

当面の変化日としては、八月二十二日、三十一日、九月八日、十四日、二十二日ということになっているが、このうちで最も大事なものは九月八日と二十二日である。これはまだ思いつきの範囲を出ないもので、決定とか、証明済みというものとはほど遠いものであるが、おうす一服の気持ちで申せば、九月八日が大天井による変化日となるのではないか。かりにそれが延長されとしても、二十二日までは保てないのではないか。もちろんこれはその前に訂正して書くつもりであるが、今のところ、かりにさらに延長されても十月三日を越えることはまず困難だろう、と思っている。

いずれにしても、なおしばらくのNSB平均には妙味がうすい。全面的ウリ時代となるまでは、やはり銘柄であるが、前にも書いた低位株中リッカーは完全な再出直りとなった。これは前にも一〇〇円台で、私が週間足の均衡表と称するものに大きな買い目が出たが、今度もさらに強いものが出た。二〇〇円台に乗せてからさてどんな波乱を見せ、さらに大きくなるか否かを見きわめたいところであるが、たとえばダイハツも全く同様、というよりこれはモット大きいかも知れない。今のところ一節の押しをいれてモンでいるが、これで押しはじゅうぶんである。

その他いろいろとあるものの、低位とはいえないが良く煮つまったものに東急車輛がある。この株の二六〇円台は全く居どころが違うと思うが、優良値がさ相場が今しばらくすれば、また低、中位が大きく人気を集めるところであるであろう。そうであるか否か、無配代表の片倉に注目したい。

まあ前回、前々回に書いた六月二十七日の七〇ポイント以上の反発で何故相場が新しくなるのか、六つとは何々か。という問い合わせがしきりなので、一括して答えておけば、まず第一に天井波乱をやっていないこと、第二に計算値を実現していないこと、第三に二十六日にザラバで三三四〇台を見せたが、これは第二決定反動の安値に相当すること、第

四に二十六日が大事な変化日であったこと、第五に先行スパンの止まり値であったこと。

その他材料で下げた相場であって、相場でくずれたものではなく、しかも私は、新年号以来、円の再切り上げは年内には無い、と考えていたことなどによるものであり、七〇ポイントとしたのは、六月上旬の波乱がザラバを加えても七〇ポイントであったことによる。
＝八月十五日記＝

昭和 47 年 8 月 17 日 日本証券新聞掲載

2012/07/01 第 314 号

均衡表の急所(52) 一目山人

《最大限の計算値を 九月相場で決まらねば》

八月十五日記の今回は「およその天井時期」と題して「八月四日から値がさ優良株に買い気が回ってきたが、かくて十日、十四日の変化日翌日も無事に過ぎて今日に至っている。この限りではまだ何も決定していない。むろん波乱圏内にはいった割りには、波乱の幅が小さく、そのために天井の値段、時間ともにまだ決定していない。計算値でなかんずく大事なのは、四〇四八、四〇七五ポイントの二つであるが、このままの一本調子の相場で、それらが実現すれば、相場も時間もさらに拡大延長されざるを得ないであろう。当面の変化日で最も大事なのは九月八日と二十二日であるが、ここで思いつきを申せば九月八日が大天井による変化日となるのではないが、それが延長されても、二十二日までは保てないのではないか。もちろんこれはその前に訂正して書くつもりであるが、かりにさらに延長されても十月三日を越えることはまず困難だろう、と思っている」旨を書いたが、八月も月末の迫るにつれて一本調子に上げ四〇四八、四〇七五ポイントを実現、次の計算値四一三三も一気に突破して四二〇〇大台に乗せてややモミを入れている昨今である。

かくて相場も時間もさらに拡大延長され、九月八日の変化日も無事に過ぎた。無事に過ぎたばかりでなく、小休止していた優良株グループに人気がつつてきた。前回に、まだ決定してはいないが、思いつきを書けばと、九月相場のことを書いたが、むろんまだ決定はしない。まだ決定していない、ということは、相場は明らかに波乱圏内に入っているにもかかわらず、大なる暴落を懸念する必要のないことを意味する。

何分にも何十年に一度という性格革命、世紀の大相場である。あくまでも決定を待つ外ないが、この稿を書いている今日現在で、ごく目先のことをいえば、九月十二日の突っ込み四一六〇ポイントが決定反動となるか否か、時に取ってかなり注目に値する。

その場合、もっとも良い前提条件としては、九月二十二日までに決定反動とならず、しかもその後において、十二日を下回って引ければ、まず九月相場において「大天井は決定」するものと見ておいて良いであろう。

もちろん、これは仮定であって、実際の経過を見て勘案するほかないが、当面の変化日は九月十九日、二十二日。その他主たるものは十月三日、十九日となっている。

当面の計算値は四三七〇、四四四六ポイントであるが、はたしてそれが実現するか否か。実現するとしても、どんな経過において可能なのか、とにかく大天井が迫っているだけ、大いに興味のあるところであるが、もしそれが、たいした波乱なくして実現し、しかも十月三日の大変化日がさらに延長されるということになれば、計算値はこの大相場の最大限を実現するかも知れない。最大限は五二二〇ポイント以上であるが、たとえば、これからずいぶん上値があるということになる。

しかし、そのためには値がさ優良株グループということになるが、強気一辺倒がだいぶんふえて来たし、久しい警戒観にもあきてきた向きが多い。銘柄の変化も著しいので、これからの銘柄別においてはNSB平均に関係なく、つねに利食いの心がけが必要だ。

円の再切り上げは来春以降の問題だと思うが、ぼつぼつ輸入関連株、純国内事業株に力を注ぐのが良いかも知れない。前々回以来書いた二、三の銘柄はちょっと押しが深いので、少し手間取るかも知れないが、大ものであることに変わりはないと思う。

なお、変化日について対象の誤解があるように思うので書き添えて置けば、変化日は転換、延長による加速度のほかに、規制、銘柄転換による変化があるが、私は変化日の翌日の相場を見て、新しい構想を立てることにしている。

＝九月十五日記＝

昭和 47 年 9 月 19 日 日本証券新聞掲載

2012/07/08 第 315 号

均衡表の急所(53) 一目山人

《一段と大相場へ 十月末に変化日重なる》

九月十五日記の今回は「九月相場が決まらねば、最大限の計算値を」と題して「八月も月末の迫るにつれて一本調子に上げ、四二〇〇大台ポイントに乗せてややモミを入れている昨今である。かくて相場も時間もさらに延長され、九月八日の変化日も無事に過ぎ、小休止していた優良株グループに人気がつつてきた。天井時期、値ごろはまだ決定していないが、決定していない、ということは、相場は明らかに波乱圏内にはいつているにもかかわらず、大なる暴落を懸念する必要のないことを意味する。何分にも世紀の大相場である。あくまでも決定を待つほかないが、今日現在でごく目先のことをいえば、九月十二日の突っ込み四一六〇ポイントが決定反動となるか否か。その場合、もっとも良い前提条件としては、九月二十二日までに決定反動とならず、その後において十二日を下回って引ければ、九月相場において『大天井は決定』するものとして良いであろう。当面の変化日は

九月十九日、二十二日、その他主たるものは十月三日、十九日となっている。当面の計算値は四三七〇、四四四六ポイントであるが、はたしてどういう経過でそれを実現するか。もしそれがたいした波乱なくして実現し、しかも十月三日の大変化日がさらに延長されるということになれば、計算値はこの大相場の最大限五二二〇ポイント以上を実現するかも知れない。もちろんこれからの銘柄別においては、NSB平均に関係なく、つねに利食いの心がけが必要。円の再切り上げは来春以降の問題だと思うが、ぼつぼつ輸入関連株、純国内事業株に力を注ぐのが良いかも知れない」旨を書いた。

その後、十九日に十二日の安値をわずかに下回って引けた。もちろん、これで決定反動にはなれないわけであるが、この十九日の安値を押し目底として再活躍となり、ことに二十七日は前場の寄り付き間もなく二三ポイントの配当落ち埋めてさらに高かった。しかし、後場からは急に売られて結局は大引けはほぼ配当落ちだけ安く引けたが、三月、九月の配当落ちでこの相場付きは非常にキケンな形であって、配当落ちの寄り付きから売られるよりも一段と良くないのを常とする。

このことは完結編にも書いておいたが、そうした良くない大引けにもかかわらず、翌日はたちまち新高値に買われて決定反動となってきた。いかにも強い相場であって、この決定反動は無条件の買いである。

ことに十九日の突っ込みが変化日であっただけ、その後の相場に力がついたわけである。かくて十月二日には計算値四三七〇以上を実現したにもかかわらず、重大な変化日たる十月三日も、高値から約三〇ポイント安に引けたのみで相場は延長となり、久しく低調だった財投に人氣が回ってきた。そればかりでなく三日の突っ込みもまたたちまち第二次決定反動となったが、前にも書いたように十月三日が延長された以上、一段の大相場を期待せざるを得ないわけである。

もちろんこれからは波乱は大きくなるばかりでなく、相場と人氣のうつり変わりもはげしくなる。これからのNSB平均や変化日は、相場一般の大天井と相場のうつり変わりを発見せんとするもので、個々の銘柄については、つねに早目に利を入れることが必要であろう。ところで十月五日には計算値四四四六ポイント実現の一步手前の四四四〇まで見せたが六日には前引けで七ポイントの急落となった。ちょっと気崩れかと思ったが、大蔵省のドル対策によるものとわかり、たちまち人氣を取り戻して、今日は四四四〇ポイント台となり、まさに第三次の決定反動である。

これから一段とNSB平均の上では、相場は大きくなるはずであるが、ごく目先のことを言えば、目先の計算値四四九八ポイント以上を実現した後の波乱の有無であるが、十月三日が延長された以上しょせん最大限の五二二〇以上を実現するものと見て置いた方が良いでしょう。かりにそれが実現しないにしても大きなN四八六七ポイントは実現するであろう。

変化日としては、近くは十月二十日(十九日はあやまり)。次は十月二十七日、二十八日、三十日と月末に重なるが、次は十一月八日となっている。

それ以後のことは次の機会に書くとして、銘柄別とすれば、やはり輸入関連、純国内産業株であるが、波乱なくして有望銘柄とすれば、大分前に書いたリッカーはこれから大きい。ダイハツは減配を売られているが、値は届いたので、手間取るばかりで将来は大きいと思う。東急車輛はまだ低迷しているが、これは中国向けばかりでなく、ソ連向けにも大いに有望なこれからの株である。その他石炭株がひと休みしたアトは大いに有望、三菱化成、日本酸素なども波乱なくして有望な株だと思うが、結局は優良株に来る相場であろう。
＝十月十一日記＝

昭和 47 年 10 月 14 日 日本証券新聞掲載

2012/07/22 第 317 号

均衡表の急所(54) 一目山人

《ぼつぼつ優良株へ 21 日の変化日も延長》

十月十一日記の今回は「一段と大相場へ」と題して「十九日の安値を押し目底として再活躍となりことに二十七日は前場寄り付き間もなく二三ポイントの配当落ちを埋めてさらに高かった。しかし後場からは急に売られて、大引けはほぼ配当落ちだけ安く引けた。これは非常にキケンな形であるが、にもかかわらず翌日はたちまち新高値に買われ決定反動となった。いかにも強い相場であって、この決定反動は無条件の買いである。かくて十月二日には計算値四三七〇以上を実現したにもかかわらず重大な変化日たる十月三日も約三〇ポイント安に終わり、相場は延長、財投に人気は回ってきた。さらに、三日の突っ込みも、また、たちまち第二次決定反動となったが、十月三日が延長された以上、一段の大相場を期待せざるを得ないわけである。もちろんこれからは波乱は大きく、相場と人気の移り変わりもはげしくなる。個々の銘柄については、つねに早目に利を入れることが必要。ところで十月五日には四四四〇まで見せたが、六日には前引けで七ポイントの急落を入れ、たちまち人気を取り戻して、今日は、まさに第三次の決定反動である。十月三日が延長された以上、しょせん最大限の五二二〇以上を、かりにそれが実現しないとしても、四八六七ポイントは実現するであろう。変化日としては、近くは十月二十日、十月二十七日、八日、三十日と月末に重なるが、次は十一月八日となっている」旨を書いたが、その後十二日に四四八〇を取った。

これからやや波乱ふくみとなり、問題の二十日には四三二四ポイントと一二七ポイントの急落を見た。高値からは一五六ポイントの反動があったが、変化日二十日の翌日安寄りから反発、人気銘柄の変化とともに、二十八日には新高値となり、その後連騰を続けて十一月八日には四五五六ポイントとなったが、一向に反動来の様子はなく、十日にちょっと波乱を見せただけで、昨日は四六一ポイントの新高値である。何分にも十月十二日から十

月十二日までの波乱が三尊くずれでありながら、それがたちまち反騰したのであるから、どこまでいっても大相場型である。

前回にも書いた以後の計算値は、差し合たり四六三六ポイント、変化日は昨日の二十一日であるが、昨日が新高値であるとはいえ、当面計算値を取っていないだけ、注目に値する二十二日相場も、しかく恐れるには当たらない。もうすでにこれまでの変化日ごとに天井を打っている銘柄は順々に出ているがNSB平均がここで天井打ちとなることはまずない。

すくなくとも、これまでの経過では、天井打ちの確定要因は出ていないからであるが、いずれにしても今二十二日の相場はきわめて大事である。私も久しい前から今日の向背を深く問題としてきたわけであるが、いよいよフタをあけて見れば依然として延長を明らかにしてきた。当然人気銘柄が変更されて相場も加速度され、優良株移行とともに前場引けでは五〇ポイント高となってきた。

これでしばらくは安心であるが、当面の変化日は十一月二十九日、三十日、十二月八日、十一日であるが、ただここで注意しておきたいことは、すでに四六三六ポイント以上を実現したのであるから、このへんで急落相場があれば、それはこれまでの反動とは、よほど性格の変わったものになりやすい、ということである。しかし、もし前述の変化日がさらに延長される、ということになれば、おそらく来年の一月中旬までは、天井打ちとならない、ということになるかも知れない。

しばらくは優良株銘柄が主力になる、と考えられるが、再び仕手株相場となるか否かについて、私はまず片倉の今後に注目したい、と思っている。片倉は今すでに信用取引は停止されているが、過去の残玉は十二月二日に一掃されて完全な現物取引となる。アト立ち会い日は八日しかないが、表面の取り組みはウリ八十六万株に対しカイは四十万株に過ぎない。このウリ玉が持株筋のツナギであれば問題ないが、逆日歩の連続であるから、ツナギとはちょっと考えにくい。持株筋のウリがこれから出れば良いが、反対にカイ方がカイ増してくるか、期日受け、というようなことになれば、値段での解決、ということにもなりかねない。切に平穏なる解決を祈ってやまないが、はたしてどうであろうか。

=十一月二十二日記=

昭和 47 年 11 月 25 日 日本証券新聞掲載

2012/07/29 第 318 号

均衡表の急所(55) 一目山人

《警戒裏の天井待ち すべては一、二月相場で》

十一月二十二日記の今回は「ぼつぼつ優良株へ」と題して「十一月八日には四五五六ポ

イントとなったが一向に反動がくる様子はなく、十日にちょっと波乱を見せただけで昨日は四六一ポイントの新高値である。何分にも十月十二日から十月二十日までの波乱が三尊くずれでありながら、それがたちまち反騰したのであるから、どこまでいっても大相場型である。前回に書いた後の計算値は差し当たり四六三六ポイント、変化日は昨日の二十一日であるが、昨日が新高値であるとはいえ、当面の計算値を取っていないだけ、注目に値する二十二日相場も、しかく恐れるには当たらない。もうすでにこれまでの変化日ごとに天井を売っている銘柄は順々に出ているが、NSB平均がここで天井打ちとなることはまずない。すくなくとも、これまでの経過では、天井打ちの確定的要因は出ていないからである。私も久しい前から今日二十二日相場を問題としてきたわけであるが、依然として、延長を明らかにしてきた。当然人気銘柄が変更され、相場も加速され、優良株移行。これでしばらくは安心であるが、当面の変化日は十一月二十九日、三十日、十二月八日、十一日である。もし前述の変化日がさらに延長される、ということになれば、おそらく来年の一月中旬までは、天井打ちとはならない、ということになるかも知れない。しばらくは優良株銘柄が主力になる、と考えられるが、再び仕手株相場となるか否かについては、私はまず片倉を注目する」旨を書いた。

その二十二日から、相場は加速されて、二十九日には四八七九ポイントと、かねてからの四八六七ポイントを実現してきた。その日に変化日であったため、翌三十日にはザラバの高値より約五〇ポイント安となったが、この日もまた変化日で、規制強化と優良株移行のみにとどまり、十二月四日にはまだまだ決定反動となった。

二十九日に重大な計算値実現後三十日の相場が日ならずして決定反動となるなど、いかにも強い相場であるが、もちろんこの計算値実現後は、当分一段の波乱を当然とする。

七日には、ザラバ高値から一〇〇ポイント以上の反落となったが、このために八日の変化日も無事に済み、重大な変化日十一日もザラバ高値から六〇ポイント安となったが、そのために翌日も無事延長となった。これでまず年内天井は打たない…ということになったと、今の私は思っている。

それについて、当面最も大事な点は、突っ込み安をつけた十二月七日の相場が、決定反動となるか否かである。決定反動となるためには、七日の四八三八ポイントを引けで下回らないで、四九〇二ポイントを上回って引けることであるが、もし七日の引けを下回って引けるようであれば、再び四九〇〇ポイント台にのせるには、やや手間がかかる。

私としては内心それを希望しているのであるが、そうなれば、いよいよ天井の時期、値段が決定するからである。果たしてどうなるか、希望という予想的なことは一切すてて、もし決定反動となれば、計算値は四九六六ポイントとなることだけを報告するにとどめよう。

ところで、最大の計算値は、今のところ、今までどおり五二二〇ポイントであるが、その前にV四九八〇ポイントがある。当面の変化日は来春一月十一日、十三日、十九日、三十一日、二月二日となっているが、当面最も大事な十二月七日の相場が決定反動とならな

ければ、変化日もいろいろと変わってくる。

要するに年内は、いわゆるモチツキ相場で、波乱とハ行は一段とはなはだしくなるばかりでなく、相場の騰落も常ならず、目まぐるしいものがある。少し大きい目で見れば、すでに三〇〇〇ポイント近く上げ続けた相場である。しかも相場は一段と波乱圏内に入っている。石炭株や資源株などは新春相場の花形かとも思われるが、とにかく相場一般としては、警戒圏内の天井待ちというところであるから、大納会も迫っているこの期に及んでは、ただ読者諸賢のご多幸を祈って筆をおくことにしよう。

片倉も無事に一応片付いて、大蔵省とともにホッとしているが、まだ問題は残っているようであるものの、それは改めて書くことにする。

＝十二月十三日記＝

昭和 47 年 12 月 15 日 日本証券新聞掲載

2012/08/12 第 320 号

均衡表の急所(56) 一目山人

《二月が無事か否か これからの規制次第》

十二月十三日記の今回は「すべては一、二月相場まで」として「十二月四日にはまたまた決定反動となった。いかにも強い相場であるが、これまで書いてきた計算値をつぎつぎに実現してきたのであるから、当分一段の波乱を当然とする。七日には、ザラバ高値から一〇〇ポイント以上の反落となったが、このために八日の変化日も無事に済んだ。重大な変化日十一日もザラバ高値から六〇ポイント安となったが、そのために翌日も無事延長となった。これでまず年内天井は打たない…ということになったと思う。それについて、当面最も大事な点は、突っ込み安値をつけた十二月七日の相場が、決定反動となるか否かである。決定反動となるためには、七日の四八三八ポイントを引けで下回らないで、四九〇二ポイントを上回って引けることであるが、決定反動になるか否かによって、相場はだいぶ変わってくる。ところで最大の計算値は今のところ、今までどおり五二二〇ポイントであるが、その前に四九八〇ポイントがある。当面の変化日は来春一月十一日、十三日、十九日、二月二日となっているが、当面最も大事な十二月七日の相場が決定反動とならなければ変化日もいろいろと変わってくる。要するに年内はいわゆるモチツキ相場で波乱とハ行は一段とはなはだしくなるばかりでなく、相場の騰落も常ならず目まぐるしいものがある」旨を書いたが、十二月七日の安値はついに下回らず、十五日には早くも決定反動となり、それから加速されて二十一日も延長、二十六日も延長されて、五二〇七ポイント台となってきた。

その後新春に入り九日にはザラバで五二三二ポイントの高値もあったので、規制が出な

くとも一波乱を当然とするところであるがいぜん高く九日の規制はさらにキツく次官要請のかたちを取った。NSB平均では大した波乱もないようであるが、銘柄別の騰落は実に目まぐるしいものがあり、しかも大商いの連続となった。NSBも九日を高値として、引け値では一二〇ポイント、ザラバでは一五〇ポイント、日数にして今日まで十日の高値波乱となっている。十六日にはさらに証拠金預託という規制が出たものの、規制相次ぎ大発会以来を高値波乱に終始せしめているだけ、この相場を延命させているものと思う。

前回に書いた時の私としては、年内天井打ちは無いが、一、二月には天井打ち相場となるであろうと考え、とくに二月初めの変化日を重く見てきたのであるが、今後もさらに規制相次ぐ、ということになれば、あるいは三月の配当落ち前後まで延命される、ということになるかも知れない、と思いながら今日はこの稿を書いている。

もちろん二月相場は重大であることにはかわりはないが、二月の変化日では、二月一日、二日、二月七日がちょっと大事である。その後は▲十五日、二十三日、▲二十四日、三月一日、二日、▲七日（▲じるしは一月十六日以後に十六日の安値を下回った引けのない場合の変化日）ということになっているが、その後はまた改めて書くことにしよう。

計算値は五二二〇ポイントをすでに実現した以上、その次は五三三六ポイントであったが、それもだいたい実現。この上は五四一六、五四二六、五四三四、五四八〇ポイントとなっている。これまでの最大規模は六三八六ポイントであるが、それはアトの問題点であって、当面は、とくに大事なのは五四〇〇ポイント大台である。

その実現と変化はその関係が最も大事であるが、これほどおう盛な世紀の一本調子に直面しては、あらかじめ相場を想定することは適當ではない。まず何よりも、常に相場のスケールを正確に読み取ることが大切であるが、それには本を何十回も読むだけでなく、毎日の相場を見ながら、明日の相場を良く考えてもらいた。

ところで、規制相次いでせつかく乗りかかった優良株は人気の外にはずされたがしかしそのためにいち早く大型株、中低位の資源株、化学株などが盛り返してきた。久しく出後れていた機械株なども、業績回復の著しいものがあり、今後一段と人気を呼ぶであろう。

化学株中でも当面、大きく化けるものとして三井高圧あたりが注目されるが、三井山、帝石をはじめ、北炭、松島なども下値はすでに限定されているようである。これらもどこかで人気を集めることと思われるが、規制強化時代を経て一反動入れた後でなければ、優良株の一般的時代はめぐり来ないかも知れない。

＝一月二十二日記＝

昭和 48 年 1 月 24 日 日本証券新聞掲載

2012/08/19 第 321 号

均衡表の急所(57) 一目山人

《大局観は一層有望 この押し目は好ましい》

今回は書きたいことが多いので、前回の記事反復は最小限にとどめるとして、一月二十二日記の前回は「前々回を書いた私としては、年内天井打ちはないが、一、二月には天井打ち相場となるであろうと考え、とくに二月初めの変化日を重く見てきたのであって、要するに二月相場が無事に済むか否か、それも規制次第である」旨を書いた。

その後値がさ株にも買い気が回り、二十四日にはベトナム和平を入れて全面高となり、九二ポイント高の五三五九という新高値を見せた。大蔵省は証拠金の取引所凍結を決定、二十五日にはホテル・オークラに大手証券を招き自粛を強く要請した。私がとくに恐れたのは、議会閉会中における各商品取引の暴騰であったが、何よりも証拠金の凍結と自粛要望によって大中小証券の活動はほとんど停止された。しかもこの日は四十六年十一月の二番底からポンド・ショック前の高値、及びポンド・ショックから見ても、それぞれ三十三週、二番底から通算すれば均衡表記号の四角六十五週である。月にすれば各七カ月という大きな対等数値による重大変化日であった。

しかも、二十五、六日の反落により、久しぶりに上値の大きな決定反動となった。ここに至って、先端波動形式による条件不十分な縮小型となったが、この縮小型は本来深押しのないのを常とするものの、折りからの通貨不安も伴い、それよりも証券会社の自粛がきて、急落となった。この下げ相場のシラブルは一〇〇ポイントであるが、そうだとすれば四八三〇で止まらねばならぬ。私もそれを一時期待したが、それで止まらぬとすれば、高値から六八〇ポイントを見ねばならぬ。実際は二月三日に四七一六ポイントと、六四三ポイントの暴落となった。しかし、この日は重大な変化日でもあり、しかも高値から一節の下げであって、当然反騰を必至とする。

均衡表として、ここで考えるべきことは、一七〇ポイントの戻りで止まれば非常にやっかいであるが、二二六ポイント以上戻れば非常に有望となる、ということであった。二月五日の反発は四九五〇ポイントであって一気に三分の一戻しである。これで一応は安心であるが、しかし一本の戻りでは本当には安心出来ない。この上の高い引けなくして、四八二〇ポイント以上に引ければ、また決定反動となるからであるが、翌々日ザラバでは四七四〇台もあったものの、引けでは四八三〇台となり、以来それ以上はなく、十一日には四九八四ポイントと五日の戻り高値を上抜いてきた。

ここでまた考えるべきことは、翌日が安値からの一節に相当する。ここでのひと押しは当然としても、すでに目先の二番底を入れての出直りであるから、深押しは考えられない。深押しがないとすれば、S点を取りに行く、すなわち、五一九〇ポイントであるが、あたかも計算値のE点は五一八二ポイントである。幸いに十六日にはそれらをすべて実現したわけであるが、すでに四分の三戻しである。この強さにはわけがあると思うが、憶測を書くべきではない。ただ相場は相場に聞けば良い。

ここでまた、均衡表者として考えねばならぬことは、(一)このS点はかなり有力である

から、ここからひと押し入れるのが一番良い。問題はどれくらいの時間を必要とするか、ということであるが、そうならば、五六六〇ポイントを指向して、安心買い時代に入る。(二) そうでなく、このはな続騰して、もし五二三〇ポイントを実現するようであれば一気に新高値に躍る可能性も出て来る。そのいずれであるかによって、将来性はだいぶ開きが出てくるが、しかしいずれにしても先端波動形式の縮小型にして、下げ過ぎの反動としての戻りの強さ、実に驚くばかりであって、今日はザラバでは新高値にあと一〇ポイントというところまで迫ってきた。最早、新値を抜くか否かは問題ではない。問題なのは新値と否とにかかわらず、最小限一二〇～一七〇ポイントの反動を入れた後のことであるが、その計算はあとに述べるとして、ここでは私が本紙の新年号に書いた記事を参照していただきたい。

それを要約すれば「新春一、二月から上期の反動を入れれば、下期活躍はカリ入れ相場と考えるべきである」うんぬんであるが、今もなおその考え方に変わりがないばかりでなく、今度の反動によって一層その感を深くしているし、わが均衡表もそれを実証しつつある—と思っているが、この際大局的な計算値を書けば、これまで何度か書いてきた大局的な六〇〇〇ポイント台出現の可能性が非常に強くなってきた。もちろんそれはまだ実証されてはいないし、それが拡大されるか縮小されるかも、ここしばらくの変動と時間関係によることであるが、ここでは当面の動、反動における変化日として二月二十三日、三月はさし当たり六日、十四日、二十七日などを記してこんご一カ月の経過をゆっくり見たいと思う。

なお私は、新聞に書く場合に限らず、身投げ者をうしろから突き飛ばすような、下げ出してから暴落説は絶対に流さない。天底を確認すれば、暴騰説は時に書くかもしれないが、天井を当てて良い気持ちになることは特に慎んでいる。もちろんだれが言ったからとて、それで相場が変動するはずはないが、情報過多時代である。利用されないように気をつけているが、今度の暴落でも、何を言ったか、としきりに電話があったので、一言おことわりして置く。ついでに今一つ言えば、自分で考えないですぐに聞きにくる人はしょせん上達しない人だと思う。

＝二月二十一日記＝

昭和 48 年 2 月 23 日 日本証券新聞掲載

2012/09/09 第 324 号

均衡表の急所(58) 一目山人

《楽観ながら当面重大 なお高値では波乱多し》

二月二十一日記の前回では「大勢観は一層有望」と題して「今日はザラバでは新高値に

あと一〇ポイントというところまで迫ってきた。もはや新値を抜くか否かは問題ではない。問題なのは新値と否とにかかわらず、最小限一二〇～一七〇ポイントの反動を入れた後のことであるが、新年号に書いた記事に対し、今度の反動によって、一層その感を深くしているし、わが均衡表もそれを実証しつつある。この際大局的な計算値を書けば、これまで何度か書いてきた大局的な六〇〇〇ポイント台出現の可能性が非常に強くなってきた。もちろんそれはまだ実証されてはいないし、それが拡大されるか縮小されるかも、ここしばらくの変動と時間関係によることであるが、ここでは当面の動、反動における変化日として、二月二十三日、三月はさし当たり六日、十四日、二十七日などを記して、こんご一カ月の経過をゆっくり見たいと思う」旨を書いた。

二十二日から、またまた規制強化、ことに自己売買の自粛要請に次ぐ四大証券の検査となり、協同飼料のことなどもあって、一七〇ポイントの反動にとどまらず、さらに二九〇ポイント安の一步手前で一時下げ止まったものの、また一段とたたかれて三月五日には四七七一ポイントの安値を見せた。しかし、わが均衡表完結編の読者には、この変動は手に取るように良くわかったはずである。

何よりも大事であったことは、規制が手遅れにならなかったため、新高値に出ることなく、二十一日を高値に二十三日の変化日には急落、五二一四ポイントとなった。この下げ幅は一ニーであって、普通なれば好箇の押し、ということになるが、何よりも恐るべきことは、この日の下げでは遅行スパンが完全なウリとなったことである。

かくて三月初めの変化日六日まで急落を続けたが、この日はあたかも四七七一ポイントの一番底から、準備構成線を完了して、有力な二番底となったことは、三月六日の大引け値四八八八ポイントでは、ウリー辺倒の遅行スパンも一転してカイとなった。NSB平均が準備構成線を完了するということは、きわめてめずらしいことであるが、それだけに銘柄別を見れば驚くべき多数の銘柄が準備構成線を完了しており、その後の反騰に乗ずる機会はきわめて多かった。

今一つ注目すべきは、先行スパンによる抵抗帯であるが、それを見ると二月二十四日において抵抗帯を下回り、それから約一〇〇ポイントの戻りを入れたものの、今度は抵抗帯に圧迫されて再急落となった。しかし三月六日の好転以後は十三日の五〇五〇ポイントによって、上限に重くかぶさっていた抵抗帯をも突破。その後二十三日の急落でも抵抗帯の上限にとどまっており、四社の自己売買規制と公定歩合の大幅引き上げなどにより、昨今やや下げているが、これも抵抗帯の下限を下回することはちょっと考えられない。深くても五〇四〇ポイント、少し時間をかければ五〇〇〇ポイント割れでも良いと考えるところである。

ことに配当落ちを朝寄りにうめながら、後場さらに高いということは、三、九月にはきわめてめずらしいことである。これによっても大勢樂觀。新高値は八月かそれ以降になると考えれば、これからの高値では、まだ何度かの波乱は覚悟せねばならぬが、以上のことを書いて置いて、さて、ここで一番大事なことを書けば、前述のように、ここでの押しは

余り深くてはいけない。もし下限の抵抗帯をも下回るようだと…とくに遅行スパンが悪化するようだと…そのままでは新高値を期待することは出来なくなる、ということである。つまり、しょせんは二番底を割ってきて大きく突っ込んだ後、幾多の波乱を経たのちでなければ、本格的には立ち直れない。ということであって、そうならないためには、ここの押しは抵抗帯の上位でとどまらねばならない。

余りに重大なところであるだけ、あえて書き添えて置くが、それだけに計算値はまたの機会にゆずり、当面の変化日のみにとどめて置く。まず四月五日が大事であって、六日に大きく反発出来れば、対等数値でもあり、また準備構成線完了となる。次は四月十三日、二十五日、二十六日はやや大事である。

付記 これほどの大波乱にもかかわらず、痛手を受けた人がきわめてすくないのは、ひとえに大蔵省、日銀の配慮によるものであって、今後とも規制には従順になる心構えが必要だと思う。株高はインフレの原因ではなく結果ではあるが、見越し作用は軽視出来ないし、インフレ克服が政府の至上命令である以上、投資家もまた、いたずらに利益追求に焦るべきではないと思う。なお前回は、いつもと違った書き方をしたせいで、相場の変動が著しかったため、手紙せめに困りはてた。今日までに実に八百九十二通の質問がきた。読むだけでも大変で、どなたにも返事は出さなかったが、出せるはずもない。どうぞあしからず。質問は均衡表の読者としては五二三〇ポイントはなぜか…ということであったが、これは八割戻しである。

=四月三日記=

昭和 48 年 4 月 6 日 日本証券新聞掲載

2012/09/30 第 327 号

均衡表の急所(59) 一目山人

《容易の観をなすな これからも幾波乱あり》

四月三日記の今回は「楽観ながら当面重大」と題して「四社の自己売買規制と公定歩合の大幅引き上げなどにより、昨今やや下げているが、これも抵抗帯の下限を下回することはちょっと考えられない。深くても五〇四〇ポイント、少し時間をかければ五〇〇〇ポイント割れでも良いと考えるところであるが、さて、ここで一番大事なことは前述のように、ここでの押しはあまり深くてはいけない。もし下限の抵抗帯をも下回るようだと…とくに遅行スパンが悪化するようだと…そのままでは新高値を期待することは出来なくなる、ということである。つまり、しょせんは二番底を割ってきて、大きく突っ込んだ後、幾多の波乱を経た後でなければ本格的には立ち直れない、ということであって、そうならないためには、ここの押しは抵抗帯の上位でとどまらねばならない。あまりに重大なところであ

るだけ、あえて書き添えて置くが、それだけに、計算値はまたの機会にゆずり、当面の変化日のみにとどめて置く。まず四月五日が大事であって、六日に大きく反発出来れば、対等数値でもあり、また準備構成線完了となる。次は四月十三日、二十五日、六日となっているが、二十六日はやや大事である」旨を書いた。

しかし四月五日には五〇一三ポイントと深く押した。それはまだ良いとしても、六日の反発力はきわめてわずか。それもまた良いとしても翌七日の反発力もたいしたことはなく、次の立ち会いでは五〇〇〇台を割って来た。もっと時間の経過があれば五〇〇〇台割れも悪くはないが、この日ではいけない。大反動決定の日であって翌日は遅行スパンも素晴らしく悪化した。もう何も考えることはなく大きく突っ込んで幾波乱を経過しなければ、本格的に出直ることは出来ない。この期に及んで変化日を考えてはいけない。反動相場における薄商いは、決して悪いことではないが、現在のように大証券の自己売買が規制されている時においては、いわゆるじゅんかつ油の不足で、とにかく売り急ぎとなりやすい。薄商いがかえって良くないのであるが、にもかかわらず高値覚えと、インフレ期待によって玉整理は進まない。

巷間(こうかん)しきりに四三〇〇台で大底入れた、と伝えているが、今のところどうしてそんなことが考えられるのであろうか。十六日に八〇九ポイントを取った四五三九ポイントの時点、ザラバでは四五〇〇割れもあったが、それを安値に、十九日のザラバでは前の二番底四七七一ポイントに対して、均衡表というところのS点を構成している。このS点は上げ相場でも下げ相場でも後がこわい。その点から見れば、最小限四三〇九ポイント以下を、今一つ言えば四二〇八ポイントを取らねばならぬ。

二番天井に対するNTが後者であり、一番天井に対するNTは四一八三となる。すくなくとも、それらを実現しなければならぬと思うが、もちろん、今のところ、それで底入れ、という証明はない。証明の出ていない現在としては、まず四〇七〇、四〇〇〇ポイント大台割れは考えて置かねばならない。それが三七八七か、三六三九か、今からせんさくする必要はないと思うが、三三七〇ポイントを下回ることはまず有り得ないと思う。というのはどこで止まる、という証明も、どこまで下げる、という証明もまたない現在、なんといっても仕方がないことであり、書くだけ読者を迷わせることになると思う。

そんなわけで当面の変化日を書くのさえ気のひけることであるがまず五月二日、しかし、これは大した問題はない。つぎは十二日、二十三日、それから六月二十日、ということになっている。しかし六月二十日以前は、今のところ大した問題ではないかもしれないが底入れの値段、時間の証明がいつつくか。当面のことを言えば、二十五日の四三七四ポイントからの反発は三〇〇ポイントが限界である。それだけに、もしこのまま、十三日のS点を上回るようだと、底値はいちじるしく縮小決定される、ということだけは言えるが、今後もお幾波乱はある。今何を言ってもはじまらない気持ちであり、次の機会にゆずるほかないから、その場合のあとのことは今書かない。

前回にも書いたように大蔵省の相次ぐ規制によって、投資大衆の痛手も軽くすんだが、

政府としては、何はにおいてもインフレ克服が至上命令である。しかしインフレ克服はしかし容易ではない。ことに最近は賃金インフレにより悪循環過程に入りつつある。インフレ克服はしょせん不可能としても、それが困難であればあるほど、商品取引はもとより株価への風当たりも強い。あとのことはあとの問題として、まずそのことを大いに考えねばならぬと思う。相場の安いのは私はイヤであるが、それが国家、社会のために良いのだから一般投資家もまたそれに準ずることが必要だと思う。大蔵省は規制解除に相当やぶさかだと思いが、本格的な買いを考えるのは、規制が相当解除されてからのことだろう。

=五月一日記=

昭和 48 年 5 月 4 日 日本証券新聞掲載

2012/10/07 第 328 号

均衡表の急所(60) 一目山人

《底入れ観重大時点 今後もなお波乱は多い》

五月一日記の今回は「容易の観をなすな」と題して、大底入れに至る一応の計算値を書いたあとで「今のところ、それで底入れという証明はない。証明の出ている現在としてはいろいろ書いただけ読者を迷わせることになると思う。そんなわけで当面の変化日を書くのさえ気のひけることであるが、まず五月十二日、二十三日、六月二十日となっているが（均衡表の読者につぐ＝これは私が一日計算違いをしていたので、お手元で計算された十一日、二十二日、六月十九日が正しい）当面のことをいえば、四月二十五日の四三七四ポイントからの反発は三〇〇ポイントが限度である。それだけに、もしこのまま、十三日のS点を上回るようだと、底値はいちじるしく縮小決定される、ということだけはいえるが、今後もなおいく波乱はある。今何を言ってもはじまらない気持ちであり、次の機会にゆずるほかないから、S点を上回った場合のあとのことは今は書かない」旨を書いた。

その後三〇〇ポイント高でもんだあと九日の突っ込みを十日には反発、十一日には決定反動となり、かくて変化日の翌十二日強反発、それから四七七一ポイントを上げた。ついで十五日の突っ込みも十六日はたちまち決定反動となった。これで二回目の決定反動であったが、十七日公定歩合の引き上げで三二ポイント安も、十八日にはまた決定反動となった。これでわずかな間に決定反動三回の連続であるが、このことについては、いつだったか前にも一度書いた記憶があるが連続三回で大いに伸びなければひと反動入る。それでも相当やっかいな相場となりやすいが、公定歩合再引き上げ説で二十一日には急落した。

これでいよいよ再突っ込み時代に入ったわけであるが、しかし前回にも書いたように、これまでの反発が三〇〇ポイントを上回って前のS点を上回っているだけ、底値はいちじるしく縮小決定される。前にはあえて書かずに置いたが完結編の読者には、良くわかった

ことと思う。

すなわちこの場合の反動底は四五〇〇ポイント割れをもって限度とするのを常識とする。けだし波動は小さいけれども、それによって正三尊底となるからであるが、一昨四日の突っ込みがそれである。私はこれをもって、とにかく一応の底であり、戻りの強さを見るべきである旨を同人会の幹事に報告したが、昨日、今日の強反発によって、まず底入れは七、八割方決定したものと見る。むろんこれが普通の相場であれば、七、八割といわないで、底入れ決定とすべきであるが、ここではまだ問題が残っているので、それはあとで書く。

均衡表でいうところの引け新値によって、この相場を見れば、第一次の暴落が陰引け連続六本、第二次も六本、第三次はまず十本、ついで三本、今度の第四次は六本であり、しかも今日は一気に三本新値をとって陽転している。正三尊と相まって、これで大体底入れと見るわけであるが、ここで一つ考えてもらいたいことは、前回には「四月二十五日の四三七四ポイントを漠然と底であると、証明もないのに考えてはいけない」と書いたが、今まで証明付きで、底だったと、考えて良いようである。

しかし前回底と考えた向きは銘柄ではその後大きく引かれていたはずであって、四日の突っ込みはNSB平均よりも銘柄ではとくにひどいものが多かった。こうした点もよくNSB平均との関係を考えてもらいたいと思う。

なお、なにゆえに七、八割方の底入れ決定、というかといえば、まず何よりも高値の大幅三尊に対して、ここでは、いかに正三尊であるとはいっても、余りに小幅に過ぎる、ということである。ついでは、大蔵省、日銀はかりに下げ賛成ではないにしても、決して上げ賛成ではないであろう、ということであって、それがどうであれ、相場は相場だ、というのには、今のインフレ問題は余りに深刻である。三尊が小幅であるのを是認するためには、天井三尊よりもはるかに時間をかける必要がある、ということである。

天井三尊には二カ月以上を要しているが、ここでの小幅三尊は、これからNとはなっても四尊、五尊を期待しなければならぬかも知れない。七、八割底入れといっても今ただちに決してあせることはないのである。ここでの波動論をつけ加えれば、七、八割がものをいうためには戻り新値に、二、三割がものをいうのには新安値に落ちることであるが、これからも幾多波乱はある。底入れ観とはいえ重大時点でありあせることはない。

私の希望論といえば、相場が下げに下げて、やぶさかな規制解除が徹底して、それから出直れば大いに面白いのであるが、すでに七、八割方それは不可能となったようである。とすれば高い相場には当分限界である。一般者に妙味のある相場は当分こないと思う。これからの波乱をゆっくり見定めてからで十分であろう。

＝六月六日記＝

昭和 48 年 6 月 8 日 日本証券新聞掲載

《相場にはずみつく ただしなお波乱はある》

六月六日記の今回は「底入れ観の重大時点」と題して「これまでの反発が三〇〇ポイントを上回って前のS点を上回っているだけ、底値はいちじるしく縮小決定される。前にはあえて書かずに置いたが完結編の読者には、良くわかったことと思う。すなわちこの場合の反動底は四五〇〇ポイント割れをもって限界とする。けだし波動は小さいけれども、それによって正三尊底となるからであるが、一昨日の突っ込みがそれである。私はこれをもって、とにかく一応の底であり、まず底入れは七、八割方決定したものと見る。なにゆえに七、八割方の底入れ決定、というかといえば、まずなによりも高値の大幅三尊に対して、ここでは、いかに正三尊であるとはいっても、余りに小幅に過ぎる、ということである。ついでは大蔵省、日銀はかりに下げ賛成ではないにしても、決して上げ賛成ではないであろう、ということであって、それがどうであれ、相場は相場だ、というのには、今のインフレ問題は余りに深刻である。三尊が小幅であるのを是認するためには、天井三尊よりはるかに時間をかける必要がある、ということである。ここでの小幅三尊は、これからNとはなっても四尊、五尊を期待しなければならぬかも知れない。これからも幾多波乱はある。底入れ観とはいえ重大時点であり、あせることはない。高い相場には当分限界がある。一般者に妙味のある相場は当分こないと思う」旨を書いたがその後悪材料が相次いだにもかかわらず、相場は小波乱を繰り返しつつ漸次引き締めて、きょうの前場はついに四八〇〇ポイント台乗せとなってきた。

これまでの経過を見れば、六月四日の四五〇〇ポイントを三尊の安値として、九日四六三三ポイントまで反発、大引けでは十八日の四五四二ポイントまで押して、小さいながらも四度目の底入れとなったが、変化日十九日はザラバ安にとどまり、翌二十日より様変わりとなり、二十二日には四六六八ポイントと、遅行スパンも久し振りに好転、抵抗帯の下限をも突破、いよいよ本格的回復時代に入ったわけである。

その後二十五日のザラバ新高値から二十六日には四六三七ポイントと急落したが、それも一日きりで、やがて二十六日の突っ込みが決定反動となり、加速されて商いも大きくなり四七〇〇ポイント大台に乗せたが、七月四日の四七七四ポイントは六月四日からの一期に相当。五日、六日、七日と下げた。しかし、一期のあとの押しとしてはきわめて浅い方であった。この押しは都議選挙の自民党を懸念したものであったが、自民党の好調で相場は一変した。当面はそれで良いと思うが、しかし長い目で見れば、問題が全然ないわけではない。

今度の好調は、危機感から初老以上の立ち上がりが効果的だったと思うが、静かに考えて見れば、どうやら世代の変わり目にきつつあるように思われる。某庁でも戦時的経験のある五十歳以上と、それのない四十歳以下では意見が大きくくい違ってくると思うが、次

の世代の人々を、いかに教養し、いかに認識せしめるかが、これからの重大な政治課題だ
と思う。

もちろんこれは、相場にとっては極めて大局的な問題であって、取りあえず参院選挙待
ちであるが、当面のところ、大きくかぶさっていた抵抗帯上限の四八〇〇ポイントを突破
した以上、これまで以上に相場にははずみがつくはずである。

計算値を見ると、さし当たり四八六〇ポイント台、つぎが五〇四八、最後が五一七四ポ
イントであるが、これは相当の天井となる計算値であるだけ、四八六〇台のモミを経て、
一段高に入るとしても、五〇〇〇大台からやや深押しがはいるであろう。もっとも四八六
〇台（きょうの大引けはすでに実現）から深押しがはいて、五度目の底入れを見れば、
天井値段は大きく変わってくるが、それは次の機会にゆずるとして、当面の変化日は、近
くは七月十四日、二十四日、遠くは八月二十一日となっているが、しばらくの間の抵抗帯
は上限が四八〇〇、下限が四六〇〇ポイントとなっている。今後の深押しといっても、せ
いぜい四七七〇ポイント前後であろう。

もちろんまだ昨年のような大相場にはならない。最近均衡表完結編の読者にも、だいぶ
あせりが出ているようであるが、小相場の波乱相場をあせると、とかく失敗しやすい。あ
せらずに出後れているダイハツ、リッカーをゆっくりアク目ねらいはどうかと思うが…。
＝七月十一日＝

昭和 48 年 7 月 13 日 日本証券新聞掲載

2012/10/21 第 330 号

均衡表の急所(62) 一目山人

《この底を見定めて その後の反発力が重大》

七月十一日記の今回は「相場にははずみつく」と題して「その後悪材料が相次いだにもか
かわらず、相場は小波乱を繰り返しつつ、漸次引き締めて、今日の前場はついに四八〇〇
ポイント台乗せとなってきた。これまでの経過を見れば、六月四日の四五〇〇ポイントを
三尊の安値として、九日四六三三ポイントまで反発、大引けでは十八日の四五四二ポイン
トまで押し、小さいながら四度目の底入れとなったが、二十日より様変わりとなり、二
十二日には四六六八ポイントと、遅行スパンも久し振りに好転、抵抗帯の下限をも突破、
いよいよ本格的回復時代に入った。その後、二十五日のザラバ新高値から二十六日には四
六三七ポイントと急落したが、やがてそれが決定反動となり、加速されて商いも大きくな
り、四七〇〇ポイント大台に乗せた。七月四日の四七七四ポイントは六月四日からの一期
に相当。当面のところ大きくかぶさっていた抵抗帯上限の四八〇〇ポイントを突破した以
上、これまで以上に相場にははずみがつくはず。計算値を見ると、さし当たり四八六〇ポ

イント台、つぎが五〇四八、最後が五一七四ポイントだが、これは相当の天井となる計算値であるだけ、四八六〇台のモミを経て一段高に入るとしても、五〇〇〇大台からやや深押しがはいるであろう。当面の変化日は、近くは七月十四日、二十四日、遠くは八月二十一日。今後の深押しといっても、せいぜい四七七〇ポイント前後であろう」旨を書いた。

その後四八六〇台は一気に突破、十四日、二十四日も延長されたが、二十七日には五一二三ポイントの高値をつけた。前には書かなかったが、この日は一期の次の変化日であった（完結編の読者にはわかったはず）。それから反動を入れて、一節の八月六日には四九四六ポイントと五〇〇〇台を割ってきた。

少し戻りを入れて、十一日には四九〇一ポイントまで下げて今日に至っているが、四六三七ポイント以来好転した一節と一期の遅行スパンも、一節のそれは、三月一日に悪化。二節のそれは八日に一期のそれは十四日に悪化してきた。その下げでも相場はいかにも強張っているが、この強張りは必ずしも良くはない。

要するに、インフレ利益の先取りをしているわけであるが、大局的に見れば、インフレ利益に持続性はない。一、二期のうちにアトからコストインフレが追っかけてくる。インフレ克服は政府の至上命令であり、刻下のさし迫った急務である。供給不足の物価を下げることは容易ではないが、株式までここで余り上げることは良いことではない。

仮に秋相場から新高値に買い進まれることがあったとしても、その高値が久しく保てる性質のものではない。かえって反動を大ならしめるものと思うので、今の私は、大蔵省の期待に添うような株価でありたいと念じている。

従って当面の相場について、余り細かいことは書きたくないが、もちろん、一部に伝えられているような極端な悲観論には今のところ組みしようとは思わない。当面の計算値は、六日の安値をE点とする四七七〇ポイントが限度であるまいか。今一段の突っ込みがあり、それが公定歩合の大幅引き上げと、預金準備率の大幅再引き上げ、あるいは下旬に出るかもしれない輸出規制などと時を前後すれば、そこから一応の反発に入ると見て良いであろう。

もし四七七〇ポイント前後でとまれば、それは均衡表にいうところのS点に相当する。そうすれば前々から書いてきたように、やや大相場ともなり得る。新高値への期待もかけられるわけであるが、今一部の人がいっている極端な悲観論に組みするとしても、とにかくこの五尊底からの戻りを見定めてからのことだと思う。

ところで当面の変化日としては、前に書いた八月二十一日はすでに解消。八月二十七日が重大となってきた。次は九月三日、四日、十四日となっているが、当面一番関心の深い問題点は、この下げ相場が果たしてどこで底入れするか、ということである。

政府もテレビもラジオも、異常の物価高を宣伝し過ぎる。それによって強い対策を承認させようというのかも知れないが、今は余りにも重大な事態である。断固たる対策を行ってから物価高にふれてもらいたいと思う。物価高のたびに株への買い物も集中しつつある当今であるから一。

=八月十四日=

昭和 48 年 8 月 18 日 日本証券新聞掲載

2012/10/28 第 331 号

均衡表の急所(63) 一目山人

《底はまだきまらぬ しばらく容易の観なすな》

八月十四日記の前は「この底を見定めて」と題して「七月二十七日の変化日に五一二三ポイントの高値をつけ、それから反動を入れて、八月六日には五〇〇〇台を割ってきた。十一日には四九〇一ポイントまで下げて今日に至っている。すでに遅行スパンも悪化。この下げでも相場はいかにも強張っているが、この強張りは良くない。要するにインフレ利益の先取りをしているわけであるが、大局的に見れば、インフレ利益に永続性はない。インフレ克服は政府の至上命令であり、刻下のさし迫った急務であって、株式まで余り上げることは良いことではない。かりに秋相場から買い進まれることがあったとしても、その高値が久しく保てる性質のものではない。かえって反動を大ならしめるものと思うので、今の私は、大蔵省の期待に添うような株価でありたいと念じている」とした。

さらに「当面の計算値は六日安値をE点とする四七七〇ポイントが限界ではないか。今一段の突っ込みがあり、それが公定歩合と預金準備率引き上げなどと時を前後すれば、そこから一応の反発に入ると見てよいであろう。もし四七七〇前後でとまれば、均衡表にいうところのS点に相当する。もしそうなればやや大相場ともなり得る。今一部の人がいっている極端な悲観論に組みすとしても、とにかくこの底からの戻りを見定めてからのことだと思う。当面の変化日は八月二十七日、九月三日、四日、十四日となっているが、当面一番関心の深い問題点は、この下げ相場が果たしてどこで底入れするか、ということである」むねを書いた。

その後の相場で一番良くなかったことは、いぜんとして、とかく強張ったことである。ことに二十日の四八二八、二十七日の四八二九ポイントからの二回にわたる戻しが悪い。なぜかといえばこの戻りによって、とかく底入れ観による強気がましたこともさることながら、なによりもS点構成のためには、時間がかかり過ぎたことがいけない。前にも書いた重大な変化日八月二十七日までに、S点構成なれば構成しなければならないところであった。

その理由は、均衡表読者にはカンタンにわかったはずであるが、ここで時間がかかることは、先行スパンによる抵抗帯の圧迫が強化される。八月二十三日に上限を切り、九月四日に下限をも割ってきた。これがためS点四七七〇どころには、少しも支えることが出来なかったわけであるが、なにぶんにも公定歩合-%の引き上げを行なった二十九日には三

十日をふくめて五〇ポイント以上の反騰を見せた。むしろ不謹慎、とでもいうべきものであったが、銘柄ではずいぶん悪化したもの、ことに均衡表と遅行スパンの良くないものが多くなってきたのである。かくて九月三日から薄商いの下げに入り、商品相場の暴落など入れて、六日には四六五七ポイント、ザラバでは四六三七までであった。

ここでの計算値NT四六六三ポイントを取れば一応反発を入れ得るわけであって、七日、八日と反発、六日の引けより七五ポイント戻してきた。当面の問題は、このはなどの辺まで戻し得るかであるが、現在から九月中旬末ごろまでの抵抗帯下限は四八四〇ポイントである。しかしなにぶんにも薄商いで下げた相場であり、薄商いで戻している相場である。大商いで下げる相場はコワく、薄商いはコワくない、というのが定石であるが、この場合の薄商いは高値玉が整理されない。

ことに規制相次いで売り玉が建てにくいため、現物商いが主となって、なかなか玉整理が進まないばかりか、相場が本格的な下げとなれば、きわめてやっかいである。この戻りにしても、戻りは大衆に買わせて、逃げようとする玉は極めて多いはずである。かりにこの戻りがなお数日戻るとしても、抵抗帯下限を突破することは容易でないばかりでなく、おそらく八月二十日の四八二八までも無理であろう。かりに一五五ポイントの戻しとすれば、四八一二ということになるが、果たしてどうなるか。

前回のサブタイトルにも書いたように、この戻りが、中勢的にも大勢的にも極めて重大であるだけ、今の私としては、余りこまかいことを書かないで、ゆっくり相場の経過を見定めたいと思っている。むろんそれは、すでにS点が構成されない以上、一般的にいえば買い場をねらうためではなく、どこで大きな底を入れるかを、大局的に見定めんとするものであるが、商品相場の再活躍と、九月決算の好調に期待する向きもすくなくないようである。それだけに時に何かをあおる相場がないとはいえないが、一般者の介入し得るものではないばかりでなく、玄人がうまく逃げられるほどの相場でもないと思う。この高金利で、この規制では商いの増加は相場が下げない限り、容易に期待し難い。

ここで相場をあおれば、それだけ高値波乱の時間がかかって、アトは一層やっかいとなる。相場がここまで押し迫っては、やはり規制解除が次々に出されて、新規まき直し、ということが必要なのではないだろうか。当面の相場の計算値は、NTの次は八月二十日をE点とする四五三三であるが、そこまで行つては、もはや多くをいう必要はないであろう。

とくにこれからは、計算値を変化日が重大であるが、引かれ玉をかかえたまま、変化日を待たれては困るので、しばらくそれは書かないことにする。ただ底はまだきまらぬというほかない。とくにこれからは人気の動きようもはげしいと思うので、読者諸賢は、動ようしないよう、十分ご研究ください。私の記憶は正確ではないが、この日本証券新聞四十七年新年号の私の記事を参照してください。

＝九月九日記＝

昭和 48 年 9 月 11 日 日本証券新聞掲載

《一度吹き切っても 大局的について行けぬ》

九月九日記の今回は「底はまだきまらぬ」と題して「その後の相場が一番良くなかったことは、いぜんとして、とかく強張ったことである。ことに二十日の四八二八、二十七日の四八二九ポイントからの二回にわたる戻しが悪い。なぜかといえば、この戻りによって、とかく強気がましたこともさることながら、なによりもS点構成のためには、時間がかかり過ぎたことがいけない。先行スパンによる抵抗帯の圧迫が強化されるからであるが、公定歩合-%の引き上げを行なった二十九日には、三十日をふくめて、五〇ポイント以上の反騰を見せた。むしろ不謹慎、とでもいうべきもので、銘柄ではずいぶん悪化したものが多い。

かくて九月三日から薄商いの下げに入り、六日には四六五七ポイント。ここでの計算値NT四六六三を取れば、一応反発を入れ得るわけであって、すでに戻りを入れているが、九月中旬までの抵抗帯下限は四八四〇ポイントである。なにぶんにも薄商いで下げ、戻した相場である。この戻りに多くは期待されぬが、この戻りが大局的にも、中勢的にもきわめて重大であって、一般的にいえば買い場をねらうためではなく、どこで大きな底を入れるかを大局的に見定めんとしている私である。この高金利で、この規制では、商いの増加は相場が下げない限り容易に期待し難い。

相場がここまで押し迫っては、やはり規制解除が次々に出されて、新規まき直し、ということが必要なのではないだろうか。当面の計算値は四五三三であるが、そこまで行つては、もはや多くをいう必要はないであろう」むねを書いたが、八日の戻り高値四七三二ポイントから下げてきて、十一日には、八日を決定反動として大きく突っ込み、以来四五三三を一気に突破、二十一日の四三九三ポイントまで下げた。いかにも良くない相場であるが、しかしこの二十一日は戻り高値からの一期に当たり、しかもザラバの対等数値である。

ここからの戻りは二七五ポイントを限度とすることは、二十二日に同人会に報告しておいたが、十月四日のザラバでは完全にそれを取った。この日もまた小さな対等数値であり、反動に入ったわけであるが、これによって、つまりこの二七五の波動が限定波動となって、その後の動向にかなりだいじなやくわりを持つことになった。その後規制緩和はかえってウリものをしい十三日の四四三七まで一節の反動を入れたが、ついに限定波動下限を切ることなく、今日までの戻りを入れている。

この戻りに入った十月十五日は五一二三ポイント以来、極めてだいじな変化日であったが、もし大局的な大底入れを直ちに実現する相場なれば、二七五を取った以上この十月十五日までに、下限を切っていなければならぬのである。

ことに限定波動が名義書き換えの空白時における反発である以上、株の還流以後におけるこの反発は注目に値するし、今日の後場引けは恐らく遅行スパンも好転するであろうの

で、この二十三日の相場は特にだいじである。明二十四日の変化日が延長されれば、上限を突破して、一度吹き切る、ということを考えて置かねばならぬ。むろん、この限定はいつまでも生きているから、下限を下回れば大いに弱気になるべきであるが、今のところ上限突破が問題である。

銘柄別に見ても、一度は買えると見られるものが大分多くなってきた。問題は、吹き切った場合、どこまで行くか、いつまで続くかであるが、さしあたり四八五〇、四八九三ポイントを見て置く必要がある。時間的には、どのくらいの寿命があるか、やや長期にわたるかも知れないが、大局的に見れば、このまま上げ一辺倒の相場ではない。やはり来年以降の大きな反動を考えないわけには行かないが、差し当たり十一月十四日の変化日を見る必要がある。ウリ方として特に注意すべきは遅行スパンの逆転待ちであるが、これから吹き切るとしても、この相場には多分に人為的なものがあるだけ、大局観としては一般大衆が買って出るのが果たして良いか、上げ相場の最後につかまる可能性もあるので、むしろ絶好の逃げ場となるかもしれない。ということを書いて次回にゆずりたいと思う。

なお問題のデノミについて一言しておく、今デノミの必要性は、私にはどうしてもわからないが、やるとして、やれる時期はインフレ終息宣言でなければならぬ。だとすれば、デノミが必ずしもカイ材料にはならない。なるとしても一時的であって、その後は相当期間取り引きの不振、買ったあとの不況を覚悟せねばならない。デノミは実施する前までのオモチャであって、今からデノミを買って出ても、けっきょく息切れがすると思う。前回、記憶は正確ではないが、と書いたのは、四十七年一月二十八日の記事でありました、あしからず。

＝十月二十三日記＝

昭和 48 年 10 月 25 日 日本証券新聞掲載

2012/11/11 第 333 号

均衡表の急所(65) 一目山人

《底入れ容易ならず 当分戻りに迷わぬこと》

十月二十三日記の今回は「一度吹き切っても」と題して「九月八日の戻り高値から一気に下げて、二十一日の四三九三ポイントまで。しかしこの二十一日は戻り高値からの一期。しかもザラバの対等数値である。ここからの戻りは、二七五ポイントを限度とすることは同人会に報告したが、十月四日のザラバで完全にそれを取った。これにより、二七五の波動が限定波動となって、今後に重大な役割を持つ事になったが、規制緩和はかえって売り物を誘い、十三日の四四三七まで一筋の反動を入れた。しかしついに限定波動下限を切ることなく、今日までの戻りを入れている。

十月十五日が極めて重大な変化日であるだけ、大局的な大底入れを直ちに実現するとすれば、この日までに下限を下回っていなければならぬ。しかもこの反発で、二十三日の相場は特に大事であり、一度吹き切る。吹き切った場合、どこまで行くか、いつまで続くかであって、さしあたり四八五〇、四八九三ポイントを見て置く必要があるが、時間的にはやや長期にわたるかも知れない。大局的に見れば、このまま上げ一辺倒の相場ではない。しょせん大きな反動を考えねばならぬが、差し当たり十一月十四日の変化日を見る必要がある。

ウリ方として特に注意すべきは遅行スパンの逆転待ちであるが、これから吹き切るとしても、この相場には多分に人為的なものがあるだけ、大局観としては、一般大衆が買って出るのが果たして良いか、最後につかまる可能性もあるので、むしろ絶好の逃げ場となるかも知れない」旨を書いた。

その後十月二十五日には四六六七ポイントと十月三日の戻り高値を上回り、六五の押しを入れて、三十日四七〇二ポイントの高値をつけた。かくては当然四八〇〇台乗せとならなければならぬところであり、一般的にも特に強い引け値三本新値となったので、資源株の奔騰と共に人気は著しく強くなって来たが、何分にも四七〇二でも、抵抗帯上限に圧迫されており、十一月一日の変化日には反動的に四六三四ポイントとなった。五日の対等数値に戻して、六日には四六一六と突っ込み、また戻して八日には四六六〇となった。小幅ではあるが、戻しが早く、しかもこの戻りには資源株、化学株の買いあおりによる割りにはNSB平均は伸びない。九日には一節の遅行スパンが悪化して、いよいよ四八〇〇ポイント台には縁切れとなり、しかも小幅ながら三尊となった。十日の四五九五が急落商況となり、十一日には均衡表も逆転、最も重大な十一月十四日を控えての十三日には四四二八と、限定波動下限の四四三七をも下回って来た。

これで完全なコワレ相場であるが、カイ気が強く、変化日には常に戻して、一層相場を悪くしており、四月二十五日の安値四三七四ポイントをも下回ってきた。戻りやすいだけ、極めて悪性ではあるが、ただこの下げのキッカケが石油問題であるだけ、かねて私が考えていたほどの、長期にわたる大暴落は無く済むかも知れない、と今のところ思っている。昨年一月二十六日記の本紙均衡表の急所では「これは今からいう必要はないが、来年の大天井はおそらく向こう七、八年の大天井となるものであろう」と書いたが、今年の高値が十分でなかったことと相まって、石油問題という悪材料でやや素直に下げただけ、大底入れは大いに早まるかと思う。

しかし何分にもインフレマネーの使い道は、今のところ株式以外にはない。土地の値上がりが一応止まった以上、今のところ、それらに向かって資金が株式に向かっており、今後も当分の間、ますますそうであろう。一方、石油問題でインフレの抑制はますます困難になってきつつあるだけ、相場が少し下げれば、たちまちカイものがあるであろう。一方、規制緩和も相次いで行われているので、今後も相場は戻りが目立つことになるであろうが、それだけに玉整理は一層すすまず、引かれ玉は多くなるばかりで、当分の間、相

場はますます悪化するばかりであろう。上げ相場と違って下げ相場に対して、しかも新聞紙上で余り弱いことは書きたくないし、今新安値になったばかりである。

先の長いことをこの際書く必要はないが、戻りがいくら強くても強ければ強いただけ面白くない。いわんや物価凍結ともなれば、インフレを買い切ったあとが厄介であるので、この際は、いついくら戻しても、規制が全面解除されても容易に大底のはいる相場ではないということにとどめて、計算値も変化日も当面のもののみにして置こう。

計算値は、四一七一、四〇四五ポイント。変化日は、十二月一日、十日、十二日、二十一日であるが、特に大事なのは来春一月下旬である。これからの反動時代こそ、波乱が大きいだけ、一層均衡表の必要性が大きい。とくに先行スパンによる抵抗帯の戻り限界（当分の間上限四六四五、下限四五一〇）遅行スパンによる利食い場、ウリ場の研究が銘柄別にも特に大事。当分なまやさしいことではないので、大いに勉強してほしいと思う。

＝十一月二十三日記＝

昭和 48 年 11 月 27 日 日本証券新聞掲載

2012/11/18 第 334 号

均衡表の急所(66) 一目山人

《容易の観なし難し 大底はインフレ克服時》

十一月二十三日記の前回は「底入れ容易ならず、当分戻りに迷わぬこと」と題して「九日には一節の遅行スパンが悪化して、いよいよ四八〇〇ポイント台には縁切れとなり、しかも小幅ながら三尊となった。十一日には均衡表も逆転、十三日には限定波動下限をも下回って来た。これで完全なコワレ相場であるが、カイ気が強く、戻りやすいだけ、極めて悪性であるが、ただこの下げキッカケが石油問題であるだけ、かねて私が考えていたほどの、長期に渡る大暴落がなくて済むかも知れない。石油問題という悪材料でやや素直に下げただけ、大底入れは大いに早まるかと思う。しかしインフレマネーは株式に向っており、今後も当分の間、ますますそうであろう。一方、石油問題でインフレの抑制はますます困難、相場が少し下がれば、たちまちカイもののはいる。

一方、規制緩和も相次いで行われるので、今後も相場は戻りが目立つことになるであろうが、それだけに玉整理は一層すすまず、引かれ玉は多くなるばかりで、当分の間、相場はますます悪化するばかり。相場は今新安値になったばかりで、余り弱いことは書きたくないし、先の長いことをこの際書く必要はないが、戻りがいくら強くても、強ければ強いただけ面白くない。いわんや物価凍結ともなれば、インフレを買い切ったあとが厄介であるので、この際はいついくら戻しても、容易に底のはいる相場ではない。計算値は、四一七一、四〇四五ポイント、変化日は、十二月一日、十日、十二日、二十一日であるが、特

に重大なのは、来春一月下旬である。特に先行スパンによる抵抗帯の戻り限界は、当分の間上限四六四五、下限四五一〇である」旨を書いたが、その後二十四日、六日と戻して、二十七日にはわずかな配当落ちを入れて、四二八八ポイントと新安値となった。

新安値となれば、たちまち戻す、という習性のまま、十二月三日には、四五一〇ポイントまで反発したが、これはだいたいにおいて最後のS点であり、ことに抵抗帯の戻り下限の四五一〇に突き当たったところである。

均衡表的には、だれもが見ても、これが戻りの限界であって、翌四日には、四四四七と下げてきた。日足で見ればこれは非常に悪い相場であって、これによって、いよいよ相場のコワレに入る最終的的大幅三尊となったわけである。爾来一本に下げて、十三日には四〇二三と、計算値四〇四五を下回ってきた。規制緩和もわずかに朝高のみにとどまり、ひところの反発力は見られなかったが、十八日の三九五八を底に二十日には、三木特使の好報を入れて、猛烈な急反発となった。

しかし私は、この急反発を見てなぜかくも買い急ぐのか、全く理解に苦しんだ。私が貧乏だから、金持ちの心理がわからないのかも知れないが、しかし遅行スパン一つを見ただけでも、相場は悪いにきまっているのに、どうしてかくも買い焦るのか。全く不思議と言う外ないが、前にも書いたようにすぐ戻して、いたずらに買い玉のみを増加して、相場をいよいよ悪性化する。やはり容易に大底のはいる相場でないからであろう。

大幅反発の翌二十一日がたまたま変化日であり、ザラバ高値となって、今日二十四日は四〇二八と急落してきた。NSBだけ見ていると、いかにも強い戻りのアトの押しであり、これを二番底としての、再反発を希望している向きは多いと思うが、かりにそうであったとしても、なんの意味もない変化であることは、銘柄別を見ればわかることであろう。

要するに今日までの相場は、自家撞(どう)着と言うか、自家中毒的なものであって、たべればたべるほど体質が悪化するばかりである。しばらく断食療法か、下剤をかける必要があるのではないか。二十日の急反発でも、要するに四〇四五以下を実現したからのことであって、ただそれだけのことであると、私は思っている。新春を控えているので、ここでもまた、あまり弱いことは書きたくないが、当面の計算値は、三六六三、三六六一であるがもちろんそれで大底入れとは考えられない。

しかし、その辺ではまた相当の反発を入れるであろうが、当面の変化日は、一月七日、九日、十六日、最も大事なのは二十五日、二十八日であってそこまでの経過を見れば、中勢観もハッキリする。

石油の供給が緩和されれば、相場は一時的には、急に買い進まれるかも知れないが、国際的にも、とくに日本は、そんな生やさしいものではないと思う。石油が足りても足りないでも、インフレ克服は容易でないが、真のインフレ克服に何年かかるか。すでにコストインフレ時代であるから、インフレ征伐までは、相場の大底入れは容易ではあるまい。小、中勢観は来春また。

＝十二月二十四日記＝

2012/11/25 第 335 号

均衡表の急所(67) 一目山人

《当分続く中間反騰 一、二年でインフレ克服》

十二月二十四日記の今回は「容易の観なし難し、大底はインフレ克服時」と題して「十二月十八日の三九五八ポイントを底に、二十日は、三木特使の好報を入れて、猛烈な急反発となった。どうしてかくも買い焦るのか、全く不思議という外ないが、前にも書いたように新安値ごとに直ぐ戻して、いたずらに買い玉のみを増加して、相場をいよいよ悪性化する。やはり容易に大底のはいる相場ではないからであろう。大幅反発の翌二十一日がたまたま変化日であり、ザラバ高値となって二十四日は四〇二八と急落してきた。NSB平均だけ見ていると、いかにも強い戻りのアトの押しであり、これを二番底としての再反発を希望している向きは多いと思うが、そうであったとしても、なんの意味もない変化であることは、銘柄別を見ればわかるであろう。当面の下値計算三六六三であるが、もちろんこれで大底入れとは考えられない。最も大事な変化日は一月二十八日であって、そこまでの経過を見れば中勢観もハッキリする。石油の供給が緩和されれば、相場は急に買い進まれるかも知れないが、石油が足りても足りないでも、インフレ克服は容易ではない。そのインフレ征伐に何年かかるか、それまでは相場の大底入れは容易であるまい。小、中勢観は来春また」と書いたが、これを書く前に、本紙の新年号記事は締め切られていたので、私の記事も新年号まがいには大勢観を書いて、小、中勢観は新春に、としたわけである。

その後、石油の供給緩和が予想をはるかに越えて、大納会は四三〇六と好調に引けた。これによって相場は中間反騰時代に入ったわけであって、アトはその証明を待つだけであったが、新春数日の下げによって、それが決定された。私の方では一目均衡表の読者に、同人会を造り、勉強と相場を教えてきたが、それは中央に偏り過ぎている。奥州、北海道、九州、沖縄の人々は参加できないので、今春から同人会誌を発行したが、その一月十三日記にNSB平均を書いた。均衡表の急所としては、最も大事なところであるだけ、その一端を要約してここに書くことにしよう。

「大勢観としてのNSB平均は、容易に楽観出来ないが、今年は大勢観上の大底入れは出来ないかも知れない。ただし昭和四十八年の相場が、天井打ちではない、ということが、今、来年の相場で証明されれば、話は別であって、それこそ読者が生涯に二度とない好機に直面するわけであるが、容易に大底を入れがたい相場は、とかく中間反騰をしやすい。今春に入って、連日下げて、一月十日の四一五〇は非常に大事で、真に悪い相場なれば、一節構成のため、十一日、十二日と急落すべきところであるが、反対に四二〇一と反発。これで証明済み、というのは、すでに均衡表も好転しており、遅行スパンの好転も迫り、

二節の準備構成ともなっているからであって、抵抗帯上限の四四〇〇も問題はない」と。

その後の二十八日の変化日に四五三六の高値をつけてひと押し入れているが、この中間反騰は、要するにインフレ克服は容易でない。インフレが克服されないとすれば現在の株価はなお十分買えるということであろう。たしかに従来からの考え方からすれば、インフレ抑制は不可能に近いが、今や悪性インフレの一步手前まできている。是が非でも、克服しなければならぬ問題で、政府も本腰になっているので、短期決戦も可能だと思う。

六次利上げも五次利上げの時から予定されていたはずであり、昨年末の異常な物価暴騰は、あれで天井打ちと見て、国民大衆が買い控えれば、今度は売り急ぎの機運ともなりやすい。春闘までに間に合うか否かが、重大な分岐点ではあるが、企業一般としても、自ら自由経済を放棄するような愚はあえてしないであろう。

もちろん物価を大きく下げることが不可能であろうが、多年にわたる高度経済成長政策も方向転換をする。石油高と相まって、一般的に見た下期以降の業績低下は必至だと思う。選挙を控えているせいか、株高はなんともいわれていないが、しかしこの中間反騰も内容的には必ずしも良い傾向ではない。三日か五日かで、銘柄の流れが行きつ戻りつしている点や、インフレを買って、デノミを買うというような矛盾を見ても、どうも感心出来ない。

NSB平均を見れば、すでに大体は届いている。この上買っても四七〇〇ポイントがこの中間反騰の限界であるが、その前に二〇〇ポイント以上の押しがあっても不思議はない。当面の変化日は、二月四日、八日、十三日、二十五日となっているが、抵抗帯の上限は四三四〇、下限は四二〇〇であるから、当分本格的、一般的ウリ時代はこないはずであるが、しかしインフレ克服は今年一年に完了するものではない。

=二月二日記=

昭和 49 年 2 月 5 日 日本証券新聞掲載

2012/12/02 第 336 号

均衡表の急所(68) 一目山人

《なお幾波動がある まだハラはキメられぬ》

二月二日記の今回は「当分続く中間反騰」と題して「その後二十八日の変化日に四五三六ポイントの高値をつけてひと押し入れているが、この中間反騰は、要するにインフレ克服は容易ではない。インフレが克服されないとすれば、現在の株価はなお十分買えるということであろう。インフレ抑制は不可能に近いが、今や悪性インフレの一步手前まできている。是が非でも、克服しなければならぬ問題であるが、春闘までに間に合うか否か。もちろん物価を大きく下げることが不可能であろうが、多年にわたる高度経済成長政策も方向転換をする。石油高とあいまって、一般的に見た下期以降の業績低下は必至だと思う。

ことにこの中間反騰も内容的には、必ずしも良い傾向ではない。三日か五日で、銘柄の流れが行きつ戻りつしている点や、インフレを買って、デノミを買うというような矛盾を見ても、どうも感心出来ない。NSB平均を見れば、すでに大体値は届いている。この上買っても四七〇〇ポイントが、中間反騰の限界であるが、その前に二〇〇ポイント以上の押しがあっても不思議はない。当面の変化日は、十二、十三日、二十五日となっている」旨を書いた。

その後、二月九日は四六〇五ポイントまで買われた。休日明けの十二日ザラバ高値を残して反落に入ったが、この段階では四七〇〇はおろか、E計算値四六四四ポイントも取らないで、反落してきたので、二月十三日に書いた同人会誌のNSB平均では「大事な変化日に変化した相場であるから、当然一月三十一日の四五〇〇ポイント割れは下回ると見るべきであり、十三日から一節後の相場いかんが、一期の遅行スパン上、大事だということになる。それまでは予想をしないで、静かに成り行きを見るべきであるが、しかしこの波動は、小さいながら七波動後の押しである。最も深くても四三〇〇台どまりであろう。ただし、そこまで下げないでも、この下げが一波動か、三波動かで、その後のNSB平均の見方は変わってくるが、この押しが八波動であるだけ、今一度戻り高値を取る可能性もある」旨を書いた。

その後二十三日の四五〇〇台割れまでに十日を超えるに至った。余りにも下げ渋っていたが、このために一期の遅行スパンが実線に接触、二十五日の変化日から奔騰して、今日前場引きは四六二三ポイントと戻り新値である。努力相場がようやく実を結びつつあるように考えられるが、しかし前の押しが最小限に浅かっただけ、この戻り新値も、これから新しい出発—というわけには行かない。四七〇〇ポイントを幾ら超し得るかどうか。しばらく高張りをつづける、という程度であるが、当面、両三日中からの押しは、注目は要するものの、たいしたものではないであろう。しかし、努力相場が続いて、もし三月十三日の変化日までに高値が続けば、その後の反動は、相当深くなるものと考えねばならぬ。

もちろん、そうした場合といえども、それによって相場の大勢が決定する、というものではない。私が最近とくに問題としているのは、この相場が、はたして中間反騰であるか、それとも中段波動であるか、ということであるが、由来私は、相場観が主であって、材料観は軽視しないだけである。

相場観のみに立てば、この相場はいかにも強過ぎる。かりにこれから後に、相当の深押しがあっても、それで終わりになるべき相場ではない。なお幾波動を繰り返すべきものと考えられるが、そうだとすれば、中間反騰としては時間がかかり過ぎる。いきおい、一応は中段波動と考えざるを得ないが、問題は努力相場の程度、その実力いかにあると思う。どう考えても、この相場が、相場の自然の流れに従っているものとは思えないが、しかし、かりに努力相場としても、ここまで盛り上げてきた力は無視出来ない。

一体、証券界は、このインフレ克服は、しょせん不可能のものと考えているのであろうか、というと、それはともかくとして、少し長い目を見て、平均買いのつもりで、ウリものさ

えあれば買うのだ、ということのようである。投信もそのようであるが、インフレ問題はとにかくとして、郵貯の目ペリが現実の問題となっているほどの時代である。インフレが克服されればされるほど、かえって、インフレマネーは株式に向かわざるを得ないかも知れない。しかし、いつ樂觀出来るか否か、その時になって見なければわからない再評価や、デノミを買うようでは、まだ本当の力でも流れでもない。

私は結論を急ぐ必要はない。ゆっくり経過を見定めて、自然に結論の出るのを待つことが良い、と思っている。けだし、中段波動と確定するのは、まだ手間がかかるが、中間反騰が長期にわたり過ぎて、それでも中間反騰だった、ということになれば、それこそあとには非常に厄介なことになるからである。

＝三月四日記＝

昭和 49 年 3 月 6 日 日本証券新聞掲載

2012/12/09 第 337 号

均衡表の急所(69) 一目山人

《相場は大きく好転 中勢観の決定は急がぬ》

三月四日記の今回は「なお幾波乱がある。まだハラはキメられぬ」と題して「その後予定した四五〇〇ポイント割れまでに十日を超えるに至った。余りにも下げ渋っていたが、このために一期の遅行スパンが実線に接触、二十五日の変化日から奔騰して今日前場引きは四六二三ポイントと戻り新値であり、予定通り九波動。努力相場がようやく実を結びつつあるように考えられるが、しかし前の押しが最小限に浅かっただけ、この戻り新値も、これから新しい出発というわけには行かない。当面両三日中からの押しは、注目は要するものの、たいしたものではないであろう。しかし、努力相場が続いても、もし三月十三日の変化日までに高値が続けば、その後の反動は、相当深くなるものと考えねばならぬ。相場観のみに立てば、この相場はいかにも強過ぎる。これから後に相当の深押しがあっても、それで終わる相場ではなく、なお幾波乱が考えられるが、そうだとすれば、中間反騰としては、時間がかかり過ぎる。どう考えても、この相場が、相場の自然の流れに従っているものとは思えないが、私は結論を急ぐ必要はない。ゆっくり経過を見定めて、自然に結論の出るのを待つことが良い、と思っている。けだし中段波動と確定するのは、まだ手間がかかる」旨を書いた。

その後三月四日引けの四六一〇ポイントを高値として、漸落の一途をたどり、二節の変化日には四四〇〇割れの四三九〇ポイントとなってしまった。このことは非常に大事であって、三月十三日記の同人会誌にも書いたように、ここで今一度反発しても、すでにM波動（昔は毛抜きといった）となった以上、すくなくともE点では下げ止まらない、というべきところであった。

しかし、その当日が一波動としては最も大事な変化日だったためか折りから二十七日の配当二七ポイントを落としながら、三十日までに四四七三ポイントまで反発してきた。名義書き換えの品薄ねらいにしても、M波動のアトとしては強きに過ぎる。いかなる人でも相場の変化を考えざるを得ないところであるが、事実、この三月三十日に終わる週間均衡表では、実線ですら、四三八九ポイント寄りの、四四七三ポイント引けという陽線で、その前週の四四四六寄り、四四〇三ポイントの陰線を完全に外ばらみしている。

この時点では極めて重大な変化であって、これで相場の方向は決定したわけであるが、しかも、その後四月四日、日足で四連陰を入れて、四四〇三ポイントまで突っ込んだ。これは一期の変化日に相当するので、真に下げる相場であれば、その翌日は暴落すべきはずであるが、すでに三月三十日において方向は決定しているので、これが突っ込み安値となって、たちまち反発。そこで四月十二日の前場では、同人会誌に「もちあい上放れの決定反動」として書いたが、この決定反動は、きわめて有力なもので、その後十五日の四五七三ポイントまで反発。これは計算値E点であったことと、折りからの対等数値により、昨日は約四〇ポイントの押しを入れたが、もちろんこんなことは問題ではない。

私としては、かねてからいっている通り、決して予想的なことは書かない。相場そのものが、明確に証明してくれるのを待つわけであるが、この変化によって、すくなくとも当分は安心買いであると思う。これによって、目先はもちろん、小勢的にも安心しておれる。

ただ、大勢観的には、容易に強気になれないので、今のところ、とくに中勢観が問題である。というのは、大勢観はすくなくとも五、七手。中勢観は二、三手であるが、昨年一月天井からの中勢観が、ここで本格的カイとなるか否か。すなわち、この反騰相場が、中間反騰でなく、中段波動であるか否か。そのいずれかであるかを決定するのは、なお幾波乱と時間を必要とするばかりでなく、これが、中勢観的に、中段波動であって、今一度、大天井を打ちにゆく、と決定するには、今一つ疑問が残る。

それは、この最近の好転は、業者が、とくに大手がハラをきめたためではないであろうか。そう思えるフシが多く、果たして相場そのものの流れであるか否か。その原因が輸出の好調によるものとするれば銘柄別にうなずけないものがある。オイルダラーによるものかインフレ克服の不可能視によるものか。とすれば、政策転換は単なる言いぐさか。いずれにしても、私としては、今少し冷静に経過と盛り上がりを見たいと思うが、しかし相場は幾波乱を経て、たしかに大きく変化してきた。

相場が楽観時代に入った以上、優良株も再評価株も相当楽観されて良いはずであるが、とすれば、仕手株には選手交代もあるであろう。小勢四八〇〇ポイント台までは、大した深押しもないと思うがそこでどんな相場を見せるか。さらにはその前に、四七〇〇ポイント台でどんな経過をたどるか。それらをゆっくり見定めてから中勢観をきめることにしよう。変化日は四月二十四日、五月八日、六月五日となっているが、今はそれに余り気を取られる必要もあるまい。

＝四月十七日記＝

2012/12/16 第 338 号

均衡表の急所(70) 一目山人

《四八〇〇台乗せ後 押しの程度を見定めて》

四月十七日記の今回は「相場は大きく好転」と題して「三月二十七日の配当二七ポイント落ちを埋めて、四四七三ポイントまで反発。M波動のアトとしては、いかにも強い。その後三月三十日で終わる週間均衡表では、完全に外ばらみとなり、これで相場の方向は決定したわけであるが、しかも、その後四月四日、日足で四連陰を入れて、四四〇三ポイントまで突っ込んだ。真に下げる相場なれば、その翌日は暴落すべきであるが、すでに相場の方向は決定しているので、たちまち反発。きわめて有力な決定反動となった。私としては、決して予想的なことは書かない。相場そのものの証明を待つわけであるが、この変化によって、当分は安心買いである。ただ大勢観的には、容易に強気になれないので、今のところ、特に中勢観が問題である。というのは、大勢観はすくなくとも五、七年、中勢観は二、三年であるが、昨年一月天井からの中勢観が、ここで本格的カイとなるか否か。そのいずれかであるかの決定には、なお幾波乱と時間を要する。これからの好転も、どうも本格的な相場の流れとは、今のところ受け取りにくい。小勢四八〇〇ポイント台までは、大した深押しもないと思うが、そこでどんな相場を見せるか。さらにはその前に四七〇〇ポイント台でどんな経過をたどるか。それを見てからの中勢観であるが、変化日は四月二十四日、五月八日、六月五日と、今はそれに余り気を取られる必要もあるまい」旨を書いた。

その後、たちまちにして一節、一期の運行スパンも好転。めまぐるしい銘柄のうつりかわりを繰り返しつつ、四月十九日には、四六一三ポイントと二月九日の高値四六〇五を上抜いたため、あと二十五日の配当落ちまで四連陰で四五五四と、わずか五九ポイント押しにとどまった。ついで五月八日の四七〇六ポイント。この日は変化日であって、昨年十月三十日の高値四七〇二ポイントを上抜いたにもかかわらず、その後六連陰をつづけながら、ほとんど高値もみに終わった。この値幅はザラバをいれても、わずか六〇ポイントたらずであったが、大商いのうちの陰線つづきである。いかにも良くない相場つきだけに、とかく売り込みをさそったが、それだけに二つの変化日の重なった十六日を最後に、今日の相場四七六四ポイントまでやや急調子の上げとなってきた。

前回にも書いたように、四六〇〇台、四七〇〇台の押しは極めて浅かったのであるが、やはり四八〇〇ポイント台は、相当の深押しがあると、今でも考えざるを得ない。正確には四八二二ポイント以上を取ることであるが、昨今の調子で買い進まれば、二十八日の変化日が問題となる。

もし四八〇〇ポイント台以前にやや深押しを入れるとすれば、やはり六月上旬が問題と

なるが、この上げ相場の主力は、おそらく投信であろう。投信はその募集成績に対応して、目先の相場観に関係なく、平均買いを続けるようである。それはそれで良いが、何分にもめまぐるしい相場であり、銘柄のうつりかわりと暴落がはなはだしい。今はNSB平均（旧ダウ）だけを見て安心しているわけにはゆかない。何よりも銘柄別の騰落に重点的でなければいけないが、このはな、NSB平均が四八〇〇ポイント台に乗せれば、ひとまずカイ玉が手持ちにならぬよう気をつけることが必要ではあるまいか。

これから以後の押し具合を見なければハッキリしたことは言えないが、参院選挙が良ければ八月天井ということになるかも知れない。それまでに中勢観を決定することが出来るかどうか。この相場が、相場の本当の流れとは、どうも受け取りにくいので、はなはだ厄介である。

私としては、相場は「ただ取り」という時だけ書きたいのであるが、今も、当分も、そんな相場ではない。ひたすら、時を待つ外ないのであるが、最近優良株につながりかけたところで、ニューヨーク安である。米国はインフレ売り、日本はインフレ買いであるから、ニューヨーク安に同調する必要は、しばらくないと思うが、日本がインフレを十分買ったあと、再評価を買い進み、さらに調子に乗って、デノミを買うにいたれば、相場はいかなる位置にあっても、それですべておしまいということは、今から常に考えて置く必要があると思う。

＝五月二十三日記＝

昭和 49 年 5 月 25 日 日本証券新聞掲載

2012/12/23 第 339 号

均衡表の急所(71) 一目山人

《底入れは手間取る 中勢観も月余で確定か》

五月二十三日記の今回は「四八〇〇台乗せ後、押しの程度を見定めて」と題して「前回にも書いたように、四六〇〇台、四七〇〇台の押しは極めて浅かったのであるが、やはり四八〇〇ポイント台は、相当の深押しがあると、今でも考えざるを得ない。正確には四八二二ポイント（これは四八三一のあやまり）以上を取ることであるが、昨今の調子で買い進まれば、二十八日の変化日が問題となる。もし四八〇〇台以前にやや深押しを入れるとすれば、やはり六月上旬が問題となるが、なにぶんにもめまぐるしい相場であり、銘柄の移り変わりと騰落がはなはだしい。何よりも銘柄別の騰落に重点的であるべきだが、NSB平均が四八〇〇台に乗せれば、ひとまずカイ玉が手持ちにならぬよう気をつけることが必要。これから以後の押し具合を見なければハッキリいえないが、参院選挙が良ければ八月天井ということになるかも知れない。しかし、それまでに中勢観を決定することが出

来るかどうか。この相場が、相場の本当の流れとは、どうも受け取りにくいので、どうも厄介である」旨を書いた。

その翌日四七〇九ポイントと急落したのを最後に買い進まれ、二十八日の変化日も問題なく、六月三日のザラバでは四八〇〇ポイント台のせとなった。しかし前にも書いたように、四六〇〇台、四七〇〇台は、大した反動はなかったが、四八〇〇台は、とかく警戒人気となり、三日、四日と下げてから、五日、六日と買い進まれ、六日のザラバでは、四八〇〇ポイントとなったものの、また、たちまち売られた。

当時の変化日は、六月五日、七日であったが、六日から下げに入り、十日にはザラバ安値四六一八ポイントと、三月二十五日以来の深押しとなった。その後の十一日、十二日と約一三〇ポイントの強反発となり、いよいよ大相場と考えた向きも多いと思うが、私としては、どうも自然の相場とは思えない。

その点から見れば、十一日、十二日の強反発も、だいたい四六〇〇台からの戻り過ぎず、けっきょく、この下げにおける一応のとまり値は四四〇〇ポイント前後であり、その後は四四〇〇ポイント前後であり、その後は当然三尊となる可能性が強い。ということは、六月十三日の同人会誌に、くわしく書いた通りであるが、六月十一、十二日の強反発後、十三日の相場が良くなかった。

しかし、それから二節の時間をかけても、六月十日の安値を下回らないようでは、計算値を取っていないだけ、今一度新高値に出る可能性も考えられるところであったが、六月十日の安値から、一節の六月二十日高寄りから悪化。二十八日、六月十日の安値を下回っては、すでにすべなし、となった。

かくて、一節、二節、一期の遅行スパンはいずれもウリの一点となり、近くは、七月六日の変化日による高寄りから急激に悪化。今日九日には、選挙の結果とニューヨーク安を入れて、ザラバでは四四七〇ポイントまでであった。四八〇〇ポイント台では、カイ玉が手持ちにならぬよう、と書いたゆえんであるが、今春からの上げ相場は、投信買いを主流とするものであっただけ、なお当分の間は、反動来といっても、大きくろばい投げの出る心配はまずあるまい。それどころか、投信買いは平均を取る必要があるので、今日の後場も投信が主力となって買ったようである。

従って、この戻りも今少し続くであろうが、強く戻しても一三〇から二〇〇ポイントであろう。しかし、相場が少し素直になれば、一応の下げ止まり値は、やはり四四〇〇ポイント前後。それから三尊となるとすれば、今一度四六〇〇ポイント前後ということになるのが、最も理想的な変動であるが、いずれにしても、投信買いが続く限り、相場の底入れは、なお相当手間取ることになるであろう。

そうだとすれば、当分は休養時代というべきであろうが、問題の中勢観としては、まだ明確には確定していない。ただ余ほど素晴らしい底モミを経ない限り、中勢観として、楽観に転ずることは容易でない。私がとくに四八〇〇ポイント台を重視してきたのも、中勢観が問題だったからであるが、相場がここまで下げてきたことだけから見れば、あと一カ

月もすれば、中勢観も確定されるであろう、と思わざるを得ない。

ところで当面の変化日は、七月十二日、十五日、二十六日、八月六日となっているが、八月上旬になれば、相場の帰すうも、もっとハッキリするであろう。

＝七月九日記＝

昭和 49 年 7 月 13 日 日本証券新聞掲載

2012/12/30 第 340 号

均衡表の急所(72) 一目山人

《小勢観上大事な時点 九月配当落ち後を見定めて》

七月九日記の今回は「底入れは手間取る」と題して「六月六日から下げに入り、十日にはザラバ安値四六一八ポイントと、三月二十五日以来の深押しとなった。その後十一日、十二日と約一三〇ポイントの強反発となり、いよいよ大相場と考えた向きも多いと思うが、私としてはどうも自然の相場とは思えない。六月十日の安値から、一節の六月二十日高寄りで悪化。二十八日、六月十日の安値を下回り、すでにすべなしである。かくて一節、二節、一期の運行スパンはいずれもウリの一点となり、九日にはザラバで四四七〇ポイントまでであった。四八〇〇ポイント台では、カイ玉が手持ちにならぬよう、と書いたゆえんであるが今春からの上げ相場は、投信買いを主流とするものであっただけ、なお当分の間は、反動来といっても、大きくろうばい投げの出る心配はまずあるまい。それどころか、平均買いの必要上、安値は常に買うであろう。強く戻しても、一三〇から二〇〇ポイントであろう。相場が少し素直になれば、やはり四四〇〇ポイント前後、それから三尊になるとすれば、最も理想的であるが、いずれにしても、投信買いが続く限り、相場の底入れは、なお相当手間取る。当面の変化日は、七月十二日、十五日、二十六日、八月六日となっているが、八月上旬になれば、相場の帰すうも、もっとハッキリするであろう」旨を書いた。

その後十日、十一日と、九日のザラバ安値より一〇ポイント戻して、十二日より新安値に下げ、十五日より戻りに入り、二十五日までに一三〇ポイント戻した。二十六日より下げに入り、八月六日四二〇〇ポイント割れとなり、その後また一五〇ポイント戻し、その後も新安値ごとに戻して、八月二十六日四〇〇〇ポイント割れとなった。

ザラバ安値では、昨年十二月十八日の安値三九五八ポイントを下回っているが、六月はじめより約三ヵ月にわたるしつような下げにおいて、一〇〇ポイント前後の戻りを実に七回入れている。いずれも投信買いを主として、一部の仕手が、循環的に、常に五、六の銘柄を買いあおるに過ぎないが、この間、二〇〇ポイントの戻りを入れたことは一度もなかった。

まことに底入れは手間取ったわけであるが、前にも書いたように、二〇〇ポイント以上

の戻りを入れたアトでなければ相場の帰すうはハッキリしない。もちろん、遅行スパンを見ても、きわめて明らかなように、六月以来、一度もカイ目は出なかったのである。しかし八月二十九日から三十一日の四一六八ポイントに戻した値幅はザラバ安値からでは二四〇ポイントに及んでいる。

その後、九月十七日に三九六五ポイント引けとなっているが、三日の連休をひかえて、わずかながら戻している。高値からすでに九十日以上反動を入れて、しかも二〇〇ポイントの往来を経ている。一応小勢観を考えねばならぬところへ来ていると思う。何よりも、コワれる相場なれば、連休前にコワれていなければならぬはずであるが、それがわずかでも戻りを入れている。

ことに九月もすでに月末に近づいているが、業者の決算も迫っている。時に株不足銘柄が二十にも及んでおり、久しい間の下げ相場で、人気もかなり軟化しているはずである。ここで業者が強引にやればやれる状態でもある。もちろん、大勢観はいぜんとして決して楽観できないし、中勢観もほぼ警戒、ということであるが、問題は小勢観である。もっともそれもまだ確定したわけではない。

楽観するとしても、それはまだ予想の域をいでないものであって、私も配当落ちを見なければ、決定的なことは言い得ないが、今でもこれだけのことは言える。すなわち、八月三十一日の戻り高値と、九月十七日の安値が、小勢転換の限定線である、ということで、下限を下回れば戻してもダメだが、小勢的に楽観出来るとすれば、八月末の上限を上抜いてからのことである。

もちろん、その場合でも、大した相場は望めない。せいぜい四四〇〇ポイント台と思われるが、正確には限定線を超えてからのことである。もし、相当時間をかけても、限定線の圏内を往来するようであれば、それはPのP。いわゆるトライアングルとなる可能性もあるが、その場合は、相場は良きにつけ、あしきにつけ、やや急調を帯びてくる。

いずれにしても、現時点は、小勢観が変化するか否かの、最も大事なところであるだけ、私もとくに予想をしないで、経過を見定めたいと思っている。当面の変化日は、九月二十八日、十月三日、十月二十一日、十一月九日等であるが、当面のところ、変化日より一節、二節、一期の遅行スパンに注目してもらいたい。

＝九月二十三日＝

昭和 49 年 9 月 26 日 日本証券新聞掲載

2013/01/6 第 341 号

均衡表の急所(73) 一目山人

《小勢観では底入れ 今後の中勢観が一大事》

九月二十三日記の今回は「小勢観上大事な時点」と題して「ザラバ安値では、昨年十二月十八日の安値三九五八ポイントを下回っているが、六月初めより約三カ月にわたるしつような下げにおいて、一〇〇ポイント前後の戻りを実に七回入れている。この間二〇〇ポイントの戻りを入れたことは一度もなかった。前にも書いたように、二〇〇ポイント以上の戻りを入れたあとでなければ、相場の帰すうはハッキリしない。しかし八月二十九日から三十一日の四一六八ポイントに戻した値幅はザラバ安値からでは、二四〇ポイントに及んでいる。ことに九月もすでに月末に近づいているが、業者の決算も迫っている。ここで業者が、強引にやればやれるが、もちろん大勢観はいぜんとして、決して樂觀出来ないし、中勢観もほぼ警戒である。問題は小勢観であるが、それもまだ決定したわけではない。配当落ちを見なければ、決定的なことは言い得ないが、今でも、これだけのことは言える。すなわち、八月三十一日の戻り高値と、九月十七日の安値が、小勢転換の限定線である。ということで、下限を下回れば戻してもダメだが、小勢的に樂觀できるとすれば、八月末の上限を上抜いてからのことである。いずれにしても、現時点では、小勢観が変化するか否かの、最も大事なところであるだけ、私もとくに、予想をしないで、経過を見定めたい。当面の変化日は、九月二十八日、十月三日、二十一日、十一月九日等であるが、当面のところ、変化日より、一節、二節、一期の遅行スパンに注目してもらいたい」むねを書いた。

その後二十六日に九月決算の配当を二十九円落とした。朝あたりはその九割までを埋めたが、あとははげてしまった。毎度言うように、三、九月の配当落ちにおいて朝寄りで埋めて、あとでダメになるのが大変な悪性であって、何はなくとも、これだけで前途を相当悲観すべきあるが、いわんや二十七日には、三九六一ポイントと九月十七日の限定線を下回ってきた。かくて一節、二節、一期の遅行スパンも実線に接触しつつ悪化、むろん均衡関係もいぜんとして悪化の一途をたどっており、前途は極めて暗い。そこで大きなN計算値はどうか。それは三三八六ポイントであるが、さらにはこの反動自体、すなわち能動的計算値はどうか。これは八月六日の安値のE計算値三三五六。八月三十一日の戻り高値のNT計算値三五五四ポイント。この両者によってS点となるので、十月九日三三五五ポイントは、すくなくとも小勢的底入れである。ことにこの安値引けは、引け新値で一節陰連であって、しかも一節目が一番大幅である。

これで十分であって、十月十八日には三七四八ポイントまで戻し、二十八日三四〇三ポイントに押し、これを二番底として、十一月十四日にはザラバで三八一六ポイントと戻り新値である。これは目先のN計算値であるから、ここからまた一押し入れるのは当然であるが、一節の遅行スパンは三五七八ポイントで好転、一期のスパンも数日前好転。これで小勢的には、少なくとも四〇〇〇ポイント近い戻りは期待出来るのであるが、さらに計算値を見れば、四〇九三、四一四一ポイントである。それを取るかどうか。もしそれを取ったとすれば、その後が極めて重大事となるわけで、場合によっては、中勢観の好転を考えねばならぬかも知れない。

なぜかといえば、NSB平均の大勢観としては、過般の安値もなお不十分であるが、しかし、東証第一部の全銘柄による単純平均は意外に下げており、昨年からの反動は、一応これで十分であるとも考える位置にある。その点からいえば、これからNSB平均は安くても、銘柄には高いものがあるということを考えておく必要がある。

大勢観については、このほど実業之日本社の質問に答えたところであって、それは十二月上旬に発売されるとのことであるが、果たしてその大勢観を、来年、訂正しないで良いか否かは、これからの小勢的経過いかん。ひいては、中勢観が好転するか否かにかかっている。それについて、とくに考えて置かねばならぬことは、国際的経済混乱がどうなるか、とくに通貨価値の安定がいつになるか——ということである。それにもまして、国内のインフレがどうなるかということである。私はこれまでインフレを書き進んできた以上、今、来年はインフレを売らねばならぬと考えて来たのであるが、それはこれからのインフレは、やや落ち着いたものになるという前提に立ったものであるが、来春はさらに公共料金を大幅に引き上げるという。その結果を見なければ、正確なことは言えないが、どうも不安を感じないわけには行かない。もし来年においてさえ、相場がインフレ買いとなるようでは、それは単に相場だけの問題ではない。

＝十一月十七日＝

昭和 49 年 11 月 20 日 日本証券新聞掲載

2013/01/13 第 342 号

均衡表の急所(74) 一目山人

《小勢相場の限定線 中勢、大勢はなお警戒》

十一月十七日記の今回は「小勢観では底入れ。今後の中勢観が一大事」と題して「さらにこの反動自体、すなわち能動的計算値はどうか。これは八月六日の安値のE計算値三三五六。八月三十一日の戻り高値のNT計算値三三五四ポイント、この両者によってS点となるので、十月九日の三三五五ポイントは少なくとも小勢的底入れである。ことにこの安値引けは引け新値で一節陰連。これで十分であって、十一月十四日にはザラバで三八一六ポイントと戻り新値であるが、これは目先のN計算値であるから、ここからまた一押し入れるのは当然である。これで小勢的には、少なくとも四〇〇〇ポイント近い戻りは期待できるのであるが、さらに計算値を見れば、四〇九三、四一四一ポイントである。それを取るかどうか。もしそれを取れば、その後が極めて重大であって、場合によっては、中勢観の好転を考えねばならぬかも知れない。NSB平均の大勢観としてはこの反動もなお不十分であるが、東証の単純平均は意外に下げており、昨年来の反動は、一応これで十分であるとも考えられる位置にある。大勢観については、今のところ、決して楽観出来ないが問題は来年のインフレが果たしてどの程度になるか。さらには、これからの小勢観いかん、

ひいては中勢観が好転するか否かにかかっている」旨を書いた。

その後十一月十四日から下げに入り、二十二日の朝寄り三六六四ポイントまで下げた。これはあたかも先行スパンによる抵抗帯下限に直面しただけあって、この二十二日の大引けは、三七五九ポイントと、一挙に九六ポイント高を演じたのである。これは単に大幅高であった、ということばかりでなく、均衡表にいうところのB以上、すなわち前四日間の高値を一本に上抜いている（Bは三本抜き）。そのため翌立会日二十五日には戻り高値に出ているが、これによる当面の計算値は、二十一日の大引け値をNTとする三九五九ポイントである。

その後二十一日から一節を経た十二月二日には三九七四ポイント引けであって、すでに前記のNT計算値を取り、しかもこの日はO△の変化日であり、V対等数値によっても、一日不足しているだけであり一期の変化日を二日過ぎたところである。かくして、十二月七日の朝寄り三八二八ポイントまで下げたが、この前日からいくつかの変化日が重なっていて、七日は三八八二ポイントの大引けとなり、翌立会日九日には、三九七〇ポイントまで奔騰した。

しかし、これは新高値とはならず、しかもこの日はN対等数値の当日にあたったわけで、その後今日までに三八八六ポイントまで押して、いくぶん戻している。これが今日までの経過であって、いささか、はんさに過ぎたと思うが、相場の変化について勉強されている方々に対しては大事なことで、参考までに書いたわけである。

ところで問題は、今後どうなるか、どう考えるべきであるか、ということであるが、まず第一に大事なことは、これまでの小勢的経過では、中勢観の好転はまだ考えられない、ということであって、十二月二日の高値は、だいたいにおいて、前回に書いた四〇〇〇ポイント近いものであるが、ということは小勢的にもS点であるが、昨年十二月の安値と対照される実に一年にわたる大S点である。

もしこのままで、この小勢相場が終わりになるならば、来年度以降の相場は由々しいことになるわけだが、もちろん、それは今のところ、まだ決定はしていない。しかし、近くそれが決定されるか否か。今、もっとも大事な原点に立っているのである。

前回以来の小勢観において、最も関心の深いことは、四〇九三、四一四一ポイントを出現するか否か、であるが、それについて、この際、とくに大事で注目すべきは、最近のただ一日のNSB平均が大事な限定線となっていることである。

それは十二月七日（土）の引け値三八八二ポイントから翌九日のザラバ高値三九七七ポイントであるが、この限定線は、九月二十三日記のそれは幾分性質のちがうもので、上限を上抜いたとしても、しかし大きな相場は期待出来ない。出後株を一巡買う程度で、前記の計算値を取るのが精々。かりにそれを上回るとしても四一七〇ポイントであるが、これに反して、下限を下回って引ければ、何度戻しても、ダメである。

しかし、年内はすでに余日に乏しい。かりに限定線を下回ったとしても、年内はあまり深押しはないであろう。深くても三七五〇ポイント程度であろうが、しかしそれにしても、

その後の戻りは大いに警戒せねばならない。問題は来年度であって、それはゆっくり年末年始の経過を見定めてからで十分であるが、当面の変化日は、十二月十八日、二十三日。年末が新高根の場合は大発会。一月二十四日ということになっているものの、それまでにすべては決まってしまうであろう。

=十二月十六日=

昭和 49 年 12 月 20 日 日本証券新聞掲載

2013/01/20 第 343 号

均衡表の急所(75) 一目山人

《ウリあせらぬこと 今年は二月相場が大事》

昨年十二月十六日記の今回は「小勢相場の限定線」と題して「その後十一月十四日から下げに入り、二十二日の朝寄り三六六四ポイントまで下げた。これは抵抗帯下限に直面しただけあって、この日の大引けは一挙に九六ポイント高である。これはB以上であり、当面の計算値はNT三九七五ポイントである。その後一節を経た十二月二日には三九七四ポイント引けで、すでに計算値となり、しかも〇△の変化日である。かくて、七日の三八八二ポイント引けから九日の三九七〇ポイントとなったが、しかしこれは新高値とはならず、しかもこの日はN対等数値の当日であり、その後押しているが、問題は今後である。まず大事なことは、これまでの小勢的経過では、中勢観の好転はまだ考えられないうえ、十二月二日の高値は、前回にも書いた小勢的にもS点であるが、さらに一年にわたる大S点である。

もしこのままで、小勢相場が終わりになるなれば、来年度以降の相場は、実に由々しいことになるわけだが、この際、とくに大事で注目すべきは、最近のただ一日のNSB平均が大事な限定線となっていることである。それは十二月七日(土)の引け値三八八二ポイントから翌九日のザラバ高値三九七七ポイントであるが、この限定線は、九月二十三日記のそれとは幾分かちがうもので、上限を上回っても大したことはない。しかし、下限を下回って引ければ、何度戻してもダメであるが、年内は余り深押しはなく、問題は来年度である」旨を書いた。

その後ややしばらく三九〇〇ポイント前後をもんで、二十三日三八六七ポイント引けとなり、三八八二ポイントの限定線を下回ってきた。これで、いかに年末高の人气が強張っても、高値への望みは完全に打ち切られたが、さすがに年末は深押しがなく、二十四日の三八三四ポイントを安値に二十六日には五・五一ポイントの配当を落としながら、ザラバでは、三九一九ポイントまで戻している。

しかし、毎度書いてきたように、配当落ちを朝埋めて、大引けでたたかれるのが一番悪

性であり、ことに、二十七日の三八三六ポイント引けにより、二十五日の戻りが、二度目の決定反動となってしまった。これではもはや、いかにウリ人気が強くても、カイ方は助かりようがない。それでも大納会は三八一ポイントと、前回に書いた最悪の場合の三七五〇ポイントどころには達しなかったが、すでに十二月七日のザラバ安値三八二八ポイントさえ下回ったのである。

かくして、大発会以来急調を帯びて、一月十日には、三六二七ポイントと昨年十一月二十一日の三六六五ポイントすら下回ってきた。しかしこの日は対等数値が一日延びただけであったのと、すでに高値から一期も過ぎていたので、これから当然一反発を見る順序であるが、それはあとで述べるとして、この際読者の勉強のため、この下げにおける均衡表の変化を見れば、十二月十八日の三九一六ポイントにおいて、一節と二節の遅行スパンがウリになり、二十七日の三八三六ポイントにより一期の遅行スパンがウリになった。もちろん三九〇〇ポイント割れでは基準線を転換線が下回って、すべてのウリ時代になった。銘柄別にはもっと有効なものが多かったが、かくして一月九日には先行スパンの抵抗帯下限をも下破ってきた。

これらの点から見れば、さらには、前回にも書いた一年にわたる大きなS点構成から見れば、今年の相場は、いかにも大きく崩れる相場のようなものである。もちろん、今のところ、それを否定する何ものもないが、今の私は、どうもそうは考えたくない。

正月だから、少し長文をゆるしてもらえば、前述のような、現在の相場においては、万人総弱気となるように思えてならない。もしそうだとすれば、ウリ方が安値を限定することになりやすく、いきおい相場も小幅となりかねない。プロ以外はウリもカイも出来ぬわけだが、果たしてどうであるかは、全然これからの問題であって、これからの経過いかんにかかっている。

ところで当面の相場であるが、これからの戻りはむろん大きくない。せいぜい一五〇ポイント、最大限三八五〇ポイントまでであるが、しかし抵抗帯上限は三八六五ポイントである。もしそれを上回れば小勢観、中勢観も変わってくるが、三八五〇ポイントまでの戻りであれば、そのアトの下げは深くなる。その点からいえば、戻りのにぶいほど当分の間は、余り深い安値を考えない方がよい。ということは、戻りのにぶいほどウリ焦らないことであって、一、二カ月の経過を慎重に見きわめるべきである。

当面の変化日は十四日、十六日、二十三日、四日、二十八日、二月四日となっているが、とくに二十八日が大事である。

=一月十三日=

昭和 50 年 1 月 17 日 日本証券新聞掲載

2013/01/27 第 344 号

《一反動を見定めて 一年にわたるS点解消》

一月十三日記の今回は「ウリあせらぬこと」と題して「これらの点から見れば、さらには前回にも書いた一年にわたる大きなS点構成から見れば、今年の相場は、いかにも大きく崩れる相場のようなものである。もちろん、今のところ、それを否定する何ものもないが、今の私は、どうもそうは考えたくない。前述のような現在の相場においては、どうも万人総弱気となるように思えてならない。もしそうだとすればウリ方が安値を限定することになりやすく、いきおい相場も小幅となりかねない。果たしてどうであるかは、全然これからの問題であって、これからの経過いかんにかかっている。ところで当面の相場であるが、これからの戻りはむろん大きくない。せいぜい一五〇ポイント、最大限三八五〇ポイントまでであるが、しかし抵抗帯上限は三八六五ポイントである。もしそれを上回れば、小勢観、中勢観も変わってくるが、三八五〇ポイントまでの戻りであれば、その後の下げは深くなる。その点からいえば、戻りのにぶいほど、当分の間は余り深い安値を考えない方がよい。ということは、戻りのにぶいほどウリ焦らないことであって、一、二カ月の経過を慎重に見きわめるべきである。当面の変化日は、十四日、十六日、二十三日、四日、二十八日、二月四日となっているが、とくに二十八日が大事である」旨を書いた。

その翌十四日には、三七二〇ポイントと、一気に六三ポイント高。ついで十七日には三八二九ポイントとなり、それから五陰連にもかかわらず、二十四日には、三七四七ポイントと、わずかの深押しにとどまり、それから再騰に転じ、二十七日には、一節と二節の遅行スパンが好転。しかもこの一節のスパンは実線に接触したので、二十八日から奔騰して、たちまち戻り新値となり、二十九日には一期の遅行スパンも好転。引き続き今十二日の四一〇〇ポイントまで上げ続けているが、ここで非常に大事なことは、前回にも書いたように、三八六五ポイントを上抜いた以上、小勢観、とくに、久しく決定しなかった中勢観も好転してきたばかりでなく、昨年十二月二日の戻り高値三九七四ポイントをも上抜いたことにより、一年にわたるS点構成が解消されたのである。

これは大勢観上、きわめて重大なことであるが、それは今、急いで書く必要もない。むしろ一目均衡表の読者には、これから二、三カ月の間、よく研究してもらって、私の書く前に自得してほしいと思うのである。

ところで、問題は、これからどうなるかであるが、今日は二番底から一期の変化日に当たる。本来なれば、明日(十三日)から一反動に入るべきところであって、そうなれば、反動は浅くてすむはずである。しかし、銘柄別には順々に、押しを入れているものであるが、循環買いが連続して、NSB平均は、なかなか押しそうもない。両三日はまだ押さないかも知れないが、しかし、このまま買い気をつづければ、その後の反動は深くなるばかりである。おそらく、遅れても二月第三週からは一反動を入れることになるはずであるが、もちろん、当面の高値で終わる相場ではない。

しかし当面の高値が、四一四一ポイントを実現したあとなれば、その後の押しはやや時間をかける必要がある。もし当面の高値が四一九〇ポイントを実現したあとなれば、反動期間はさらに長引くことになるが、おそらく、目先はそこまで上げることはないだろう。

それよりも小勢的に大事なことは、四一七九ポイントを、どういう経過で実現するか、ということであるが、中勢に、この相場の高値が幾らになるかは、当面の反動経過を見定めてから、さらには前記の四一七九ポイント実現後の経過を見定める必要があるが、もちろんそれは、変化日との関係においてである。

とにかく、前回にも書いたように、今年の相場は、二月相場の経過いかんが、きわめて重大であるが、中勢観もすでに好転を明らかにした以上、あるいはこの相場は、一般に考えられている以上に、大きくのびるかも知れない。

当面の計算値は、前記のもの以上では、さしあたり四三一三ポイントであるが、二月相場の経過を見定めてから改めて書くことにしよう。当面の変化日は二月十七日、二十一日、二十六日、三月四日、二十二日、二十七日であるが、中勢観上、もっとも大事なものは三月二十七日である。

=二月十二日=

昭和 50 年 2 月 19 日 日本証券新聞掲載

2013/02/10 第 346 号

均衡表の急所(77) 一目山人

《当面、重大な分岐点 今は素直に押すが良い》

二月十二日記の前は「一反動を見定めて」と題して「前回にも書いたように、三八六五ポイントを上抜いた以上、小勢観、とくに久しく決定しなかった中勢観も好転してきたばかりでなく、昨年十二月二日の戻り高値三九七四ポイントをも上抜いたことにより、一年にわたるS点構成が解消されたのである。これは大勢観上、きわめて重大なことであるが、問題は、これからどうなるかである。

今日は二番底から一期の変化日で、本来なれば、明十三日から、一反動に入るべきであって、そうなれば、反動は浅くてすむはずである。しかしこのまま買い気をつづければ、その後の反動は深くなるばかりであるが、とにかく、前回にも書いたように、今年の相場は、二月相場の経過いかんが、きわめて重大である。中勢観も、すでに好転を明らかにした以上、あるいはこの相場は、一般に考えられている以上に、大きくのびるかも知れない。当面の計算値は、さしあたり四三一三ポイントであるが、当面の変化日は二月十七日、二十一日、二十六日、三月四日、二十二日、二十七日である」旨を書いた。

その後十七日に四一三九ポイントから押しを入れたものの、それもわずか三日だけで、

十九日の四〇五三ポイントとザラバから見ても一〇〇ポイント以内の浅いものであった。一節の遅行スパンが、実線に接触したので、たちまち反発、依然として、次から次への、循環的に銘柄を入れかえて、ついに三月四日のザラバでは四三三八ポイントの高値を朝寄り直後につけ、大引けには四二六五ポイントと、朝高から七三ポイントの急落となった。

これはすでに、四三一三ポイントの計算値をとっており、しかも三月四日という重要な〇△の変化日に直面している。さらにこの四日の大幅陰線は、三日の陽線に対して、大きなYとなっている。これで私は天井打ちとはまだ思わないが、すくなくとも、相当深い反動を入れると考え、同人会幹事にも、だいたいそのことを伝えたのである。幹事もおよそ同様の考えで、お客のカイ玉を大部分処理した由であるが、しかしその後、わずかに二日の押し、それも極く小幅であって、それからしつような戻りに入ったのである。

この上げ相場をふり返ってみれば、一月二十日からの押し、二月十四日からの押しが、いずれも小幅かつ短期であって、ほとんど一本に上げた、といっても良いほどであり、ことに二月二十日から三月四日までの上げでは、相場の性質がだんだん悪くなってきた。

それにもまして、三月六日からの戻りは、きわめて悪質なものとなってきた。もし、このまま新高値に出て、三月二十二日または二十七日まで高値を追えば、四四七〇ポイント前後で間違いなく天井を打つ相場であるが、十一日からわずかに新高値に出たものが、十三日にはやや下げ、十四日には一時一〇〇ポイント以上の下げとなった。しかし、大引けには安値から七〇ポイントも戻し、依然として、カイあおりの強さを示している。ことに個々の銘柄を見れば、今までのように、カイあおろうと思えば、あおれると、見られるものも相当ある。

さらに、ウリ込み玉のフミ上げをねらえば、今回の急突っ込みがあっただけ、フマセやすいということもあるが、そうしたことが可能のためには、十四日の引け値以上の引け値があってはならぬ。来週早々から反騰に入らなければならぬが、もしそうなれば、相場はますます悪性化して、天井打ちは、前述のごとく短命に終わり、NSB平均もせいぜい四五〇〇ポイントであろう。

しかし、この相場のために、最も良いことは、ここで素直に押すことである。さらにその押しは、やや長期にわたることが良いが、そうして、最も理想的な押しを入れれば、前回にも書いたように、一般に考えられているよりも相場は大きくなり、期限も延長される可能性が出て来る。今年の相場にとって、一番大事であった二月相場の、順調であったことと相まって、すくなくとも、五月一ぱいまでは、天井を打たないで済むというふうにも考えられる。

もちろん、そのことは今後の経過による証明を得てから、改めてくわしく書くが、とにかく当面の相場は、前述のごとく、非常に大事なポイントに立っている。こまかくいえば、来週前半の相場いかんが、とくに注目に値するものであるが、このまま押しにはいる場合の計算値は、取りあえず三四〇ポイント前後の押しと見て置く必要がある。当面の変化日は、三月二十二日、二十五日、二十七日、四月二日、八日、十五日等であるが、とにかく

これからは、波乱の多くなることに注意しなければならない。

=三月十四日=

昭和 50 年 3 月 19 日 日本証券新聞掲載

2013/02/17 第 347 号

均衡表の急所(78) 一目山人

《しばらく騰落に無関心 相場につり込まれぬこと》

三月十四日記の今回は「当面、重大な分岐点、今は素直に押すが良い」と題して「この上げ相場をふり返って見れば、一月二十日からの押し、二月十四日からの押しが、いずれも小幅かつ短期であって、ほとんど一本に上げた、といってもよいほどであり、ことに二月二十日から三月四日までの上げでは、相場の性質がだんだん悪くなってきた。それにもまして、三月六日からの戻りは、きわめて悪質なものとなってきた。もしこのまま新高値に出て、三月二十二日または二十七日まで高値を追えば四四七〇ポイント前後で間違いなく天井を打つ相場であるが、十一日からわずかに新高値に出たものが、十四日には一時一〇〇ポイント以上の下げとなった。しかし大引けには七〇ポイントも戻し、依然として買いあおりの強さを示している。個々の銘柄を見れば、まだ買いあおれると見られるものも相当ある。さらに、売り込み玉も踏ませやすいが、来週早々から反騰に入るとすれば、天井打ちは短命に終わり、NSB平均もせいぜい四五〇〇ポイントであろう。

しかし、この相場のために、最も良いことは、ここで素直に押すことであって、そうなれば、一般に考えられているよりも相場は大きくなり、五月いっぱいまでは天井を打たないで済むというふうにも考えられる。とにかく当面の相場は、非常に大事なポイントに立っており、とくに来週前半の相場は注目に値するが、変化日は三月二十二日、二十五日、二十七日、四月二日、八日、十五日である」旨を書いた。

その後二日間、わずかに戻しただけで二十日には四二四六ポイントと四二六〇ポイントを割ってきた。そして注目すべき当面の最大変化日二十五日があたかも高値からの一節に相当したので、四二〇〇ポイント近い寄り付き安から急反騰、二十七日には、早くも一節、及び二節の遅行スパンも好転。かくて三月四日からの中断モミは、わずかに二節、一五〇ポイントに終わったわけであるが、その後四月三日のザラバで四五一〇ポイントがらみを実現した。

しかしこれは、前回にも書いた計算値であり、二十五日からの一節にも相当する。むろんこれで天井打ち、ときめつけるわけにはゆかないが、とにかくひと反動必至となって、四月八日というきわめて重大な対等変化日をザラバ安値四三七五ポイントで経過。十四日にまた四五〇〇ポイントに戻したが、十五日から反落、今日二十二日には四三五五ポイン

トと、四月八日の安値をも下回ってきた。

しかし、この相場は、戻り高値からすでに七陰連であり、しかも三月十三日の高値に対するS点ともなっている。このS点が当面の問題となるとは思えないが、もしS点構成がハッキリすれば、相場の天井値と時間はきわめて明確になるが、それはアトの問題として今日の二十二日、明日の二十三日はちょっとした変化日であるからここでは、とにかく一応の戻しを入れるはずである。

当面の最も大事な点は、その戻りの程度いかんであるが、自然の相場と見れば、すでに一節、二節の運行スパンも悪化しており、二十六日か翌二十八日に急騰出来なければ、当分整理相場を続ける、と見るほかない。その場合は、差し当たり四二〇〇ポイント前後が一つの問題点であるが、かりにそこまで突っ込んだとすれば、その後半値近い戻りがあったとしても、アトは面白くない。当然三尊天井を考えねばならぬわけであるが、しかし、銘柄別に見れば、これまでのように、循環的にあおろうと思えば、まだ十分あおれる、と見られるものは相当ある。

従って、一兩日の戻りに乗じて、もし大きく買いあおる、ということになれば、新高値に持ってゆくことも、必ずしも不可能ではあるまいが、しかし、その場合でも、相場の短命化を考えて、あまり強気にならぬ方がよい。何分にも、すでに十月九日以来、七カ月近く一一四五ポイント上げた相場である。これ以上の高値は、ことにそれが、あおりをかけられた高値は、とかく高値つかみに終わりやすいということを、プロ以外の人は忘れてはいけない。

アト数日の相場の経過を見れば、もっとハッキリする、と思うが、今のところ、相場つきはかなり悪いにもかかわらず、まだ決定的なものは出ていない、勢い騰落両面について述べざるを得なかったが、ということは、相場つきにつり込まれて、下手に売り込めば、まだいつ踏まされるかもわからない半面、むろん、当分の間は買うことも出来ないからである。要するに、しばらくは決定待ちに見送るのが一番賢明、というところである。

相場もここまできると、変化日も多くなってくるが、差し当たり四月二十二日、二十三日、二十四日、二十六日、五月二日、七日、十五日、十九日などである。このほかにも、能動的なもの、受動的なものなど、いくつも出てくるはずであるが、いずれが高値におけるもの、いずれが安値におけるものであるかは、読者自身できめて見てほしい。

＝四月二十二日＝

昭和 50 年 4 月 26 日 日本証券新聞掲載

2013/02/24 第 348 号

均衡表の急所(79) 一目山人

《プロ以外は無関心 遠からず相場はきまる》

四月二十二日記の今回は「しばらく騰落に無関心、相場につり込まれぬこと」と題して「その後四月三日のザラバで四五〇ポイントがらみを実現した。しかしこれは、前回にも書いた計算値であり、二十五日からの一節にも相当する。むろんこれで天井打ち、ときめつけるわけにはゆかないが、とにかくひと反動必至となって、四月八日というきわめて重大な対等変化日をザラバ安値四三七五ポイントで経過。十四日にまた四五〇ポイント戻したが、今日二十二日には四三五五ポイントと、四月八日の安値をも下回ってきた。しかし、この相場は、戻り高値からすでに七陰連であり、しかも三月十三日の高値に対するS点ともなっている。そのS点はアトの問題として、今日の二十二日、明日の二十三日は、ちょっとした変化日であるから、ここではとにかく一応の戻しを入れるはずである。当面の最も大事な点は、その戻りの程度いかんであるが、二十六日か翌二十八日に急騰出来なければ、当分整理相場を続ける。しかし銘柄別に見れば、これまでのように、循環的にあおろうと思えば、まだ十分あおれるものは相当ある。従って、一両日の戻りに乗じて、もし大きく買いあおる、ということになれば、新高値にもってゆくことも、不可能ではないが、しかし、その場合でも、あまり強気にならぬ方がよい。すでに七カ月に近い反騰であり、プロ以外の方は、とにかく高値つかみに終わりやすい、ということをおぼえてはいけない。変化日は、四月二十二日、三日、四日、六日、五月二日、七日、十五日、十九日などである」旨を書いた。

その後は、二十二日の変化日に、日経ダウ四三五五ポイントの安値引けを最後に、予定通りの反騰に転じた。二十三日、四日、六日と変化日は続いたが、二十六日、遅行スパン一期の接点において急反騰、一節の遅行スパンもたちまち好転。すでに新高値への進出は必至となったわけであって、連日わずかながら、高値を改め、五月十二日にはザラバで四五八〇の高値をつけた。

前回には、ただたんにタイトルに書いただけで、余りくわしいことは書かなかったが、前回以来、新高値に出る相場であっても、むろんウルのには早過ぎるし、だからといって、カウにはすでに遅きに過ぎるということであったのである。

事実、その後も日経ダウは騰勢を続けてきたが、しかし銘柄別に見た騰勢はきわめて不安定であって、極端に言えば、朝令暮改、騰落まことにはなはだしいものがある。これには、全く理由のないことではないようである。相場をリードして、玉数さえ集めれば、それはまとまって引き取り手が出て来る。時々、値段をおさえるのも、そのためのようである。従って、表面から見たほど、不自然かつ、人為的なものではないかも知れない。しかし四月三日以来、プロ以外のものが利益することは決して容易ではない。

その点においては、おそらく今回も、同じことを繰り返して良いであろう。事実、前述の五月十二日は、前回には書かなかったが、二月十九日の押し目安値からの、きわめて重大な変化日であった。そのために、翌十三日には、約五〇ポイントの急落となったが、本来なれば、これをもって少なくともやや顕著な反動安を入れるはずであって、昨十四日の

戻りは良いとしても、今十五日に戻せるはずはないのである。ところが今日は四五五〇ポイント台に戻しており、いかにも強い相場であり、まだあおればあおれる力は十分である。しかしここはきわめて重大なところであるだけ、十二日の高値と十三日の安値をもって、小幅であるが、限定線として、今後しばらくの相場を見てゆきたい。

由来限定線はあとで破った方が有力であるが、この場合は、あまりそれにこだわる必要なしと見ても、まず下限を切れば、差し当たり四月二十二日の安値が問題となるが、もし一気に新高値に出て、それにやや調子がついてくれば、それが四五九三ポイントであれ、四六五〇ポイントを取ったあとであれ、とにかく急反落を免れないであろう。

日経ダウはとにかく、東証単純を見れば、そこまでゆかなくとも、反動来は早いと思われるが、それについて、この際とくに大事なのは、遅行スパンである。一期のそれは、一月二十八日、三八八五以来、実にたんたんとして、好転の一途をたどっている。それはかりでなく、一節、二節の遅行スパンもわずかな好転が二度あっただけであるから、今後はとくにこれらの向背が注目されねばならない。

相場もここまでくれば、大いにわかろうとしなくとも、ひとりでに、自然にわかってくるのが遠くない。したがって、今はゆうゆうたる心境であるが、およその相場は、もうけたあとには損をしやすい。しかしもうからなかったあとはもうけやすい。決してあせることはなく、プロ以外はこれからあせることは一層良くない。なお、単純についてのことや、とくに大事な大勢観、それに関連のふかいS点については、次回にゆずることにする。ところで当面の変化日は、五月十九日、二十二日、六日、七日、六月五日、二十三日などであるが、このうち五月二十二日、七日、六月二十三日などが相場によっては大事である。
=五月十五日=

昭和 50 年 5 月 21 日 日本証券新聞掲載

2013/03/10 第 350 号

均衡表の急所(80) 一目山人

《なお基調に変化なし 二日の水準割れは悪い》

五月十五日記の前回も「プロ以外は無関心、遠からず相場はきまる」と題して「前回以来、新高値に出る相場であっても、むろんウルには早過ぎるし、だからといってもカウにはすでに遅きに過ぎる。事実、その後も日経ダウは騰勢を続けてきたが、しかし銘柄別に見た騰勢はきわめて不安定であって、四月三日以来、プロ以外のものが利益することは決して容易ではない。その点においては、今回も同じ事を繰り返して良いであろう。事実、前述の五月十二日は、二月十九日の押し目安値からの、きわめて重大な変化日であった。そのために、翌十三日には約五〇ポイントの急落となったが、本来なれば、今十五日に四

五五〇ポイントまで戻せるはずはない。いかにも強い相場であり、まだあおればあおれる力は十分である。しかし、ここは重大なところであるだけ、十二日の高値と十三日の安値を持って、小幅であるが、限定線として今後しばらくの相場を見てゆきたい。

由来、限定線はあとで破った方が有力であるが、まず下限を切れば、差し当たり四月二十二日の安値が問題となる。しかし、もし一気に新高値に出て、それにやや調子がついてくれば、それが四五九三であれ、四六五〇を取ったあとであれ、とにかく急反発を免れないであろう。いずれにしても、プロ以外はこれからあせることは一層良くない。当面の変化日は、五月十九日、二十二日、六日、七日、六月五日、二十三日などである」旨を書いた。

その後、今日までの経過を見れば、今回はとくに書く必要もないと思う。前回の延長としても良いほどであるが、しかし、それだけにまたことのほか、待っておられる読者も多い、と思うのであえて書くことにする。

前回の限定線五月十二日の高値と十三日の安値に対して、十六日一節の遅行スパンが悪化、十九日の変化日、十三日の安値を下回って引けた。以来、二十二日の翌日がとくに下げ、六月二日の四三七八ポイントまで下げたが、この三日前に一期の遅行スパンもすでに悪化している。小さいながらも限定線を下回り、しかも一期の遅行スパンも久しぶりに悪化したのであるから本来なれば、ここで大きく戻れるはずはない。戻るにしても、四月二十二日の安値を下回り、S点を解消してからであるはずだが、そうなれば、相場もN三尊となり、前途はきわめてわかりやすくなるわけである。

しかし私は、六月三日の相場を見て、当然戻る、と考えた。私はかりではなく、同人会幹事も、そう考えた。なぜそう考えたか、といえは限定線を下回って、すでに二節を経過しているにもかかわらず、余りに下げ幅が小さ過ぎる。ことに突っ込む相場なれば、五月三十日か三十一日には、大きく崩れていなければならない。

念のために大引け三本新値足を見れば、六月二日において、すでに一節に及んでおり、三日には日足で六陰連である。さらに五月六日から見れば、八陽十六陰であって、いかにも人気の悪い割りには下げ渋りの相場であって、おそらくこれは知らずしらずの間に、良くウリ込んだものであろう。

かくて、四日、五日、六日と、下げに比べれば、やや強力に戻した。週末は陰線になったものの、週間足は前陰線に対して陽Y線となっている。この戻りにおいて、しみじみと感じることは、四月十日以来の相場、とくにダウのむずかしさであって、おそらくこのようなむずかしさは、九年目に一度あるかないかであろう。もちろん、このダウのむずかしさは、銘柄別における余りにも極端な、とくに騰落つねなき、ハ行現象によるものであるが、これでは、よほどの達人か、法人か業者以外は手の出しようがない相場である。

そのために、前二回にわたって、プロ以外は近寄らないことを書いてきたのである。今後も相場が本当にきまるまでは、決して焦らぬことである。自由主義経済下においては、相場はいつでもある。本当に相場のわかった時にのみタッチすることである。

ところで、今日の週末は前週の陽Y線に対して、きわめて小幅な週間足に終わったが、これは決して悪くない経過であって、依然として循環物色は続けられるであろう。

問題は前回の限定線五月十二日の高値であるが、これはきわめて重大な変化日でもあり、これを上回ってくれば、前回に書いたとおりになる可能性が強い。このさい大事なことは、やはり遅行スパンに注目することであるが、なにぶんにも非常にむずかしい相場であるだけ、念のために六月二日の安値と七日の高値を差し当たりの限定線として置くことにしよう。今のところ、容易に考えられぬことではあるが、もし六月二日の安値を下破るようであれば、それで相場は完全にきまってしまう。

当面の変化日は、六月十九日、二十三日、七月一日、二日となっているが、極端なハ行現象がやまねば、相場の基調は容易にかわらないであろう。

＝六月十四日記＝

昭和 50 年 6 月 19 日 日本証券新聞掲載